

畑田遺跡
中野遺跡
発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1995-533-01

1995

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

1995
523
6

はたけ だ 遺 跡
畑 田 遺 跡
なか の 遺 跡
中 野 遺 跡
発掘調査報告書



1995-086

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



畑田遺跡全景(南から)



中野遺跡全景



畑田遺跡SD101(Q-9)遺物出土状況(東から)



畑田遺跡出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、畑田遺跡、中野遺跡の調査成果をまとめたものです。

畑田遺跡、中野遺跡は山形県の北西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は人口約10万の小城下町です。主な産業は豊かな自然にめぐまれた米づくりが中心ですが、近年庄内国際村を建設して、国際化をめざして活動しています。

調査では畑田遺跡から古墳時代前期を中心とする集落跡が、中野遺跡からも同じく古墳時代の集落跡が見つかり、この時代の庄内地方の貴重な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清 耕

例 言

- 本書は東北横断自動車道酒田線(朝日～酒田間)建設工事に係る「畑田遺跡」「中野遺跡」の発掘調査報告書である。
- 調査は日本道路公団仙台建設局鶴岡工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 調査要項は下記のとおりである。

調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
遺跡名	畑田遺跡(ATOH D)	遺跡番号	昭和63年度登録
所在地	山形県鶴岡市大字大淀川字畑田		
調査期間	発掘調査	平成5年4月1日～平成7年3月31日	
	現地調査	平成5年5月12日～平成5年11月19日	125日間
	報告書作成	平成6年4月1日～平成7年3月31日	
発掘調査担当	調査研究課長	佐々木洋治	
	主任調査研究員	野尻 侃	
	調査研究員	眞壁 建	丸山 晶子
		水戸 弘美	阿部 明彦 齊藤 主税
遺跡名	中野遺跡(ATON N)		
遺跡番号	昭和63年度登録		
所在地	山形県鶴岡市大字大淀川字中野		
調査期間	発掘調査	平成5年4月1日～平成7年3月31日	
	現地調査	平成5年5月17日～平成5年9月22日	41日間
	報告書作成	平成6年4月1日～平成7年3月31日	
発掘調査担当	調査研究課長	佐々木洋治	
	主任調査研究員	野尻 侃	
	調査研究員	眞壁 建	丸山 晶子
資料整理担当	調査研究課長	佐々木洋治	
	調査研究員	眞壁 建	丸山 晶子
	嘱託職員	黒坂 広美	
- 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局鶴岡工事事務所、鶴岡市教育委員会の協力を得た。現地調査と報告書作成にあたって、金子拓男、菊地政信、小林克、坂井秀弥、田嶋明人、辻秀人、折木英道、中屋克彦、浜崎悟司、久田正弘、藤澤敦、安英樹、柳沼憲治、吉田博行、和田聡(五十音順)の各氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 本書の作成・執筆は眞壁建、丸山晶子、黒坂広美が担当した。編集は尾形興典、須賀井新入、水戸弘美、眞壁建が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 委託業務は下記のとおり実施した。

畑田遺跡	遺構の写真実測	株式会社バスコ
	放射性炭素年代測定	株式会社パレオ・ラボ
	粒度分析	株式会社パレオ・ラボ
- 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

- 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST・・・	竪穴住居跡	SD・・・	溝跡	SG・・・	河川跡
SK・・・	土坑	SP・・・	単独の柱穴	EK・・・	遺構内土坑
EP・・・	遺構内柱穴	SX・・・	性格不明遺構		
P・・・	土器	W・・・	木製品		
RP・・・	一括・登録土器	RQ・・・	登録石製品		

なお、今次の調査では周溝をもつ住居跡としての可能性が考えられるST103、150なども、便宜上竪穴住居を示す記号であるSTを使用した。

- 遺構番号は現地調査段階での番号を報告書でも踏襲した。
- 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - グリッドの南北軸は、畑田遺跡はN-64° 7' 15"-E、中野遺跡はN-59°24' 3"-Wを測る。
 - 遺構実測図は1/40・1/60・1/80・1/200・1/400の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - 遺構実測図のスクリーントーンは下記のとおりである。

	炭化物		黄灰色粘土		砂
--	-----	--	-------	--	---
 - 遺物実測図・拓影図・図版は1/3で採録し、遺物実測図・拓影図には各々スケールを付した。
 - 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表は共通のものを、図版は別番号とした。その際、便宜をはかるため遺物観察表にて対照表を付した。
 - 基本層序、遺構覆土の色調の記載については、昭和45年度版農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目次

第I章 調査に至る経過	1
第II章 遺跡の立地と調査	1
第III章 調査の方法と経過	4
第IV章 畑田遺跡	6
1 遺跡の概要	6
2 遺構と遺物	2
住居跡	
S T103住居跡・S D100溝跡	9
S T150住居跡・S D249溝跡	16
S T201住居跡・S D202溝跡	22
S T181住居跡	28
S T182住居跡	30
S T232住居跡	32
3 土坑	35
4 柱穴	40
5 溝・竈状遺構	41
S D101溝跡	44
6 性格不明遺構	57
7 河川跡	58
8 鞍部・遺構外遺物	64
9 まとめ	78
第V章 中野遺跡	79
1 遺跡の概要	79
2 遺構と遺物	2
土坑・柱穴・溝跡	82
S X 5～7・16性格不明遺構・遺構外遺物	86
3 まとめ	91
第VI章 畑田遺跡・中野遺跡まとめ	94

表

表-1 調査工程表	4
畑田遺跡	6
表-2 遺構観察表 住居跡・溝跡	68
表-3 遺構観察表 土坑・柱穴	69
表-4 遺構観察表 柱穴・性格不明遺構	70
表-5 遺物観察表(1) 土師器	71
表-6 遺物観察表(2) 土師器	72
表-7 遺物観察表(3) 土師器	73
表-8 遺物観察表(4) 土師器・須恵器他	74
表-9 遺物観察表(5) 土師器・須恵器他	75
表-10 遺物分布表他	76
表-11 遺物点表	92
中野遺跡	97
表-12 遺構観察表	97
表-13 遺物観察表	93

挿 図

第1図 遺跡位置及び周辺の遺跡	3
第2図 調査区概要図	5
畑田遺跡	
第3図 畑田遺跡遺構配置図・基本層序	7
第4図 S T103住居跡・S D100溝跡	10
第5図 S D100溝跡土層出土状況(1)	11
第6図 S D100溝跡土層出土状況(2)	12
第7図 S D100溝跡土層出土状況(3)	13
第8図 S D100溝跡土層出土状況(4)	14
第9図 S T103住居跡・S D100溝跡出土遺物	15
第10図 S T150住居跡・S D249溝跡	17
第11図 S D249溝跡土層出土状況(1)	19
第12図 S D249溝跡土層出土状況(2)	20
第13図 S D100溝跡・S T150住居跡・S T201住居跡・S D202溝跡出土遺物	21
第14図 S T201住居跡・S D202溝跡	23
第15図 S D202溝跡土層出土状況(1)	24
第16図 S D202溝跡土層出土状況(2)	25
第17図 S D202溝跡土層出土状況(3)	26
第18図 S T201住居跡・S D202溝跡出土遺物	27
第19図 S T181・S T182竈穴住居跡出土遺物	28
第20図 S T181竈穴住居跡	29
第21図 S T232竈穴住居跡出土遺物	30
第22図 S T182竈穴住居跡	31
第23図 S T232竈穴住居跡土層出土状況	32
第24図 S T232竈穴住居跡	33

第25図 S T232竈穴住居跡・S K111-176・203土坑出土遺物	34
第26図 S K111-105・125・132・135・137土坑	36
第27図 S K145・146・174・175・177土坑	37
第28図 S K178・185・200・203・215・233・235土坑	38
第29図 S K111・229土坑他出土遺物	39
第30図 S P122・139・143・168・205・267柱穴	40
第31図 S P209・211・214・219・247・248柱穴	41
第32図 竈状遺構	42
第33図 S D129・183溝跡	43
第34図 S D101溝跡全体図	45
第35図 S D101溝跡土層断面	46
第36図 S D101溝跡土層出土状況(1)	47
第37図 S D101溝跡土層出土状況(2)	49
第38図 S D101溝跡土層出土状況(3)	49
第39図 S D101溝跡土層出土状況(4)	50
第40図 S D101溝跡下層土層出土状況(5)	51
第41図 S D101・S D249溝跡出土遺物(1)	53
第42図 S D101・S D249溝跡出土遺物(2)	53
第43図 S D101・S D249溝跡出土遺物(3)	54
第44図 S D101溝跡出土遺物(4)	54
第45図 S D101・S D249溝跡出土遺物(5)	56
第46図 S X107・110性格不明遺構	57
第47図 S X156・130性格不明遺構	58
第48図 河川跡	59
第49図 河川跡土層断面	60
第50図 河川跡土層出土状況	61
第51図 河川跡出土遺物(1)	62
第52図 河川跡出土遺物(2)	63
第53図 鞍部他出土遺物(1)	64
第54図 鞍部他出土遺物(2)	65
第55図 鞍部他出土遺物(3)	66
第56図 4区鞍部土層断面	67
中野遺跡	
第57図 中野遺構配置図	80
第58図 中野基本層序	81
第59図 S K1・4・9・11・21・37・39・56土坑	83
第60図 S D 9・S D21溝跡	84
第61図 遺構内出土遺物	85
第62図 S X 5性格不明遺構	87
第63図 S X 6性格不明遺構	88
第64図 S X 7性格不明遺構	90
第65図 S X16性格不明遺構	89
第66図 遺構外出土遺物	91
第67図 S D101溝跡・遺構外出土遺物	97
第68図 土師器分類図(1)	92
第69図 土師器分類図(2)	98

図 版

図版1 畑田遺跡遺構・中野遺跡調査前状況	
図版2 調査風景	
畑田遺跡	
図版3 基本層序・遺構検出状況	
図版4 遺構検出状況	
図版5 S T103住居跡・S D100溝跡	
図版6 S T201住居跡・S D202溝跡	
図版7 S T150住居跡	
図版8 S T181竈穴住居跡	
図版9 S T182竈穴住居跡	
図版10 S T232竈穴住居跡	
図版11 S K111土坑	
図版12 S K125・132・133・145・165・175・178・200土坑	
図版13 S K129・174・176・203・233土坑	
図版14 S P122・139・143・168・205・207・247柱穴	
図版15 S D101溝跡・Q-9～11	
図版16 P・R・Q土坑状況	
図版17 竈状遺構・S D159・153・157・158・129・183溝跡	
図版18 S X156・107・110・120・131・234性格不明遺構 他	
図版19 河川跡土層出土状況・トレンチ土層断面	
中野遺跡	
図版20 A区検出状況全景	
図版21 S X 5～7性格不明遺構	
図版22 S X 5～7性格不明遺構	
図版23 S X10性格不明遺構	
図版24 S X16性格不明遺構	
図版25 D 9・31溝跡	
図版26 S K1・39・21・56土坑	
図版27 B区検出状況	
畑田遺跡	
図版28 出土遺物 S D100溝跡・S T150住居跡 他	
図版29 出土遺物 S D100溝跡・S T150住居跡・S D249溝跡 他	
図版30 出土遺物 S D202溝跡・S T201・181住居跡 他	
図版31 出土遺物 S D202溝跡・S T201・150住居跡	
図版32 出土遺物 S T181・22住居跡・S K229・111土坑・S D100溝跡 他	
図版33 出土遺物 S K111土坑・S T232住居跡・S K176土坑	
図版34 出土遺物 S K185土坑・S T232住居跡・S K111土坑 他	
図版35 出土遺物 S K203・111土坑・S D101溝跡 他	
図版36 出土遺物 S D101溝跡 他	
図版37 出土遺物 S D101溝跡	
図版38 出土遺物 S D101溝跡	
図版39 出土遺物 S D101溝跡	
図版40 出土遺物 S D101溝跡 他	
図版41 出土遺物 S D101・241・244溝跡	
図版42 出土遺物 S D101溝跡 他	
図版43 出土遺物 河川跡	
図版44 出土遺物 河川跡	
図版45 出土遺物 河川跡	
図版46 出土遺物 河川跡	
図版47 出土遺物 鞍部・遺構外出土遺物 他	
図版48 出土遺物 遺構外出土遺物 他	
図版49 出土遺物 河川跡・鞍部・遺構外出土遺物	
図版50 出土遺物 S D101・502溝跡・遺構外出土遺物	
図版51 出土遺物 S T181・河川跡・遺構外出土遺物	
中野遺跡	
図版52 出土遺物 S K1・3土坑・S X7性格不明遺構・S D9溝跡 他	
図版53 出土遺物 S X5・7性格不明遺構・S K56土坑 他	

付 録

I 畑田遺跡の放射性炭素年代測定	1
II 畑田・中野遺跡における埋没物について	2

第I章 調査に至る経過

昭和63年に日本道路公団より東北横断自動車道（朝日～酒田間）建設に伴う分布調査が山形県教育委員会に依頼された。これを受けてA調査（表面踏査）とB調査（試掘調査）が行われた。調査の結果、畑田遺跡では東西140m、南北180m、中野遺跡では東西150m、南北240mの範囲に遺物の散布が認められた。畑田・中野遺跡は古墳時代～中世の遺跡であることがわかり、この両遺跡を含めて31の遺跡が確認された。

平成元年に県営ほ場整備事業の用・排水路工事部分の立ち会い調査を行った。このときの調査区域は今回の発掘区に隣接している。調査は最長220m、幅約2mのトレンチをバックホーで掘り下げた。このおり畑田遺跡では、土坑や溝跡が見つかり、約2箱分の遺物が採集された。時期は土師器の器台や甕などの出土遺物の特徴から古墳時代前期のものであることが判明した。

この後、これらの遺跡が保存されるよう事業側との協議を重ねたが、路線の変更は避け難いこととなった。そのため平成2年には緊急発掘調査を前提として、遺跡の正確な範囲や遺跡のある深さなどの詳しい内容を知るためにB調査が行われた。このときの調査では、10～15mおきに1m四方の試掘坑6カ所を設定し、0.5m～1mの深さまで掘り下げ、このうち遺跡がある証拠となる遺構や遺物を26カ所で確認した。

以上のような経過を踏まえて関係機関との協議を重ね、工事に先立つ記録保存のための緊急発掘調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施することになった。報告書作成のための整理作業は平成6年4月1日より平成7年3月31日の期間に実施した。

第II章 遺跡の立地と環境

遺跡の立地

畑田・中野遺跡は、庄内平野の西南部、県内でも有効の稲作地帯である、鶴岡市大淀川地区に位置する。この大淀川地区は、鶴岡市街からは約2km、日本海までは約5km程で、周囲一帯に水田が広がっており、北西には高館山、南方には金峰山をはじめとする山々が連なっている。また、現在の地形から当遺跡は赤川と大山川の河間低地に位置し、湯尻川と千安川に囲まれた標高12.5mの自然堤防上に立地している¹⁰⁾。庄内地方の遺跡は、古墳時代より低地への進出がみられ、奈良・平安時代には自然堤防に高率で分布し¹¹⁾、当遺跡もそれに当てはまる。しかし、この自然堤防も一旦、赤川や大山川が氾濫すれば、水没してしまうこともあったと思われる。現代のように河川の整備がなされていなかった古代においては、日常的に起こりうることであったであろう。

現在この地は稲作地帯となっているが、当時の稲作については、同じ庄内地方の北部から遠賀川系土器が出土し¹²⁾、かなり早い時期から稲作が始められていたことが考えられる。畑田遺跡が形成された古墳時代には既に集落が立地した自然堤防の背後には、当然のごとく後背湿地が形成されそこでは稲作が行われていたと考えられる。

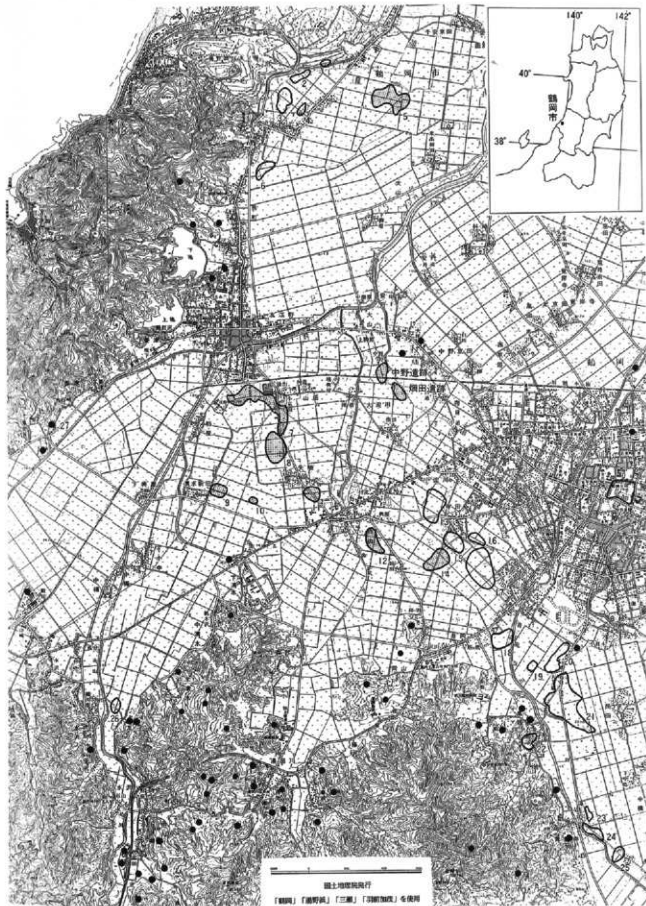
歴史的環境

第1図は、鶴岡市の東南部と南部の一部を除いた範囲で、遺跡範囲の判明しているもの、古墳時代の遺跡、その他の遺跡に分けて現在確認されている位置を示したものである。また、昭和63年度以降調査が行われ、遺跡範囲の判明しているものを線で囲み、その中でも古墳時代の遺跡はスクリーン・トーンで示した。現在、鶴岡市の遺跡は152ヶ所確認されているが、その殆どが湯田川・金峰山・虚空蔵山麓にあり、縄文時代・中世の遺跡が多く分布する。それに対して、平野には昭和62年度から始められた県営ほ場整備事業鶴岡西部地区により調査された遺跡や昭和63年度から始められた東北横断自動車道に関わって発見された遺跡が数多く分布し、その殆どが古墳～平安時代の遺跡である。特に、西南部には古墳時代の遺跡が数多く分布している。

これまでの調査から、古墳時代中期後葉から後期初頭の土器が出土した矢馳B遺跡・清水新田遺跡、後期中葉の土器が出土した矢馳A遺跡・助作遺跡・山田遺跡・閉地田遺跡が現在確認されている¹¹⁹⁾。これらの遺跡で最も早く発見された遺跡は助作遺跡で、大正年間、県道工事の際須恵器の甕が出土した。また、清水新田、矢馳A・B遺跡、山田遺跡等の発見は昭和30年代に行われた暗渠管の埋設や水田の整下り工事に際する。特に矢馳A遺跡からは、多数の土師器が出土したことにより、同様の特色を有する土師器を「矢馳式」と呼称するに至った。この矢馳A遺跡は約30年の空白を経て、昭和62年度に調査が行われ、竈穴住居跡・溝跡・土坑等数多くの遺構が確認され、古式須恵器と共に6世紀中葉から後葉の土師器が多数出土したことは記憶に新しい¹²⁰⁾。また、これらの遺跡よりやや北東の下川地区に位置する五百刈遺跡の調査が平成5年度に行われたが、ここからも中期の土師器が出土している。平成6年度に調査が行われた後田遺跡からも竈穴住居に伴って、中期頃の土師器が出土し、この地における古墳時代の様相が次第に解明されつつある。

しかし、上記の遺跡は全て古墳時代中期以降の遺跡であり、これを溯る4世紀にあたる古墳時代前期の遺跡は認められていなかったが、昭和63年度、県営ほ場整備事業に伴う排水管理埋設工事によって、畑田遺跡の立会い調査が行われ、庄内地方における最も早い時期の古墳時代の遺物が掘り出されることとなった¹²¹⁾。それまで、庄内地方において、前期の土師器は藤島町の三和遺跡¹²²⁾と酒田市の関B遺跡¹²³⁾のみで、土器片がわずかに確認されただけであった。昭和63年度の調査においては、トレンチ調査のみであったが、遺構に伴いまとまって古式土師器が出土した。この発見は庄内地方の古墳時代を語る上で大きな画期となったことは言うまでもない。

このように古墳時代の集落跡が次々と発見される一方、未だにこの地において古墳は確認されていない。唯一、明治43年に鶴岡市菱津字火打崎の丘陵突端から6世紀前半の凝灰岩製の長持形組合式石槽が出土しているだけである¹²⁴⁾。この地は平野部よりやや標高が高く、古墳時代の遺跡が集中する鶴岡市西南部を見渡すことができる。しかし、古墳は既に削平され、残念ながらその姿を私たちは見ることができない。以上のことから、日本海沿岸の古墳文化の波及については、庄内地方南西部が現在のところ最北に位置し、多少の変化はあったとしても南からの影響を受けていたことは否定できない。このことは、また和銅2年(709)『続日本紀』に記述される「出羽郡」の存在をも示唆するものと考えられる。



第1図 遺跡位置及び周辺の遺跡(1:50,000)

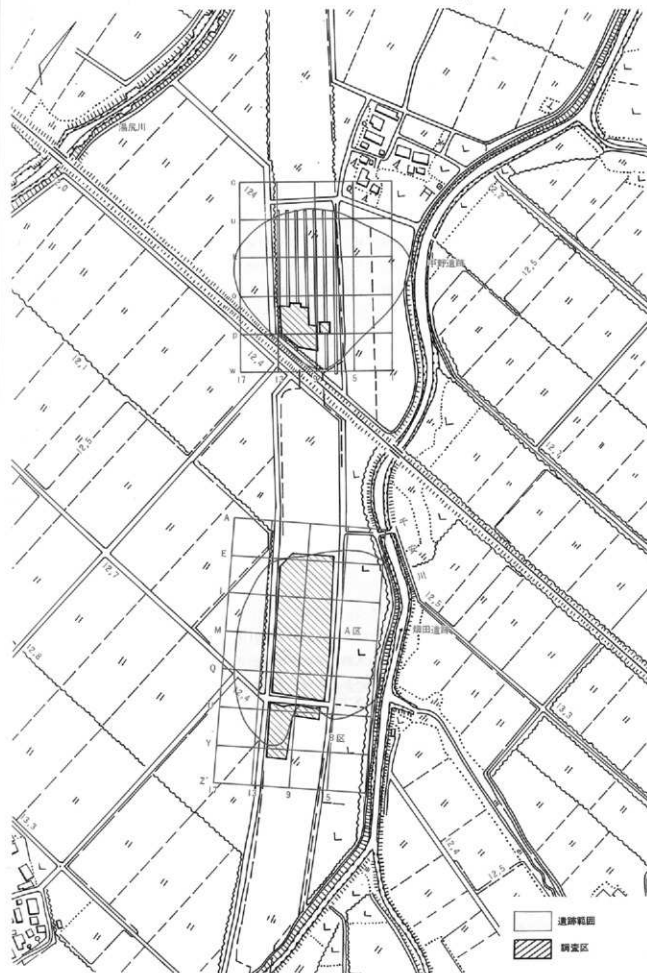
第三章 調査の方法と経過

畑田遺跡のグリッド設定は建設予定道路幅のセンター杭STA159+00とその幅杭を結んでY軸とし、これと直交する線をX軸とした。このSTA159+00センター杭を起点として10m四方のグリッドを設定した。調査区は西側をA区、東側をB区とし、調査総面積は11,060m²である。中野遺跡ではSTA161+80とその幅杭を結んだ線をY軸とし、これに直交する線をX軸とした。STA161+80を起点として10m四方のグリッドを設定した。調査区は南側をA区、北側をB区とした。調査総面積は3,544m²である。

畑田遺跡では重機による表土除去の1回目を5月18日から6月1日まで、2回目を7月6日から7月30日まで実施した。これと併行して面整理及び遺構検出を行い、遺構検出がほぼ終了するのは10月20日である。8月19日から河川跡の遺物集中出土地点などの遺構精査を始める。遺構検出、精査、記録作業を反復しながら、11月10日の中野遺跡と合同で調査説明会を実施し、75名の参加を得た。空中撮影は11月16日から17日まで行った。調査日数は125日間である。中野遺跡の調査は畑田遺跡と併行して行われた。重機によるトレンチ調査を6月1日から4日まで行った。長さ120~170m、幅1.8mのトレンチを7本設定して遺構の密なる部分の発見に努めた。調査区を拡張したのは7月28日から30日まで、面整理及び遺構検出が終了したのは8月5日である。遺構精査は8月23日より開始し、記録作業も含めて終了したのは9月17日である。空中撮影は11月16日に実施した。畑田遺跡、中野遺跡とも11月19日に調査を終了し器材を撤収した。調査日数は41日間である。

表-1 畑田遺跡・中野遺跡発掘調査工程表 (平成5年)

	月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
作業内容								
畑	器材搬入							
	トレンチ調査							
田	重機稼働							
	面整理							
遺	遺構検出							
	遺構精査							
跡	実測図作成							
	写真撮影							
除	写真実測							
	現地説明会							
中	器材撤収							
	トレンチ調査							
野	重機稼働							
	面整理							
遺	遺構検出							
	遺構精査							
跡	実測図作成							
	写真撮影							
除	写真実測							
	現地説明会							



第2図 調査区概要図(S=4,000)

第IV章 畑田遺跡

1. 遺跡の概要

調査区の層序

遺跡の南東部分には旧河道と見られる低地が存在したが、平成元年度のほ場整備の折瓦礫等で埋め立てられている。瓦礫の堆積がひどく除去は不可能と判断されたので調査を行うことはできなかったが、調査中この部分にトレンチを入れて堆積状況を確認してみたところ、この埋め立て部分にも包含層が続いて行く様子が見られた。

本遺跡は前章で述べられているとおり自然堤防上に立地しており、これはA区内をほぼ南北方向に横切っている。遺構が密に分布するO～W-6～11グリッドの部分は地盤が安定しかつ標高も周辺に比べて高くなっている。A区中央に位置するOラインより北西部はST182の位置するF～H-9～11部分を除いて全域が旧河川であり、砂層とシルト層の互層が続く。ここからは地山は検出されていない。

調査区は発掘原因の性質上南北に長い形となる。場所によって層位の違いは大きく見られるが、層序は基本的に4層に大別できる。耕作によって既にII層より上層は削り取られて消滅している可能性が高い。耕作土である第I層、水田・畑の盤土で、平安時代以降の地山であり、遺跡のほとんどを覆っていた灰色粘土質シルトの第II層、第III層は遺物包含層である。ただし時期幅が認められかなりの遺構が重複している。また包含層が認められない部分もあり一様ではない。第IV層は地山である。第II層以下は全てグライ化しており、遺構の検出は困難を極めた。

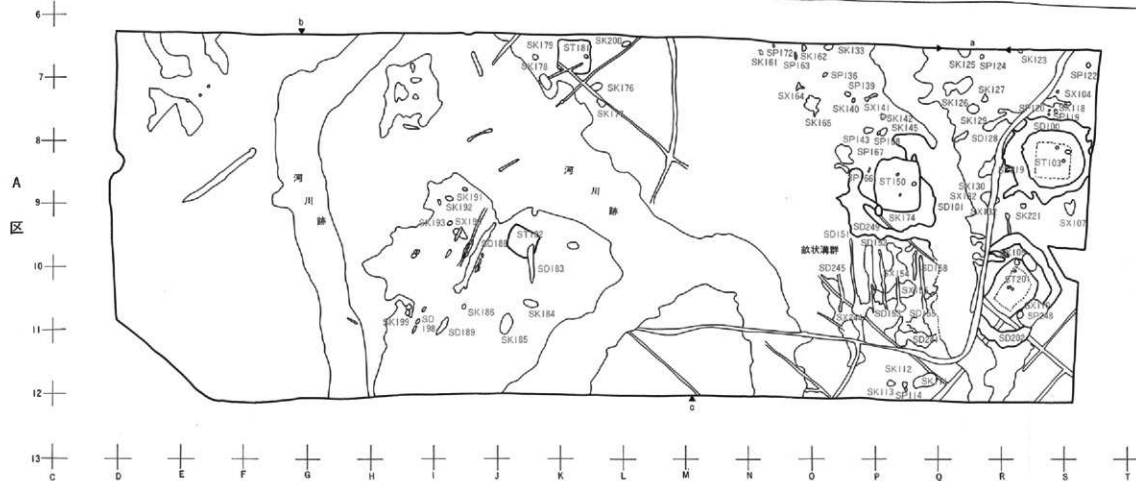
遺構と遺物の分布

遺構は調査区南東よりに多く分布する。この部分はちょうど自然堤防上の微高地となる。調査区を南北に横切る幅50m程の部分にST103・150・201周溝をもつ住居跡が3軒、SK111・125といった土坑、柱穴、SD101大溝、軟状溝が検出されている。この地区はA区O～W-6～11グリッドにあたる。北端にあたる河川に張り出した形のI～L-6～7にはST181住居跡やSK176土坑が分布する。

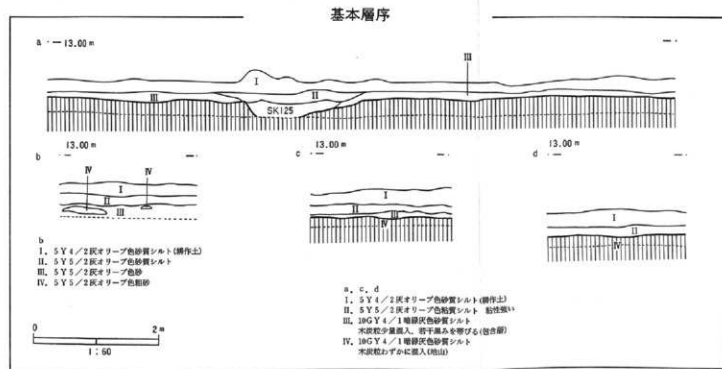
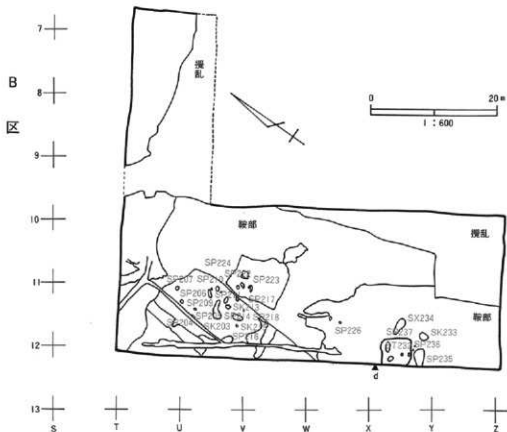
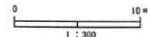
調査区南東部はB区T～U間も微高地の端部にあたり、SK203などの土坑や柱穴群が検出されている。また南東に向かうと次第に標高は下がり、旧河道の鞍部に切られ大きな段差を形成する。U～Z間は次第に地形が低くなるが、ST232が検出されている。

A区の北西部はF～H-9～11グリッド付近を除いて全域が河川跡である。離れ小島のようなこの地区にはST182ほかSD183溝跡やSK185などの土坑が分布する。

今次調査での出土遺物は土師器が主体を占め7,979点を数える。その多くはA区SD101大溝Q-9・10グリッドからである。河川跡からも多くの遺物が出土した。特に住居跡の近辺に多く出土している。J～K-8、I～L-10などである。B区でもU～Z-10・11グリッドで多量の遺物の出土を見る。



平成元年年度検出遺構



第3図 畑田遺跡遺構配置図・基本層序

2. 遺構と遺物

住居跡

S T 103

位置 R～S-7～8、S D 101のほぼ中心に位置する。

平面形・規模 確認面が、既に床面下に達していたため正確な規模・平面形は不明確である。S D 100が廻る周溝を有する建物である。

覆土・床面 中央にやや粘性をもつ4層、粘土質で炭化物を多く含む3層の拡がり認められ、床面と推定される。

柱穴・炉 中央より南東側に2基（E P 230、231）の柱穴が認められる。径0.3～0.4m、深さ0.2mで、2基の柱穴間は2.4mである。中心の炭化物集積部分は、上層で東西5.3m、南北1.7mの範囲で黒色粘土質シルトが不整形に拡がり、その中心部分に径1.7×1.1m、厚さ0.1mを測る楕円形の炭化物堆積層が認められ、炉跡と考えられる。これは、周溝の中心ともほぼ一致しており、E P 230、231との距離は共に約1mを測る。炉跡を中心として西側に対象移動した柱穴が推定されるが、検出に至っていない。E P 231では、柱痕の存在を示す土層の堆積が認められ、その分層面に土師器が出土している。

貯蔵穴等の施設 中央東側に径0.9×0.8m、深さ0.18mの楕円形を呈する土坑が認められた。レンズ状堆積を示す。住居跡廃絶時まで空白であった可能性が高い。

S D 100

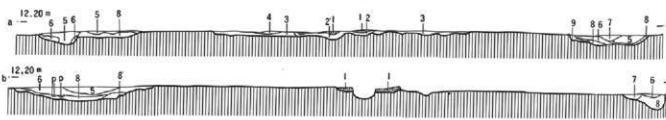
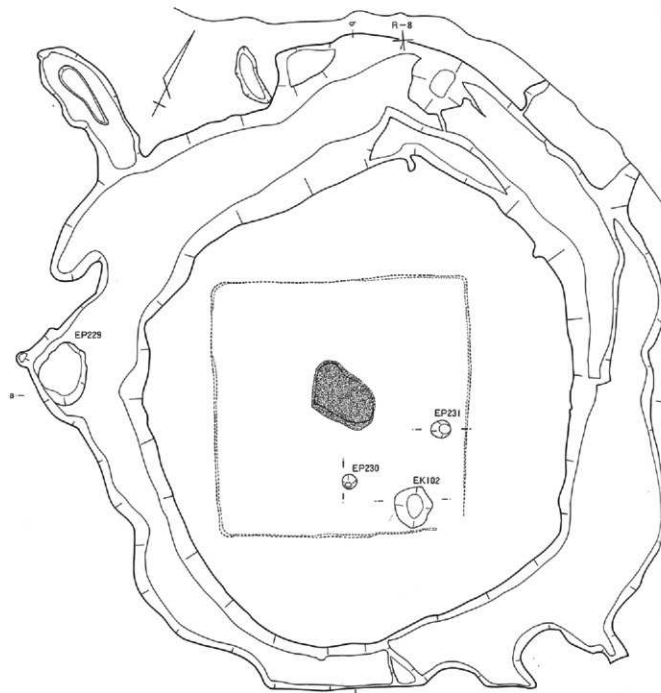
位置 R～S-7～8、S T 103を囲むように位置する。

平面形・規模 外径12～14m、内径9～10mのほぼ円形に廻っており、幅は0.88～3.04mと均一ではなく南側が狭い。深さは、0.16～0.32m程で北側に一段深くなる部分が認められる。

覆土・底面 上層部に0.03m大の炭化物が混入し、その下位に水性堆積の様相を示す土層が認められる。底面は浅く一定せず、凹凸があり土坑状に落ち込む部分がある。西側に延びる溝状の突出部や近接するS X 107、130、132の存在からS D 202、101への接続も否定できないが、検出に至っていない。開口部となるような位置は認められない。

遺物の出土状況 他の遺構に比べ、かなり多くの遺物が出土したが、突出部を中心として西側からより多く、中位層に斜位の出土状況が顕著である。

遺物 1・5・6は器台である。口縁部は1・5は丸い端部、6はシャープにつまみ出し、中位に稜をもつ。2・4は高坏である。3は埴である。8～12は鉢である。大型のもの（8）、小型のもの（10・11）がある。有孔鉢は12と21である。いずれも単孔である。18は壺である。口縁部はやや急に外反し端部で面取りをする。一部つまみ出している。壺は7・13～17・19・20である。7は鉢に近い形態をもつ。口縁部の形態から丸い端部のもの（13）と面取りしているものがある。後者はさらにつまみ出しているもの（15・16・20）とそうでないもの（14・17・19）がある。15は朱彩である。精製土器と考えられる。19は胎土中に粗砂がかなり混入している。ヘラケズリ痕を消そうとしたのかハケメをその上から施しているが、消し切っていない。鉄石英が中位より出土している（図版30～32）。



EP230
12.20 m
1 2
2 3 1

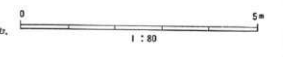
EK102
12.20 m
1 2
2 3 1

EP231
12.20 m
1 2
2 3 1

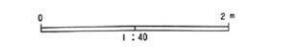
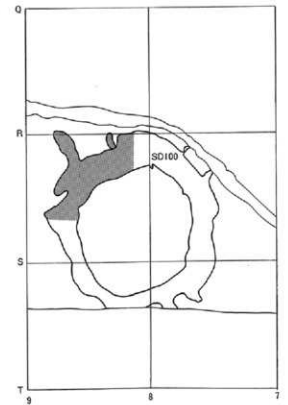
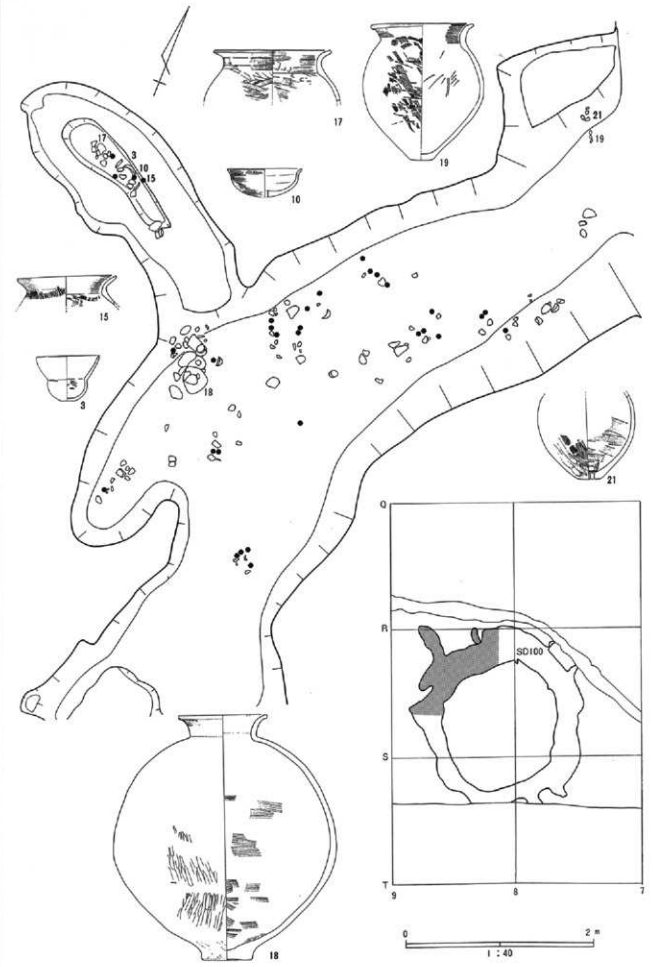
EP230
1. 5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シト質細砂
2. 5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シト質細砂
灰化度が平均的に増進し、下層になるにつれ量が減少する。

EK102
1. 2.5 Y 6 / 4 に近い黄色粘質砂 灰化度5%含む。
2. 2.5 Y 6 / 4 に近い黄色粘質砂 灰化度5%、同色の粘質シトが20%程度含まれる。
3. 2.5 Y 6 / 3 に近い黄色粘質砂

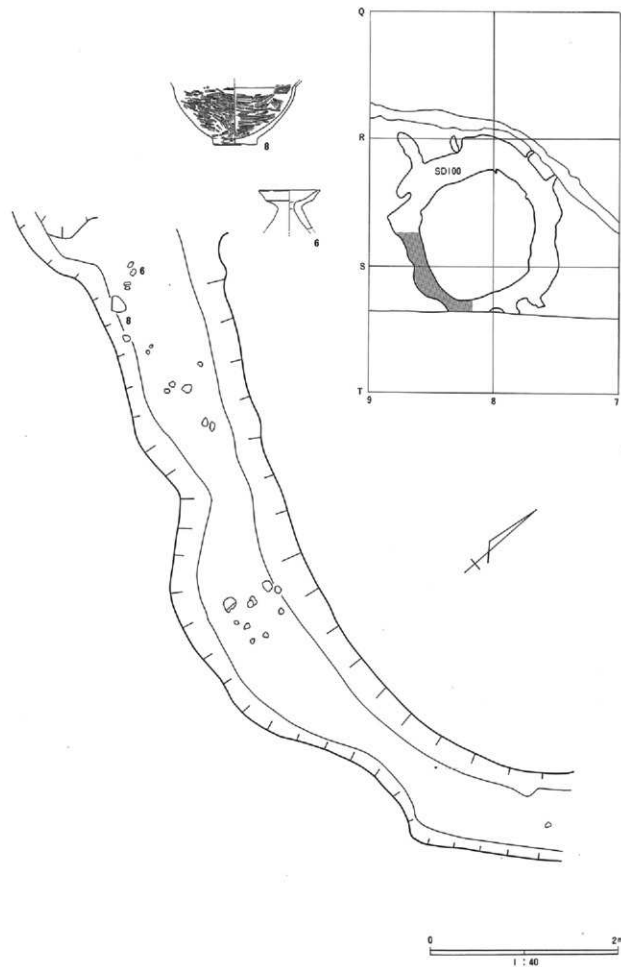
ST103, SD100
1. M Y R 7 / 1 黒色粘土質シト 砂を10%含む。灰化度増進層である。
2. 5 Y 4 / 2 灰オリーブ色砂 1の土及び灰化度を5%含む。灰化度増進層である。
3. 2.5 Y 4 / 2 暗黄褐色砂 同色の粘質シトを5%含む。灰化度を1%含む。
4. 1.5 Y 4 / 2 灰オリーブ色シト質細砂 灰化度を1%含む。やや粘質である。
5. 2.5 Y 4 / 1 灰黄色粘質細砂
6. 5 Y 4 / 2 灰オリーブ色細砂 1の土の3cm大ブロック状砂をさらに10%含む。
7. 5 Y 4 / 2 灰オリーブ色細砂
8. 5 Y 4 / 2 灰オリーブ色細砂 1の土及びオリーブ黄色シトと5mm大ブロック状砂を5%含む。
9. 1.5 Y 4 / 2 灰オリーブ色細砂 灰化度を1%含む。



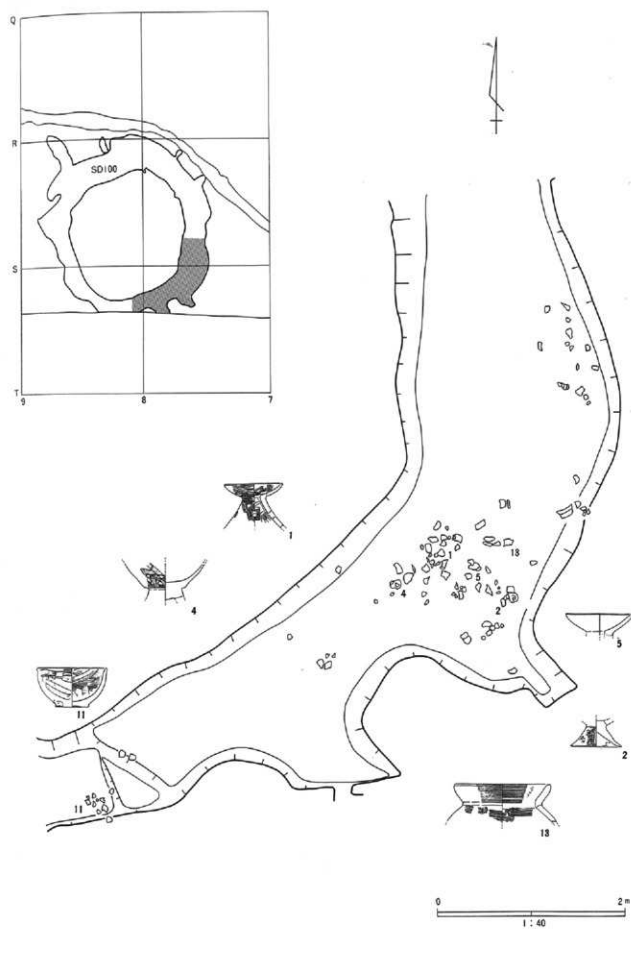
第4図 ST103住居跡・SD100



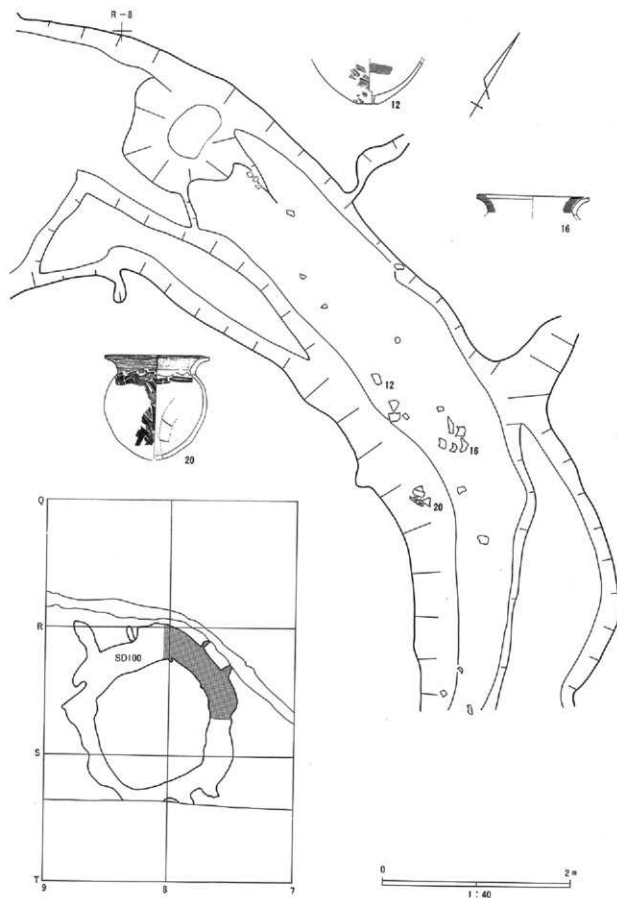
第5図 SD100溝跡土器出土状況(1)



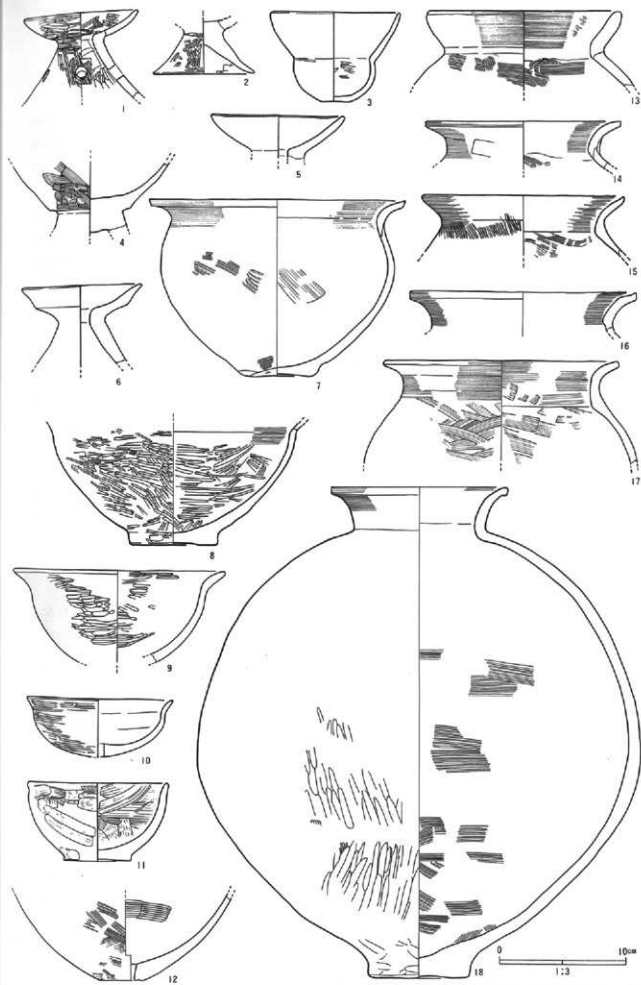
第6図 SD100溝跡土器出土状況(2)



第7図 SD100溝跡土器出土状況(3)



第8圖 SD100溝跡土器出土状況(4)



第9圖 ST103住居跡・SD100溝跡出土遺物

ST150

位置 P-8、SD101の北側に位置する。

平面形・規模 長軸(東西)8.16m、短軸(南北)7.6mを測り、隅丸方形を呈する。北西、南東方向に広がる可能性も考えられるが、壁の崩落が著しく明確なプランを把握できない。実線部分は、溝状に掘り込まれており、破線部分は不整形形を形成するが、ST150はSD249にも囲まれており、どの範囲を建物域とするかは検討を要する。

覆土・壁・床面 破線部分は炭化粒の混入が少なくやや固く安定しているのに対し、実線部分は炭化粒・土器片を含む。実線部分を破線部分より0.05~0.2m掘り下げたところ、底面は平坦で下端の立ち上がりの一部を確認でき、北東側が深く、南側は浅く認められた。また、東側には長さ3.3mの落ち込みが認められたが、位置・検出状況等から住居に伴う遺構かST150より新しい土坑と考えられる。

柱穴・炉 EP259、260、261は、ST150の支柱穴と考えられ、EP間の距離は約2.8mを測る。また、中央に径1.8~1.2mの楕円形に黒褐色粘土質シルトが拡がり、その下位に径0.7×0.5m、厚さ0.1mの炭化物堆積層が認められ、炉跡と考えられる。

貯蔵穴等の諸施設 破線部分の南端には、砂層が1.2×1.6mの範囲に拡がり、その中央には径0.5m範囲で粗砂が認められる。また東側には、幅0.05~0.25m、深さ約0.1mの溝が検出された。

遺物の出土状況 EP259東側と東側土坑内にまとまった出土がみられるが、中位層に斜位で出土していることから外部からの流入が考えられる。底面からは破片数点の出土がみとめられる。

遺物 22は埴である。口縁部下端の屈曲が強い。体部中位が最も膨らみ球状を呈する。端部はやや直立する。朱彩。23~26は鉢である。25・26を除き口縁部が外反するタイプで、平底である。

SD249

位置 O~Q-7~9に位置し、SD101より分岐し、ST150を囲むように廻る。

平面形・規模 内径10~13m、外径12~18mを測る不整形形で、北側に幅7mの開口部が認められる。概 北西風の強いこの地で開口部が北側にあることに疑問が残るが、地山面が東~北にかけて微高となることなど地形的な要因に起因すると考えられる。開口部北側前方には、柱穴・土坑のまとまりが認められる。

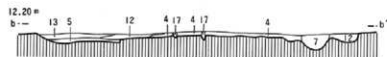
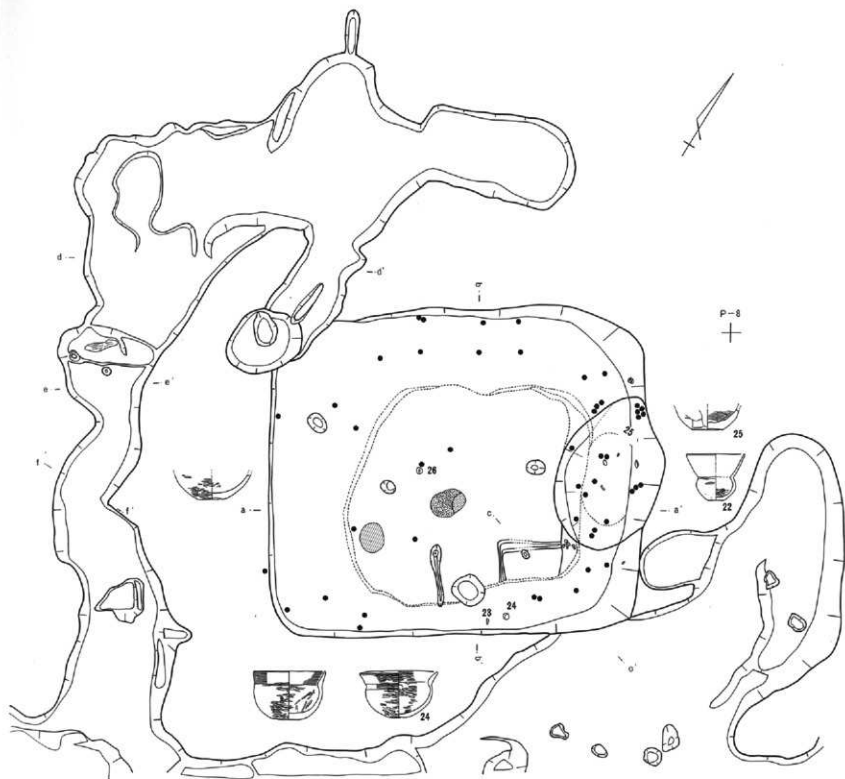
覆土 レンズ状堆積を示し、壁の崩落土が見られる。深さは0.2~0.24mを測る。南側でSD101と接続する。

遺物の出土状況 SD101に接続する付近の南東部分に多く、数カ所にまとまって出土している。

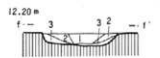
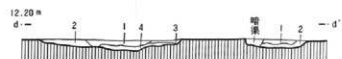
遺物

28は鉢で口縁部が外反するタイプである。29は直口壺と推定される。27は台付鉢である。口縁部はほぼ直立し端部を丸くおさめる。体部は膨らみをもつ。調整は2次焼成のため外面にミガキ、内面にハケメをわずかに確認できるにすぎない。壺は小破片のみであるため図版のみとした(図版29参照)。

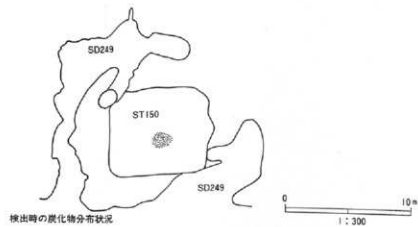
方向
 象部
 9に
 立・
 2下
 2に
 150
 3。
 7×
 1で
 3に
 は
 底
 。
 て
 。
 D
 る。
 外
 め



- ST150
1. 2.5V4 / 2相沢黄色砂質シルト 木炭、木炭粒多量に混入。
 2. 5YR4 / 6赤褐色細砂
 3. 2.5V5 / 2増沢黄色シルト 木炭粒混入。
 4. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 木炭粒ごくわずかに混入。3より色調が明るく、
 5. 5Y5 / 2灰オリーブ色砂質シルト 木炭粒わずかに混入。
 6. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 木炭粒多く混入。
 7. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 3とほぼ同質だが木炭粒多く混入。
 8. 5Y5 / 2灰オリーブ色砂質シルト 木炭、木炭粒多く混入。
 9. 5Y5 / 2灰オリーブ色砂質シルト 1と2より木炭粒少なく色調が若干暗く、
 10. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 木炭粒多量に混入。
 11. 2.5V5 / 2増沢黄色シルト 木炭粒やや多量に混入。
 12. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 色調暗く、木炭粒微量に混入。
 13. 5Y5 / 2灰オリーブ色砂質シルト 木炭粒少量混入。
 14. 5Y5 / 2灰オリーブ色砂質シルト 木炭粒やや多量に混入。
 15. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 中々やや多い。
 16. 2.5V5 / 2増沢黄色砂質シルト 木炭粒多量に混入。
 17. 5Y2 / 1褐色灰化物質

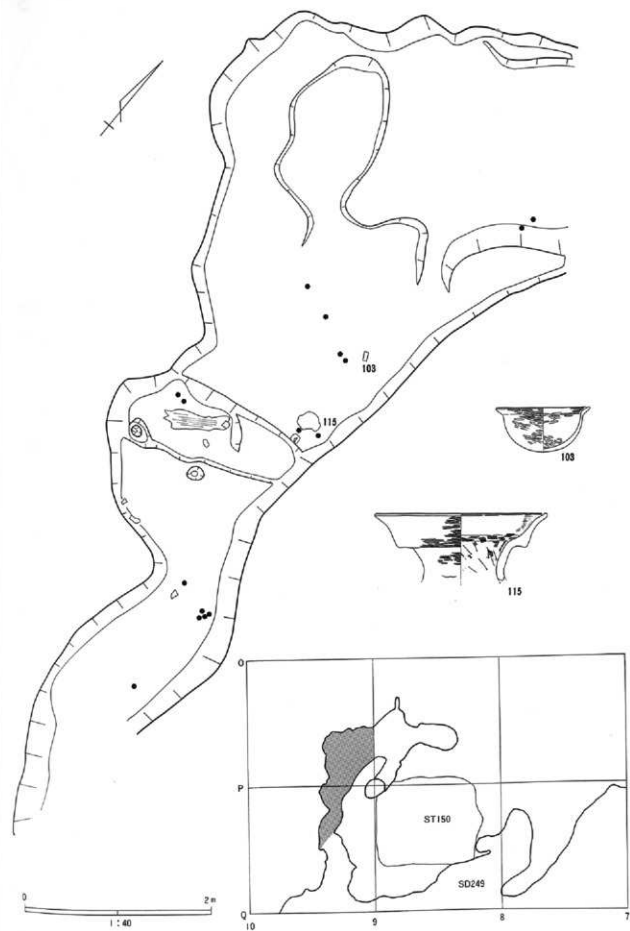


- SD249
1. 10YR5 / 2灰黄褐色粘質シルト 灰化粒少量含む。
 2. 2.5V5 / 3黄褐色シルト質細砂 灰化粒若干、土面片含む。
 3. 2.5V5 / 2増沢黄色シルト質細砂 灰化粒若干含む。
 4. 2.5V5 / 3黄褐色シルト質細砂

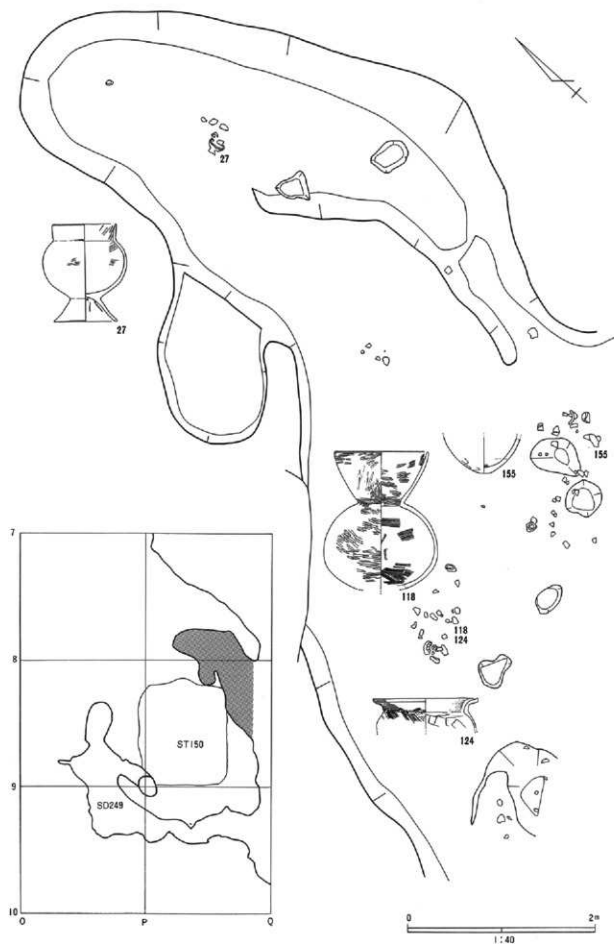


検出時の炭化物分布状況

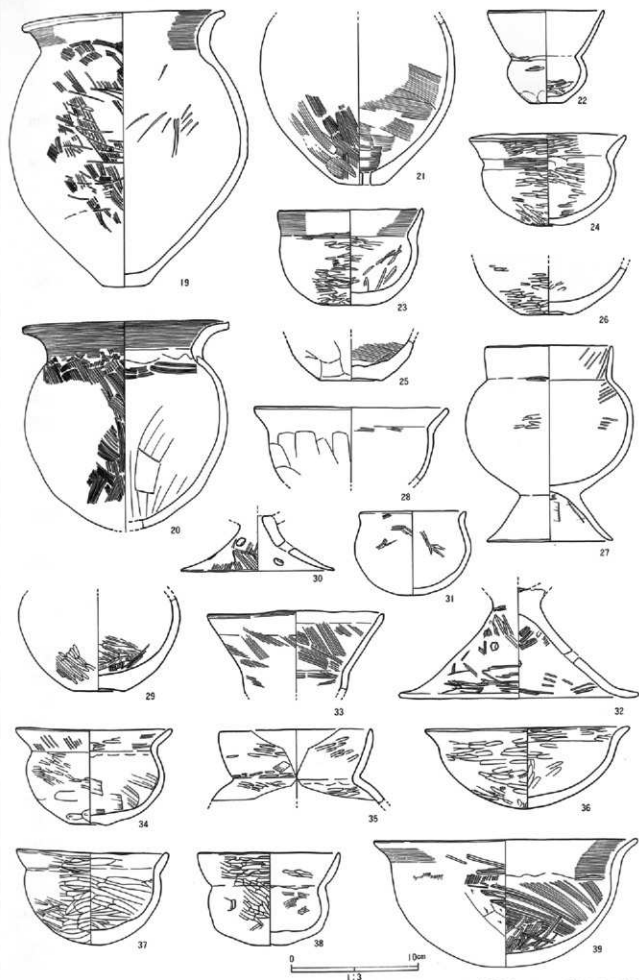
第10図 ST150住居跡・SD249溝跡



第11図 SD249溝跡土器出土状況



第12図 SD249清跡土器出土状況(2)



第13図 SD100清跡・ST150住居跡・ST201住居跡・SD202清跡出土遺物

ST201

位置 Q～R-9～10、SD202内に位置する。

平面形・規模 西側が暗渠に切られているが、遺存部により長軸(東西)7.83m、短軸(南北)5.85mの長方形と推定される。

柱穴・炉 柱穴は4基検出されたものの、いずれも建物に関係しているかは明確でない。掘り下げの途中薄い粘土層の直上に炭の広がりを見出したが、伊跡とは確認できなかった。

覆土・壁・床面 3層の下部には北西に向かって若干傾斜する薄い灰色粘土層と炭化物層が確認できた。これを床面と考えるには疑問が残る。15～17はSD202覆土、9はSX110の覆土である。壁は地山に掘り込まれている。床面は中央部分の3.6m×5.6mの範囲を中心としている。壁周縁部の周溝状の窪みは掘り方と考えられるが疑問が残る。ST201とSD202の間に201を囲む周堤の残欠などの地業跡は確認できなかった。

貯蔵穴等の 検出できなかった。

諸施設

遺物 33は小型丸底の埴。浅く外反する口縁部をもつ。端部は外面にやや直立気味に立ち上がらせている。46は特大の鉢である。畑田遺跡出土の鉢形土器の部類では最大のものである。口縁部は屈曲して外反し、丸い端部をもつ。底部はやや窪み底である。この2点とも底面より10cm以上浮いた状態で出土している。他の遺物も同様であった。

SD202

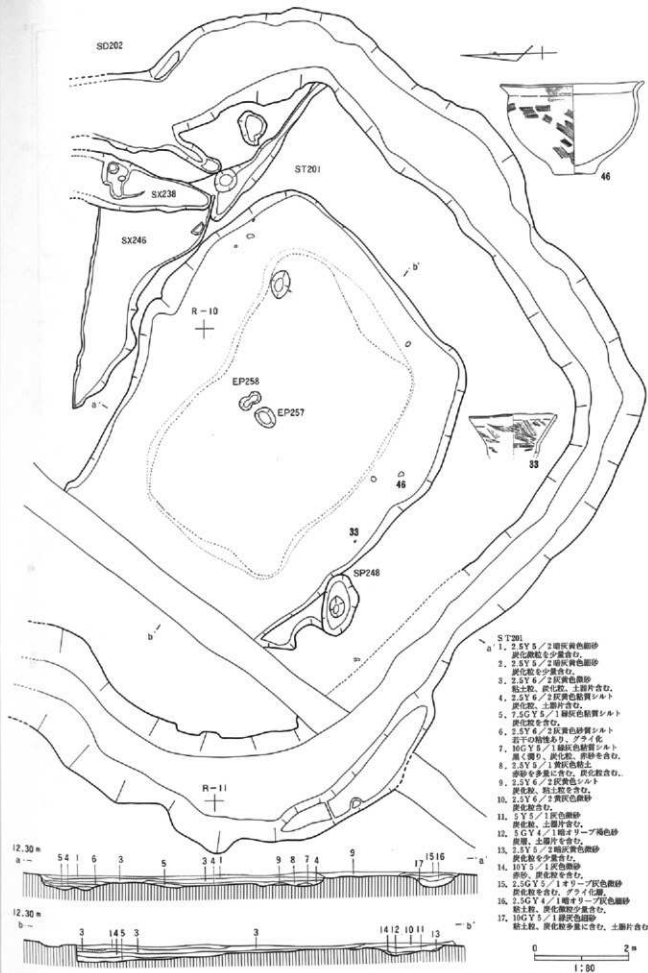
位置 Q～R-9～11、ST201を囲むように位置する。

平面形・規模 北側を排水溝に切られている。外径14～18m、内径12～14mを囲り隅丸長方形に廻っている。幅は1.2～2.4m、0.1～0.4mと一定しない。

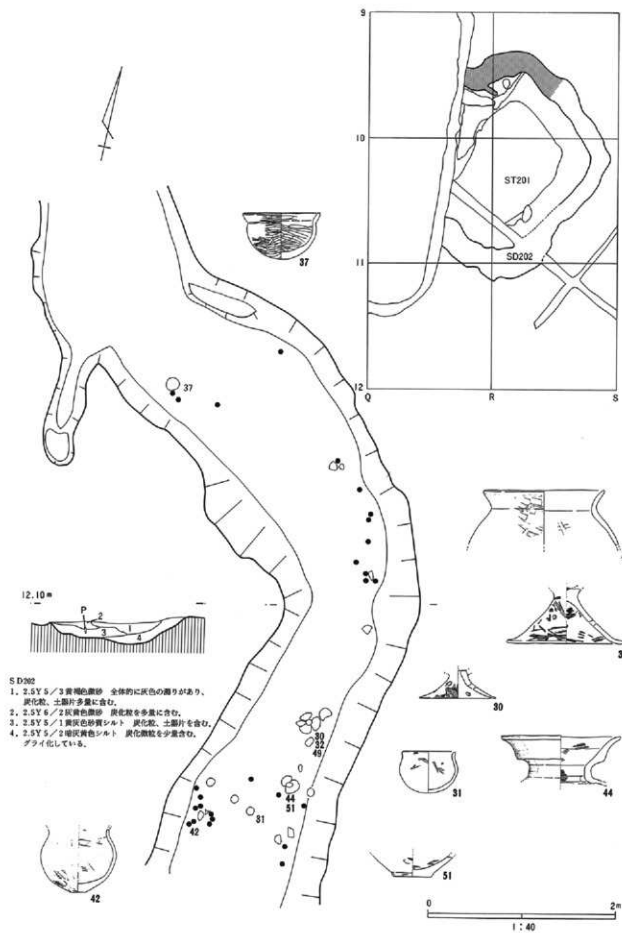
覆土 3～6層に分けられる。各層に炭化物が含まれる。特に2層には極めて濃密に分布する。レンズ状ないし交互に堆積している。堆積状態は各地点で若干異なる。

遺物の出土 遺物は1～3層に多く分布する。特に2・4・5層の下位分層面に集中して出土した。状況 底面より0.05～0.2mほど浮いた形のものが多い。

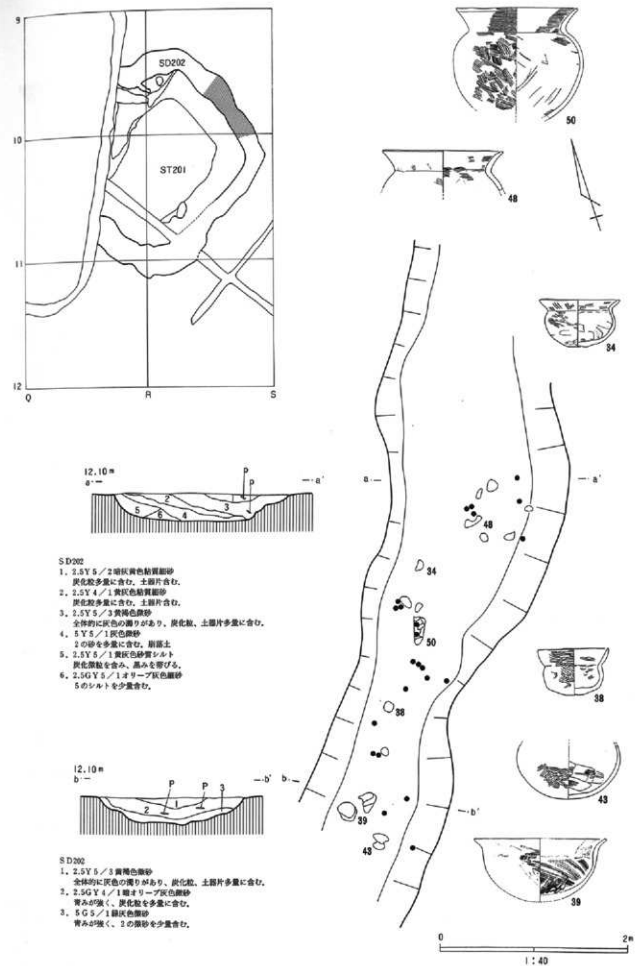
遺物 30・32は高坏である。30は小型で6孔、32は大型で3孔のものである。埴(38)は扁平で全体に凹凸の目立つ、厚手のものである。31・34・36・37・39は鉢である。31は小型で口縁部が短いもの。34は口縁部は強く外反し、底部は平底である。40は有孔鉢である。29・35・43は直口壺である。複合口縁壺には41・44・45がある。41はやや直立気味に外弯する口縁、44は端部を面取りして緩やかに外弯する。45は口縁部中位でやや影らみながら外反する。壺には47～52がある。いずれも単純口縁の壺。47は小型のもの。口縁が大きく開き端部は狭く面取りしている。50は口縁下部で肥厚して端部で細くなり、丸くおさめる。長い口縁をもつ。頸部で強く屈曲して内面に稜を形成する。口縁部の器形全体に対する割合は多い。52は直上で出土したものの、遺構外のものである。長い口縁をもつ。口縁部は強く外反し内面に鋭い稜を形成する。体部の最大径は比較的下位にある。



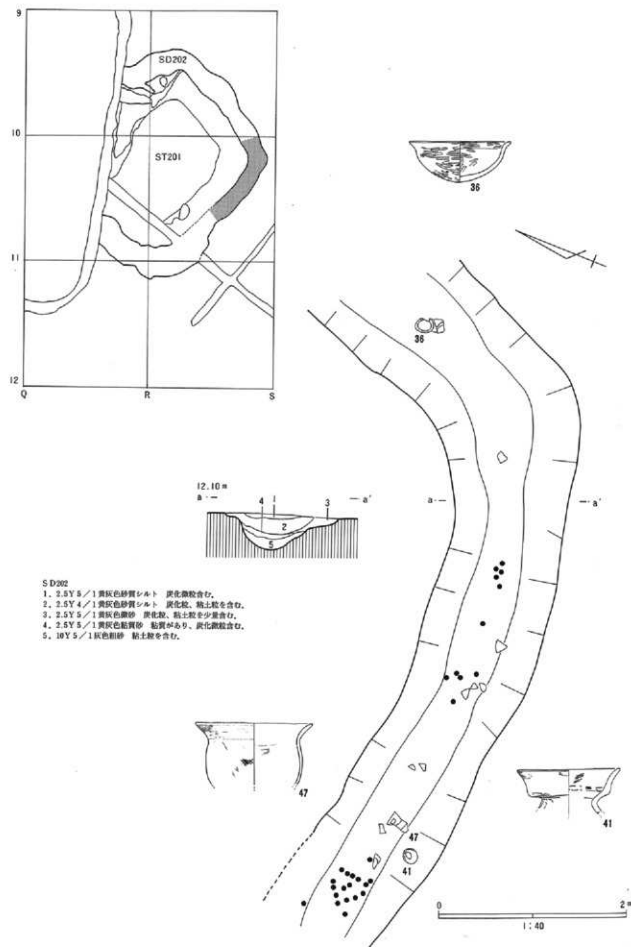
第14図 ST201住居跡・SD202溝跡



第15図 SD202溝跡土器出土状況(1)



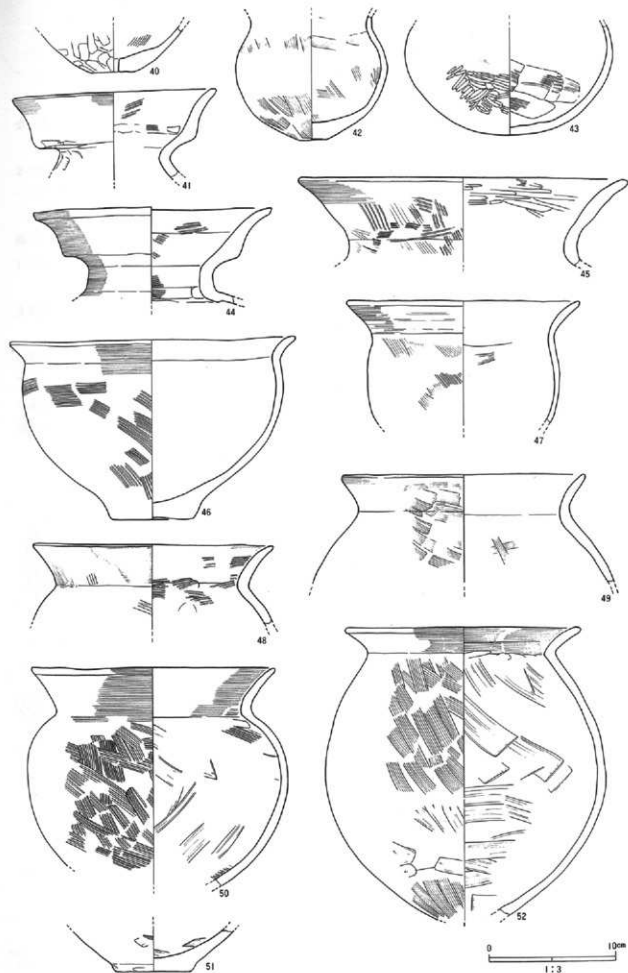
第16図 SD202溝跡土器出土状況(2)



SD202

1. 2.5Y 5/1 黄褐色砂質シロト 黄褐色微石を含む。
2. 2.5Y 4/1 黄褐色砂質シロト 炭化粒、粘土粒を含む。
3. 2.5Y 5/1 黄褐色微砂 炭化粒、粘土粒を少量含む。
4. 2.5Y 5/1 黄褐色微砂 炭質中あり、炭化微石を含む。
5. 10Y 5/1 灰褐色微砂 粘土粒を含む。

第17回 SD202溝跡土器出土状況(3)



第18回 ST201住居跡・SD202溝跡出土遺物

ST 181

位置 J~L-6、遺構集中区域から離れたA区の北側に位置する。

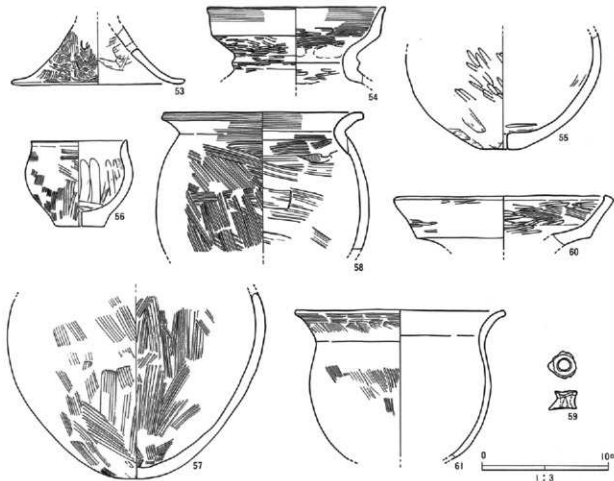
平面形・規模 a-a'より南側にかけは、確認面が既に床面に達していたと思われるため、確かな規模は判らないが、長軸5.23m、短軸5mの隅丸方形と推定される。

覆土・壁・覆土は4層から成り、1・4層は中央部より拡がる炭の薄りと思われ、2・3層はほぼ床面同色同質で良くしまるため床と考えられる。壁は暗渠に切られ、北半分に残存するプランは、緩やかに0.1m程立ち上がる。

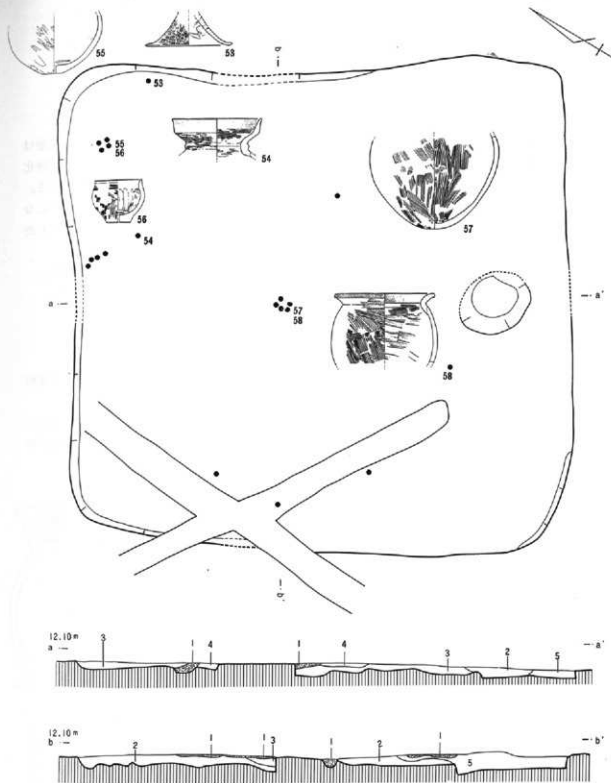
柱穴・炉 中央部分に炭の拡がり認められ、炉跡としての機能が推定される。南側に、長軸0.73m、短軸0.67m、深さ0.1m程の掘り込みが認められたが、浅めであるため柱穴とは考えにくい。

遺物の出土 中央部分を除いては、北隅に集中しているが、殆どが2・3層の上面ではなく、堆積土状況中からの出土である。

遺物 53は器台脚部である。裾部が屈曲する。54は壺の口縁である。直立気味に伸びる有段の口縁部をもつ。55は有孔の鉢である。単孔である。膨らんだ胴部をもつ。56は小型の鉢である。口縁部を直立させ、体部を膨らませる。平底である。57・58は甕である。丸底風の底部から内湾して立ち上がるもの(57)、口唇部外面に面取りした際にできたハケメの痕跡が残り、直線的に伸びる口縁部が途中で屈曲して外反するもの(58)がある。



第19図 ST 181・ST 182竪穴住居跡出土遺物



- ST 181
1. 2.5V 6 / 1 黄沢色陶砂 酸化鉄多量を含む。中心部分の炭の跡と認められる。土層片含む。
 2. 2.5V 5 / 3 黒沢色陶砂 黄沢色砂を20%程含む。土層片含む。
 3. 2.5V 5 / 2 黒沢色陶砂 よくしまっている。土層片含む。
 4. 2.5V 6 / 2 黄沢色陶砂 酸化鉄多量を含む。酸化鉄のない箇所も混入している。
 5. 2.5V 5 / 3 黒沢色陶砂



第20図 ST 181竪穴住居跡

ST182

位 置 J-9。河川跡に挟まれた孤立した区域に位置する。

平面形・規模 長軸4.74m、短軸3.83mの隅丸方形を呈する。西隅はSD183に切られる。

覆 土 住居内の堆積は1層は炭層で他は炭粒が混入したグライ化層である。特に1層の炭層は2層との境、1層下位に集中してみられる。この炭は藁など敷物になるようなものが炭化したものではなく、木炭の状態で見出された。この層に遺物が集中して出土している。2・3層は均等に線を引いているが、まとまりとして引いてしまったため22図のようになった。本来は分層面の凹凸が激しく不均一であった。4・5層は周囲とは異なる独立した地積である。土坑が存在した可能性もあるが、平面プランを確認できなかった。

壁 地山を掘り込んで壁としている。ただし掘り方の壁である。やや急に立ち上がる。

床 面 木炭粒と土器片が出土する1層下部が床面と考えられる。貼床などは行っていない。

柱 穴・炉 どちらも検出できなかった。

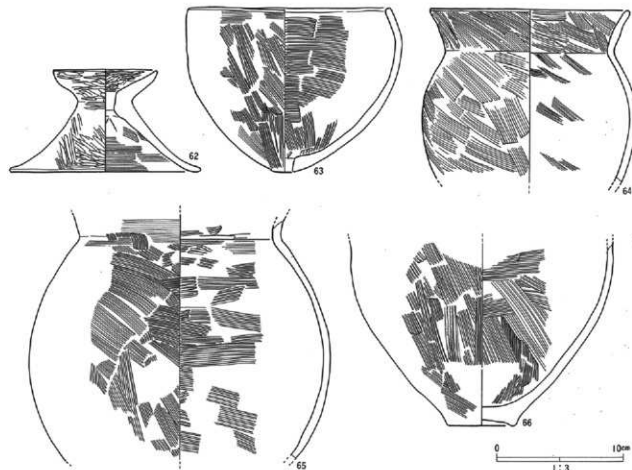
貯蔵穴等の 検出できなかった。

階施設

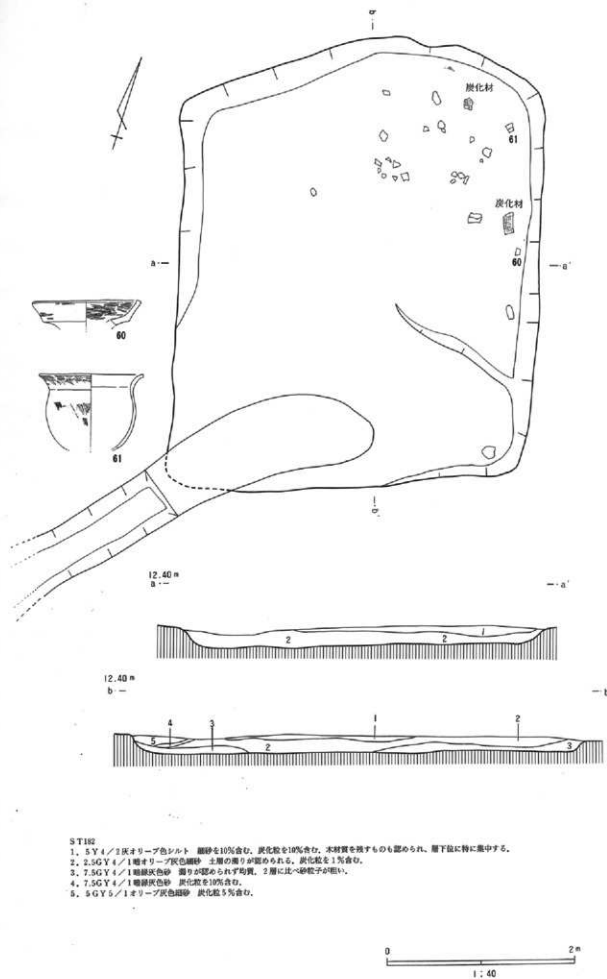
遺物の出土 遺物が集中しているのは住居内の北東部分にあたる。これらはほぼ同レベルであり比較状況

的まとまって出土している。炭層の直上あるいは混入した状態である。

遺 物 3点のみ図上復元できた。59は不明の土師器である。60は壺である。口縁部は有段部分の外面に稜をなしている。口唇部を内側につまみ出しているのが特徴的である。61はやや小型の壺である。口縁端部を面取りしている。口縁部は外反する。



第21図 ST232竪穴住居跡出土遺物

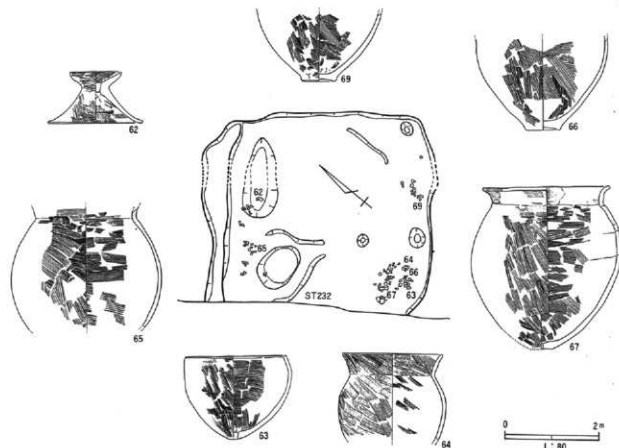


ST182

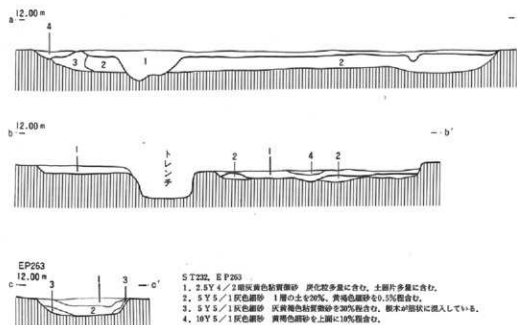
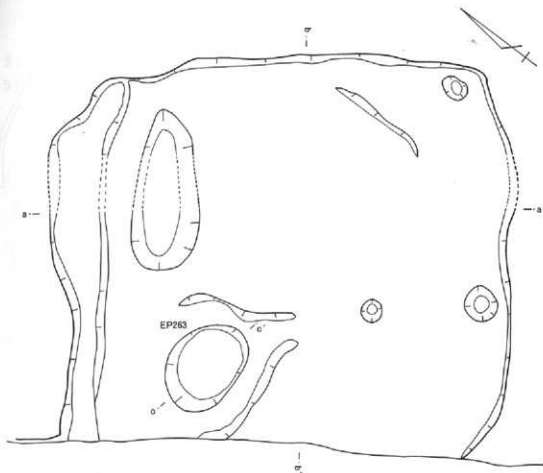
1. 5Y4/3灰オリーブ色シロト 細砂を10%含む。炭化灰を10%含む。木炭層を掘りすも認められ、層下位に特に集中する。
2. 2.5GY4/1暗赤褐色 土質の層が認められる。炭化灰を5%含む。
3. 7.5GY4/1暗緑灰色砂 掘りが認められず砂質。2層に比べ砂粒子が粗い。
4. 7.5GY4/1暗緑灰色砂 炭化灰を10%含む。
5. 5GY3/1オリーブ灰色細砂 炭化灰を5%含む。

ST232

位置 X-11~12の鞍部に位置し、西辺を南西壁に切られている。
 平面形・規模 長軸(東西)4.92m、短軸(南北)の残存部分は4.12mを測る。南西隅と北西隅がやや稜内側に入り込んでいるため、西側への延長は考えられずほぼ方形と推定される。
 覆土・壁 覆土はほぼ1層から成り、全体に炭の濁りが見られ、土器片も多量に含む。
 床面・柱穴 床面は2層上面と考えられる。柱穴は、深さ0.1~0.14mと浅く、しっかりとした掘り・炉込みがあるものは認められない。炉も認められない。
 貯蔵穴等の 貯蔵穴と思われるものが2基確認されたが、床面より0.2m程掘り込んでいるSK262は、諸施設 土器片を数点含む。
 遺物の出土 遺物は、他住居に比べ堆積土・床面共に出土数が多く、床面南側と北西側の隅に集中している。
 遺物 62は器台である。口縁は直立気味に立ち上がる。口縁部の端部はやや丸みをもち、先細りしている。63は有孔鉢である。単孔である。底部より外弯しつつ立ち上がり、途中体部上位で屈曲し、内傾して口縁部に至る。内外面ともハケメ調整である。66・68・69は甕である。68・69は同一個体と考えられる。口縁部は面取りが施されている。底部は窪み底である。64・65・67は甕である。64は口縁端部を丸くおさめる。67は完形に近い。口縁・体部径に比べて底部径が小さい。口縁は外反する。端部は面取りを施す。



第23回 ST232竪穴住居跡土器出土状況



ST232, EP263
 1. 2.5% / 1.2% 赤褐色粘質砂 炭化灰多量を含む。土器片多量を含む。
 2. 5% / 1% 灰色砂 1層の土を20%、赤褐色砂も0.5%を含む。
 3. 5% / 1% 灰色砂 炭化灰多量を含む。20%粘土を含む。断面が陥凹に陥入している。
 4. 10% / 1% 灰色砂 炭化灰多量を含む。20%粘土を含む。



第24回 ST232竪穴住居跡



第25図 ST232竪穴住居跡・SK111・176・203 土坑出土遺物

3. 土坑

S K 111 調査区の西壁際より検出され、長軸3.72mの不整形円形を呈する。今回検出された土坑の中で最も規模が大きく、遺物の出土数が多い。覆土は、全体的に炭化粒を含む。遺物は、底面の他に壁の傾斜部分からも出土し、壺・小型鉢・器台等が見られる。底面の中心は一段深く掘り窪められ、緩やかに傾斜しており、その用途は判然としない。

S K 174 S T150の西隅に位置し、S D249とS T150を切って位置する。長軸1.53mの不整形円形を呈し、西側は暗渠によって擾乱されている。深さは0.27mを測り、底面は凹凸がある。覆土は2層から成り、共に炭化粒を含む。

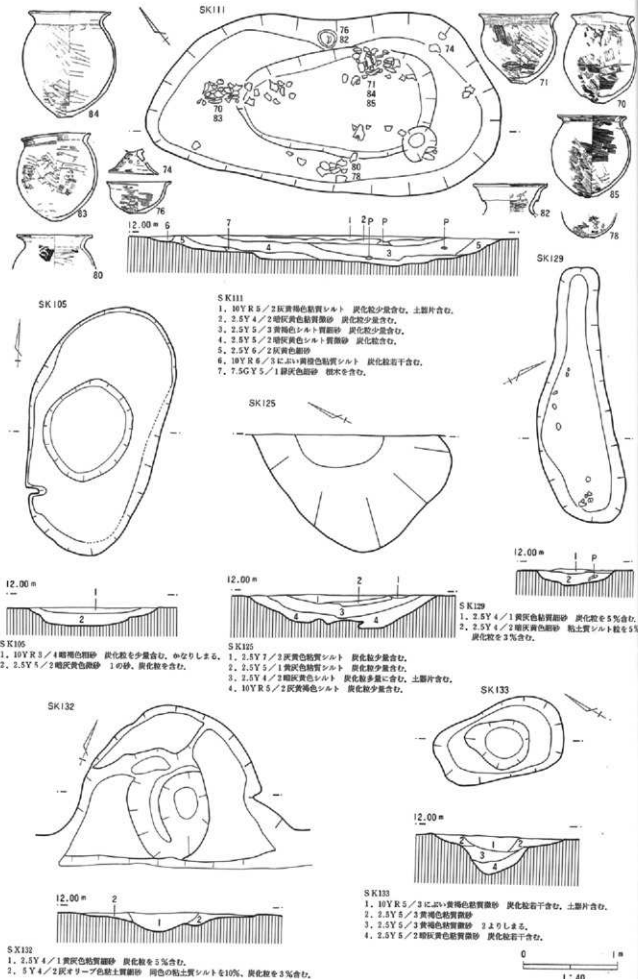
S K 176 北側調査区のほぼ中央、S T181のすぐ南側に位置する。長軸1.7mの不整形円形を呈するが、西側を暗渠に切られている。覆土は、全体に砂質土で炭化粒を含み、底面まで0.15mと浅い。底面には炭が貼りついており、土器の出土も認められた。S T181に付随する土坑の可能性も考えられる。

S K 185 S T182より8m程西方に位置する。長軸3.02mの楕円形を呈し、底面はほぼ水平で、壺は緩やかに立ち上がる。深さは0.17mと浅い。覆土は灰色を基調とした微砂～粘土で炭化粒を含む。また、1層からは壺の破片が多量に出土した。

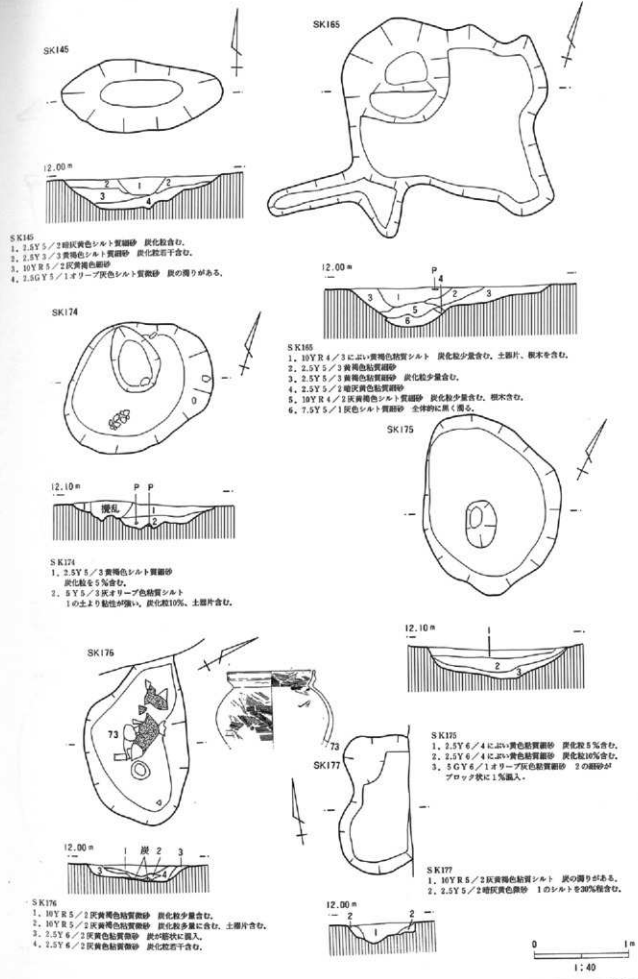
S K 203 U-11に位置し、長軸2.27mの不整形形を呈する。覆土は、2層であるが遺物が検出面で多く出土したことから、1層はもっと厚く堆積していたものと考えられる。底面では、0.3m程掘り込んでいるが、殆ど遺物の出土は認められない。

その他のS 長軸0.5～3.72mの不整形円形・楕円形を呈し、深さ0.1～0.7mと浅いものが殆どである。
K SK105・178・185を除いて、覆土は、2～4層から成り、灰黄褐色・黄灰色等の粘性のある細砂～シルトである。

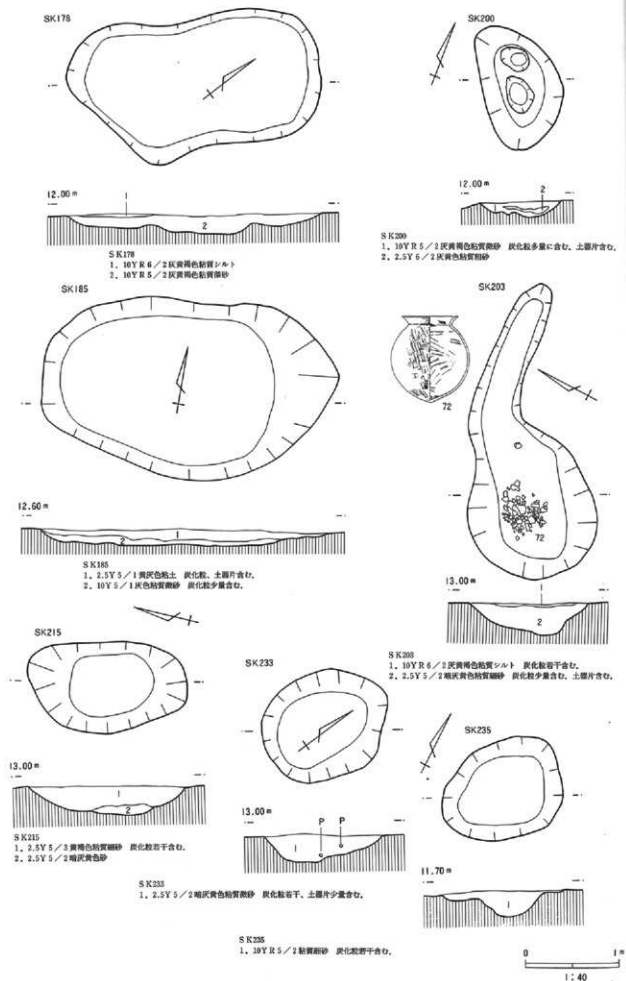
遺物 土坑の出土状況はほとんどが覆土中のものであり、破片資料であるため、器種・器形を想定するのは難しいものが多かった。その中で比較的まとまりをもつ出土が見られたのはS K111である。S K111の出土遺物は器台74、鉢76・78、壺82、壺70・71・80・83・84・85である。器台は脚部の裾を外反・屈曲させたもので円窓の数は4孔である。鉢76の口縁部は屈曲して外反する。端部は丸くおさめる。底部は平底である。82は複合口縁の壺である。口縁端部を面取りしつつ、外反させて斜め方向に積み上げているのが特徴的である。壺には大別して口縁端部を丸くおさめるもの(70・71)と、面取りを施すもの(83・84・85)とが認められる。前者には口縁部が頸部より肥厚し形態が鉢に類似するものがある(71)。後者にはつまみ出すもの(83・84)とそうでないもの(85)に細別できる。いずれの壺も口徑に対する底径の割合が小さく不安定で、底部の形態は平底ないし窪み底である。S K185では壺・壺の破片が多量に出土している。壺では複合口縁のもの、壺では面取りを施してつまみ出しているものが認められる。S K176の出土遺物は壺73である。体部は球形を呈し、口縁部は短い。口縁部下端に緩やかな稜をもつ。S K200の出土遺物は鉢81である。S K203の出土遺物は壺72である。口縁部は外反して端部でやや屈曲する。底部は尖り底である。S K229の出土遺物は小型の鉢77である。



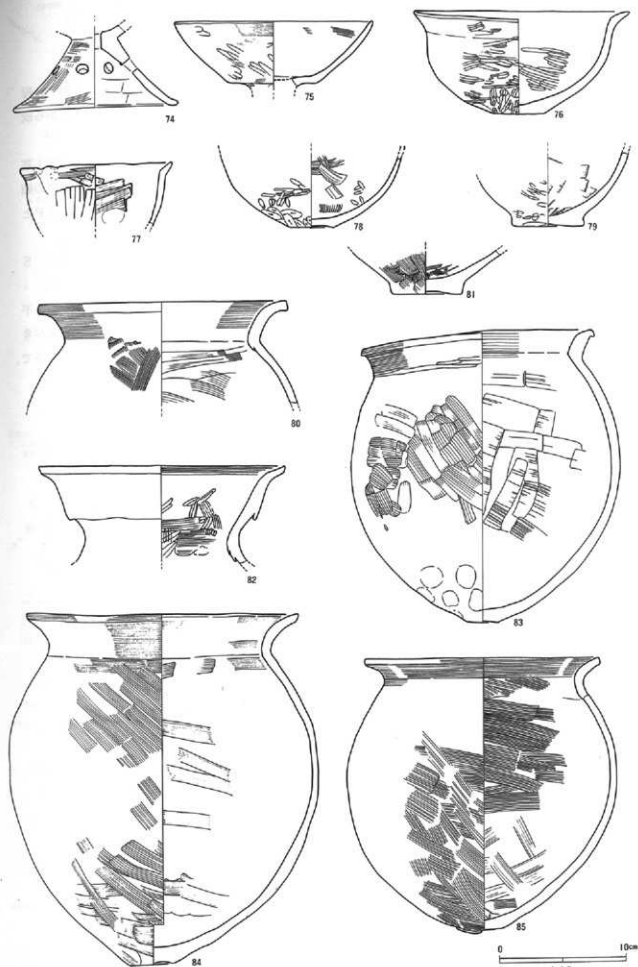
第26図 SK111-105・125-129-132-133土坑



第27図 SK145-165-174-175-176-177土坑



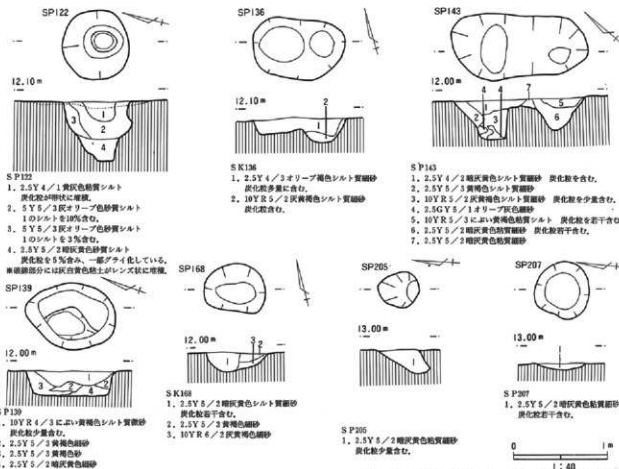
第28図 SK178-185-200-203-215-233-235土坑



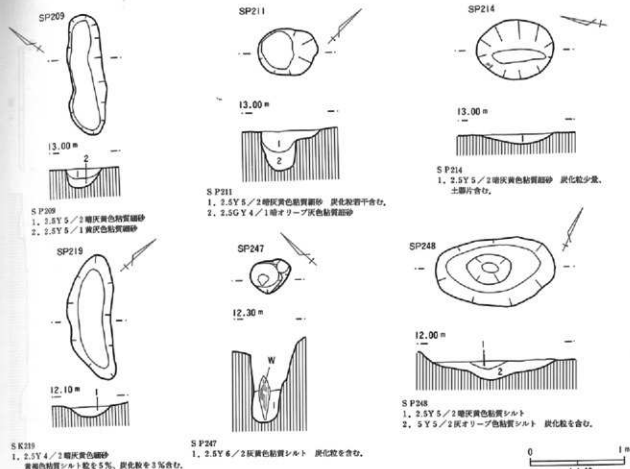
第29図 SK111-229他土坑出土遺物

4. 柱穴

- SP122 R-6、A区の南東隅に位置し、径0.72mのほぼ円形を呈する。検出時は、長軸2m程のSKと認められたが、断面よりSPと判明した。覆土は、灰オリーブ色等の4層から成り、深さ0.6m程とかなり深く掘り込んでいる。
- SP139 O-7のSK・SP集地点に位置し、長軸1.41mの長楕円形を呈する。検出時は1基のSPと認められたが、断面より2基のSPが確認された。北側のSPは黄色～灰色の細砂で、南側は黄色を基調としたシルト～細砂でやや粘性をもつ覆土である。2基のSPとも覆土は異なるが、新旧は判然としなない。
- SP247 P-9、畝状遺構のSX154内に位置し、長軸0.35mの不整形形を呈する。覆土は、SX154と同色の灰黄色でやや粘性がある。径0.1m、長さ0.5m程の柱痕も検出された。その他のS各STの周囲、A区の東中央部、B区の北西部等に多く分布し、長軸0.3～1.26mの不整形形・楕円形を呈し、深さ0.02～0.43mと浅いものが殆どである。覆土は1～2層が多数を占め、黄灰色、暗灰色の粘性のある微砂～シルトから成る。遺物の出土は小片のみで、柱痕が認められるものは少なく、柱穴からの建物跡の存在は認められなかった。



第30図 SP122-136-139-143-168-205-207柱穴



第31図 SP209-211-214-219-247-248柱穴

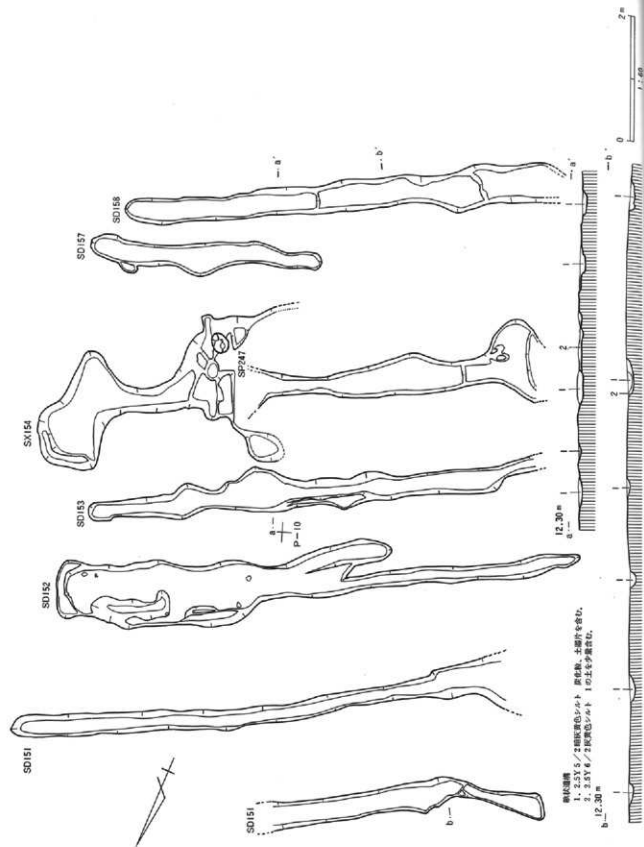
5. 溝・畝状遺構

畝状遺構 O～P-9～10 において、SD101の北側に位置する。7本の細い溝が東西に並行して縦走する。長さ5～11mと一定しないが、比較的短いSD157・245は、他の溝と同程度の長さであったものと推定される。また、SX154は、断面からSD155より古いものと考えられる。幅は、0.26～1.56mと一定しないが、深さは0.1～0.14mと浅めである。溝の東西方向よりSD101で隔てられたST150の長軸方向は、やや東に振れており、その配置から同時期の可能性が考えられる。

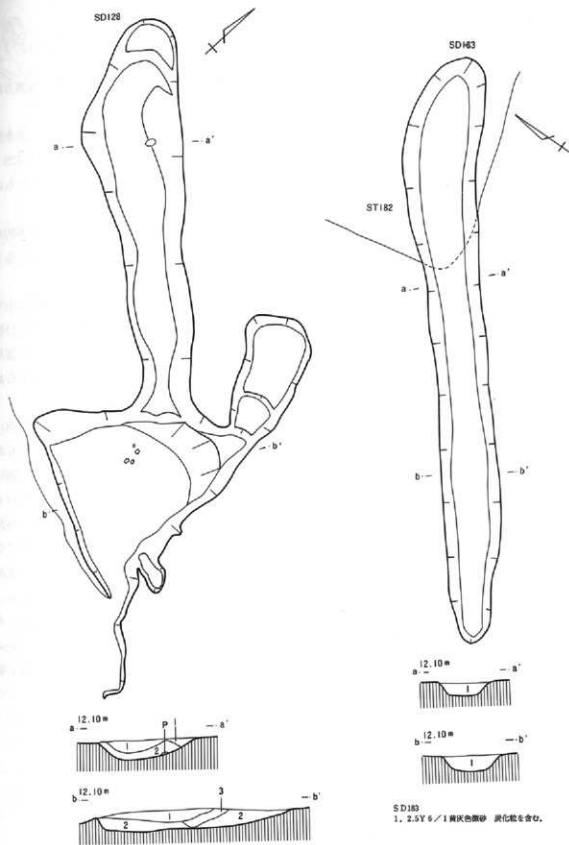
SD128 Q～R-7内、ST103の北側に位置する。南側は排水溝によって切られているが、SK129の存在等からSD100からSD101の連結の可能性が考えられる。長さは6.03m、幅は1.06～2.02mの不整形で、深さは約0.22mを測る。検出時は、西側の溝部分と東側の肥大部分の別々の遺構として確認された。遺物は、高弁等の土器片が数点出土している。

SD183 J-9～10内、ST182の西隅を切って位置する。長さは7m、幅は0.55m、深さは0.13mと浅めで、平面からST182より新しいものと考えられる。

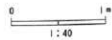
遺物 ほとんどが破片資料である。75は高弁でSD144の出土である。口縁部下端に後をもつ。ほかに胎土が他の壺とは異なり、内側つまみ出しのあるものや端部の丸いものなどがある。畝状溝跡では壺、壺の小破片が出土している。中にはつまみ出し口縁の壺の破片も認められる。



第32図 畝状遺構



第33図 SD128-183溝跡



SD101溝跡

位置 P～R-6～12に位置し、SD152～157狀遺構と平行する形となり、北東～南西方向に縦走する。SD100・202・249が重複して形成された可能性が考えられる。

平面形・規模 幅は2.3～9.1mと一定せず、深さは0.1～0.2mと浅く、全体的に蛇行が激しい。排水溝に切られているが、南側でSD202、北西側でSD249につながり、SD128・SK129・SX130等からSD100とのつながりも推測され、SD101との機能的な関係があったものと考えられる。

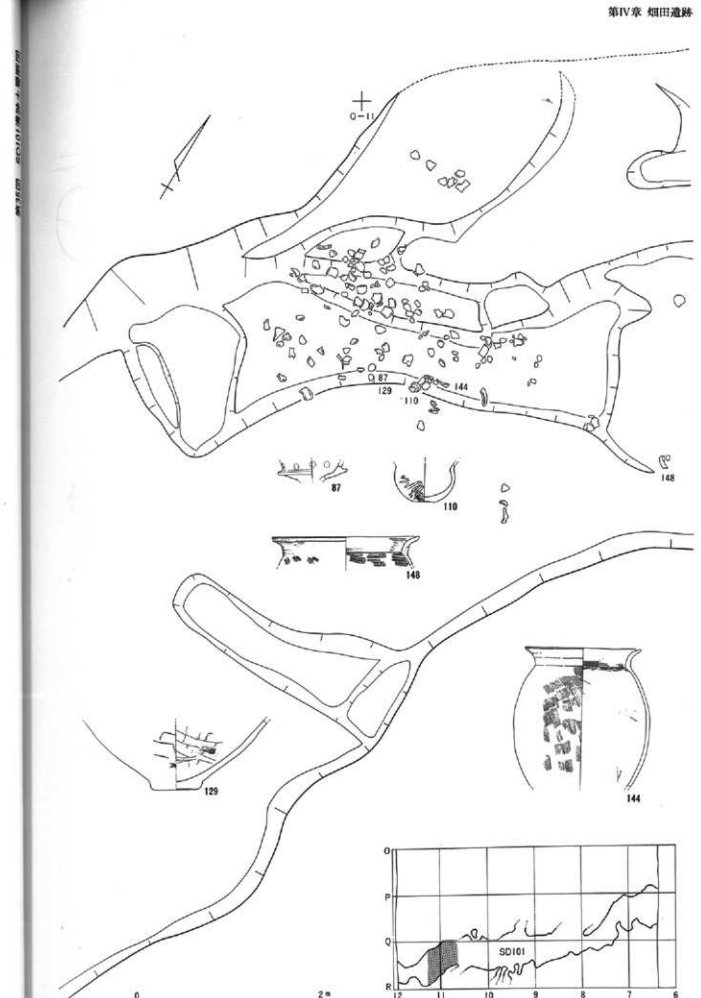
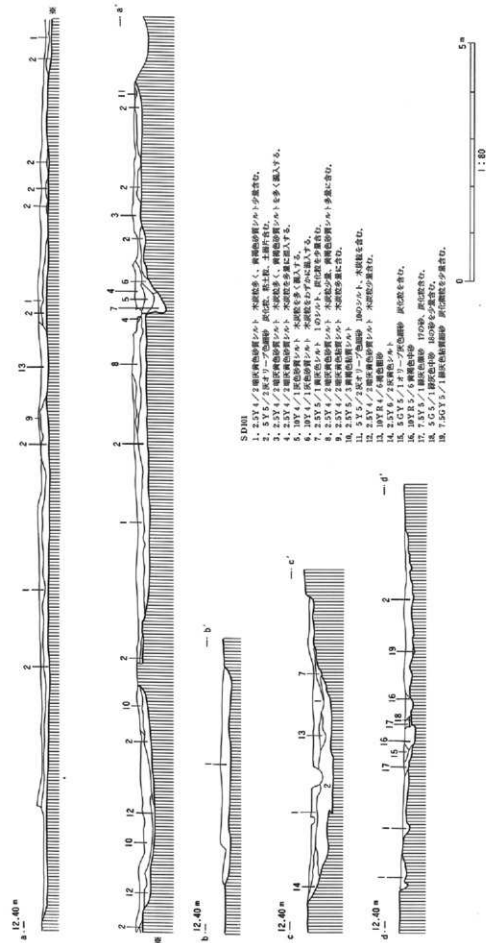
覆土・壁・底面 覆土は、黄色又は褐色を帯びた灰色シルトを基調とし、木炭粒を多量に含む。全体的に土色・土質の大きな違いは見られずほぼ一定しているが、南側においてやや砂が増えるところがある。壁は緩やかに立ち上がり、底面はかなりの凹凸が認められる。

遺物の出土状況 基本層序III層を除去した時点からかなり多量の土器が出土し、今回調査した遺構の中で最も出土量が多い遺構となった。その状況は東西壁に近づくにつれ希薄になり、Q-11付近を除けば南岸からの出土量が多い。特にQ-10においては、上層から完形を含む土器片がまとまって出土した。また下層には、長軸4m程の楕円形を呈する落ち込みが認められ、そこから多量の土器片が出土した。

遺物 裝飾器台には結合器台と呼ばれるタイプ(86・87・89)とそうでない広口のもの(88)に分けられる。器台は口縁部に稜をもつもの(91)、内湾して端部を丸くおさめるもの(92)などがある。脚部には内湾するもの(96)も認められる。高坏は口縁部下端で弱い稜をつくり、比較的緩やかに立ち上がるもの(100)、口縁部がやや直立し、広く開口する脚部をもつもの(97)がある。鉢には、平底で体部が影らみ口縁部が窄まり端部は外反するもの(102)、丸底で口縁部が外反するもの(103・104・107・109)、109は平底でやや直線的に外反するものがある。埴には体部が偏平で口縁下端でくびれ外傾して立ち上がるもの(106)、器形全体が偏平で体部と口縁部下端のくびれが弱いもの(105)がある。直口壺は口縁部が直立気味のもの(111)、口縁部が外傾し体部の中位に最大径が位置するもの(112・119)、体部下位に最大径のあるもの(118)がある。甃は複合口縁のものがほとんどである。口縁上端が緩やかに外湾して立ち上がるもの(114・115・117)、口縁上端が直線的に外反して立ち上がるもの(116・120)などがある。122は大型で体部のやや下位に最大径が位置する。甃は口縁部を面取りしてつまみ上げるもの(124・138～140・145・148)とつまみ上げないもの(133・125・128・141・144・148)がある。丸い端部で単純口縁のもの(128・142・147・149・150)もある。胎土・器形とも異質なのが132である。頸部で強く屈曲し外反する口縁をもつ。口唇部はやや肥厚する。調整のナデ・ハケメは細かく丁寧である。胎土は粗砂はほとんど混入せず緻密である。有孔鉢は底部のみの資料である。163は磁石である。各面に使用痕が見られるが、幅の狭い2面が特に使用されていたようである。162は須恵器である。甃体部のもと考えられる。II層とIII層の分層面で出土している。II層下で須恵器が出土したのはこれ1点のみである。



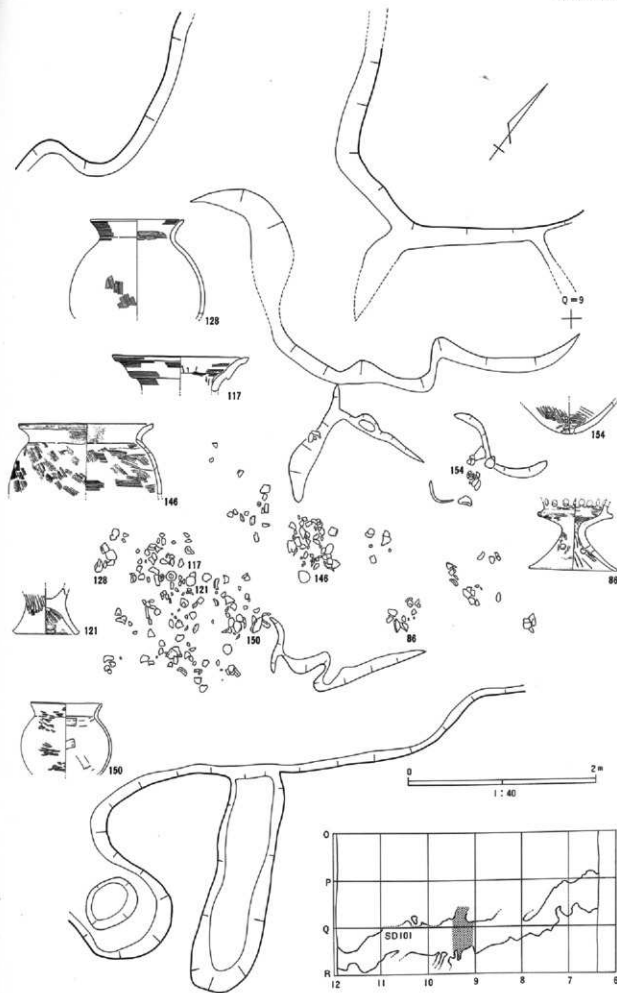
第34図 SD101溝跡全体図



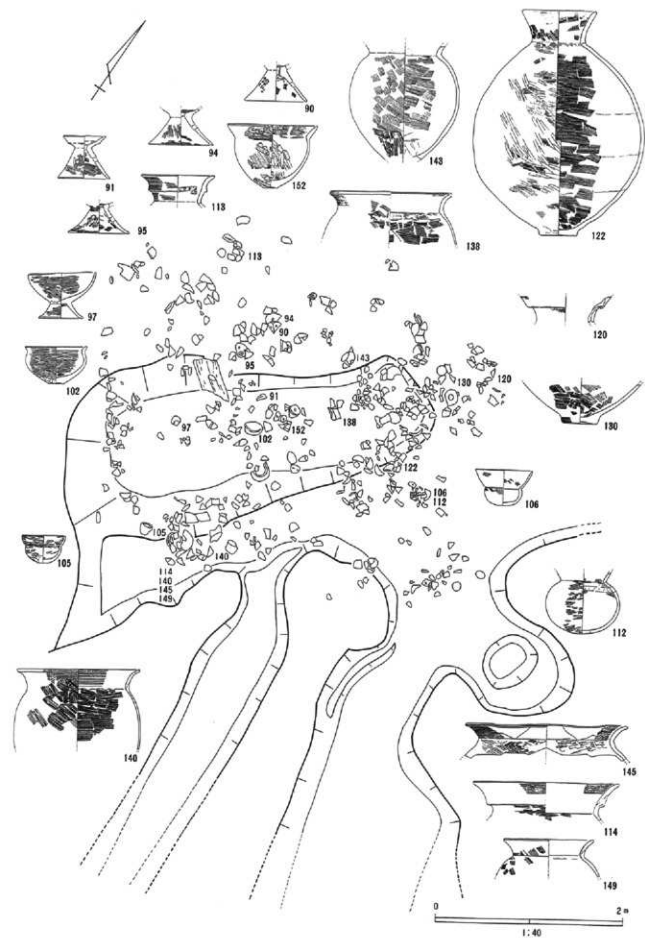
第36図 SD101溝跡土器出土状況(1)



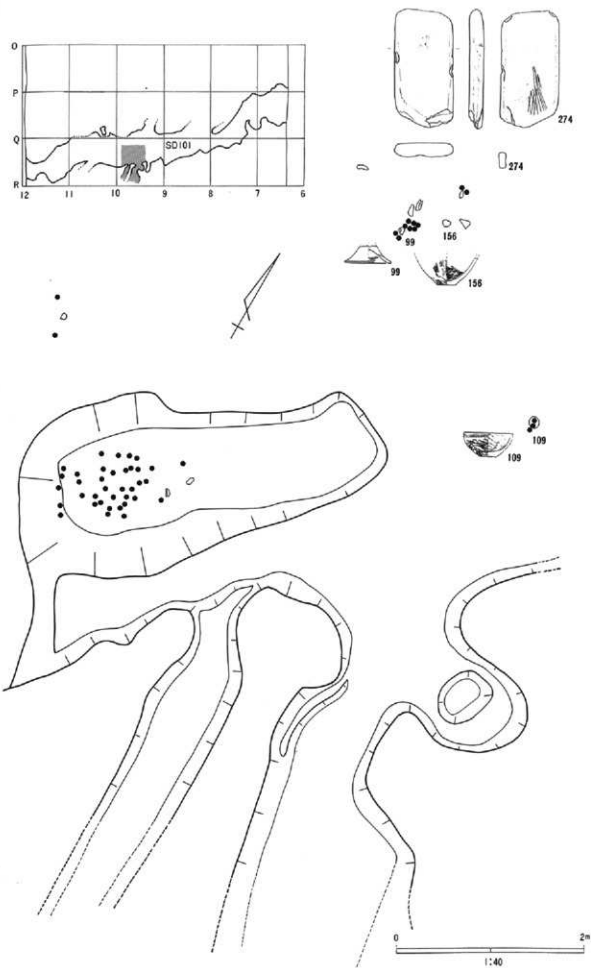
第37回 SD101溝跡(2)



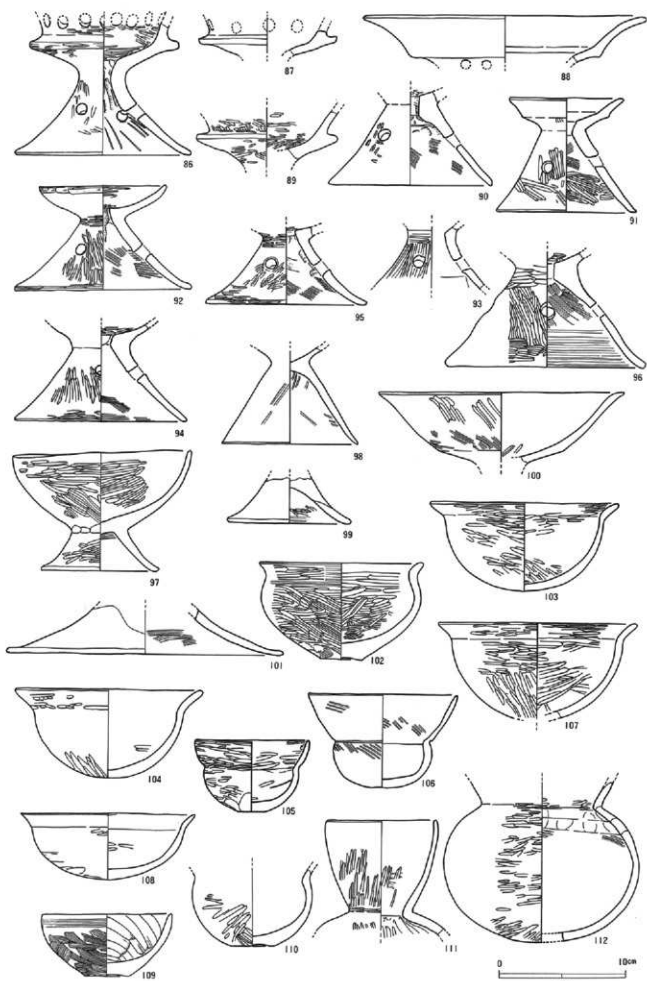
第38回 SD101溝跡土器出土状況(3)



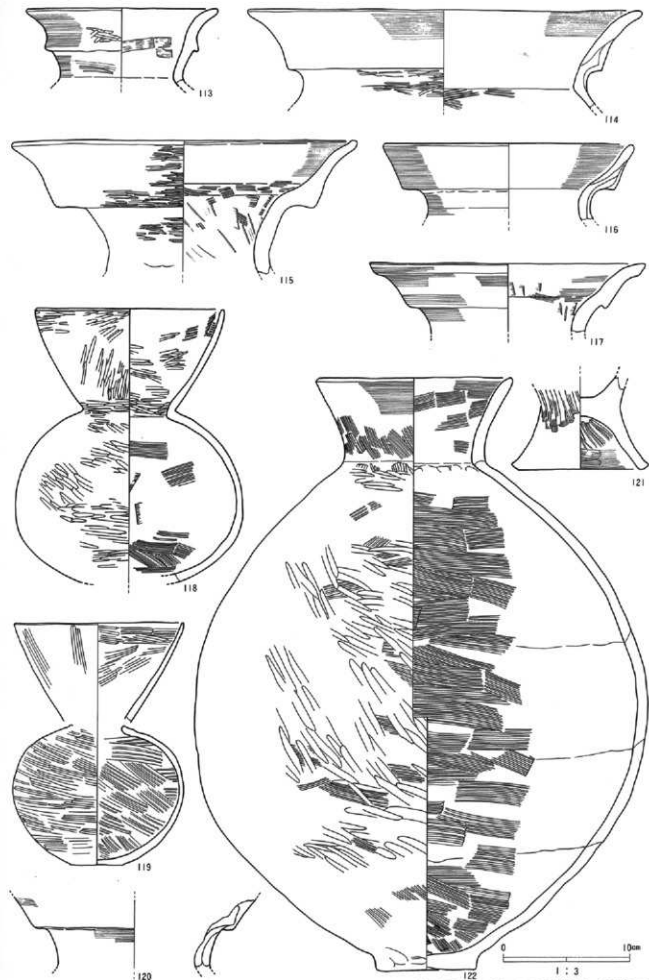
第39図 SD101溝跡上層土器出土状況(4)



第40図 SD101溝跡下層土器出土状況(5)



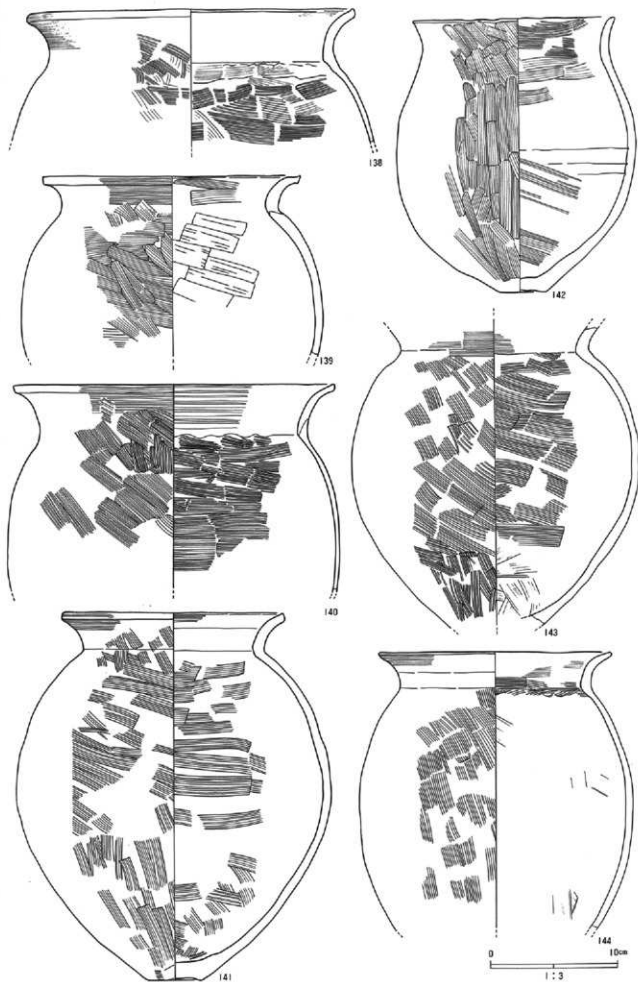
第41图 SD101・SD249溝跡出土遺物



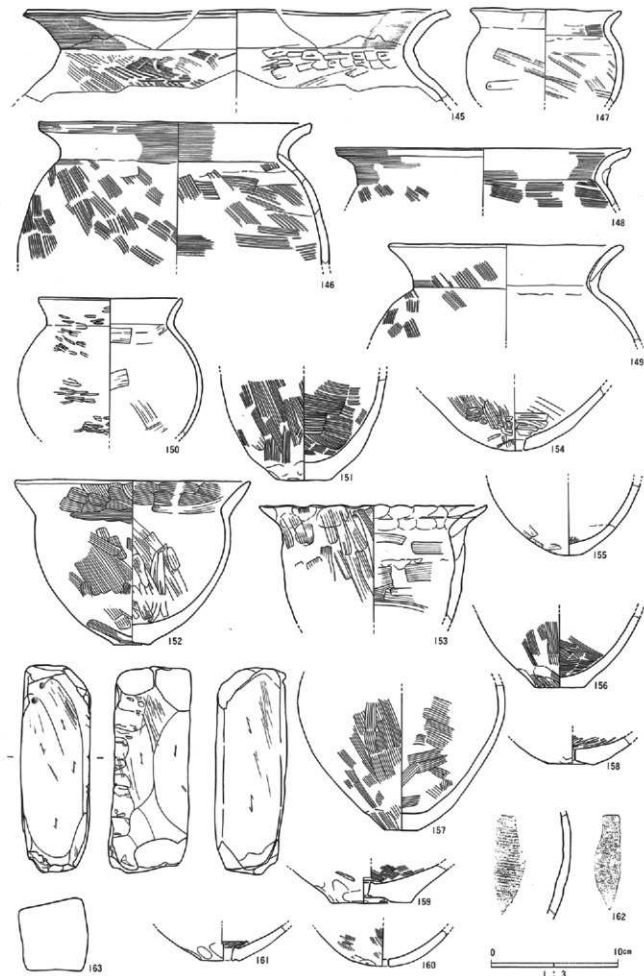
第42图 SD101・SD249溝跡出土遺物(2)



第43図 SD101・SD249溝跡出土遺物(3)



第44図 SD101溝跡出土遺物(4)



第45図 SD101溝跡出土遺物(5)

6. 性格不明遺構

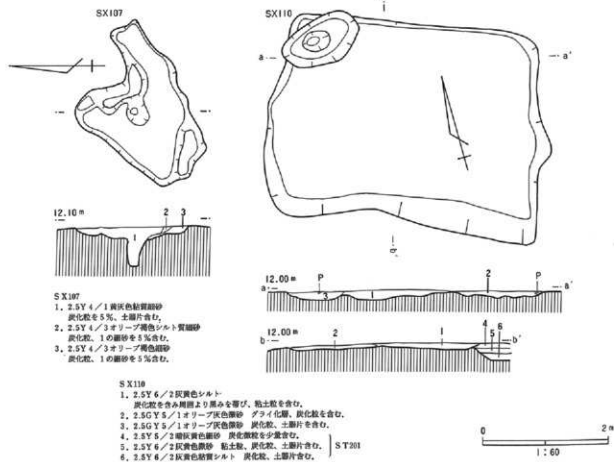
S X 107 S-8、SD100の南西に位置し、長軸1.78mの不整形を呈する。周囲は約0.1mと浅く、中心部分は0.42mと深く掘り込まれているため柱穴と考えられる。

S X 110 R-10において、SD202を切ってST201の南辺に位置する。長軸2.65m、短軸2.05m、深さ0.09mの不整形形を呈する。断面・平面から、ST201・SD202より新しく、南側の壁はSD202の外壁とほぼ同じ位置・傾斜で立ち上がる。覆土は2層から成り土器片、炭化粒を含む。

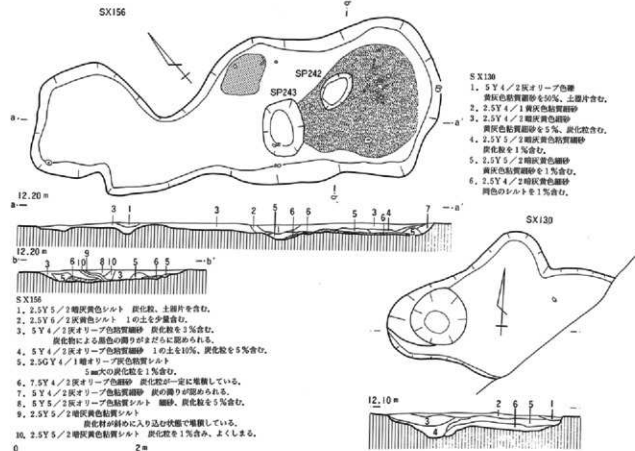
S X 156 P-10において、畝状遺構に切られて位置する。長軸4.1m、短軸1.57m、深さ0.13mの不整形形を呈する。灰オレンジ色粘質細砂を基調とした覆土で、東側底面には炭が貼り付いて検出され、土器片も多く出土した。遺構内には、E P242、243が検出されたが、S X 156より新しい。また、中程に黄灰色粘土塊が検出され、何らかのかたちで使用されたものと思われる。平面及び断面から、畝状遺構より古いことが判る。

その他のS 長軸0.6~5.25m、短軸0.4~2.82m、深さ0.09~0.42mと多様である。また、S X 130 X のように溝とのつながりが推測される遺構も認められる。

遺物 破片資料がほとんどで復元できるものはなかった。S X 107では面取り・つまみ出しの壺口縁部と鉢、壺の底部が出土している。S X 110では面取り・つまみ出しの壺口縁部が出土している。S X 156では端部を丸くおさめる器台口縁、有孔鉢口縁、朱彩を施した面取り・つまみ出しの壺口縁部などが出土している。



第46図 SX107-110不明遺構



第47図 SX156・130不明遺構

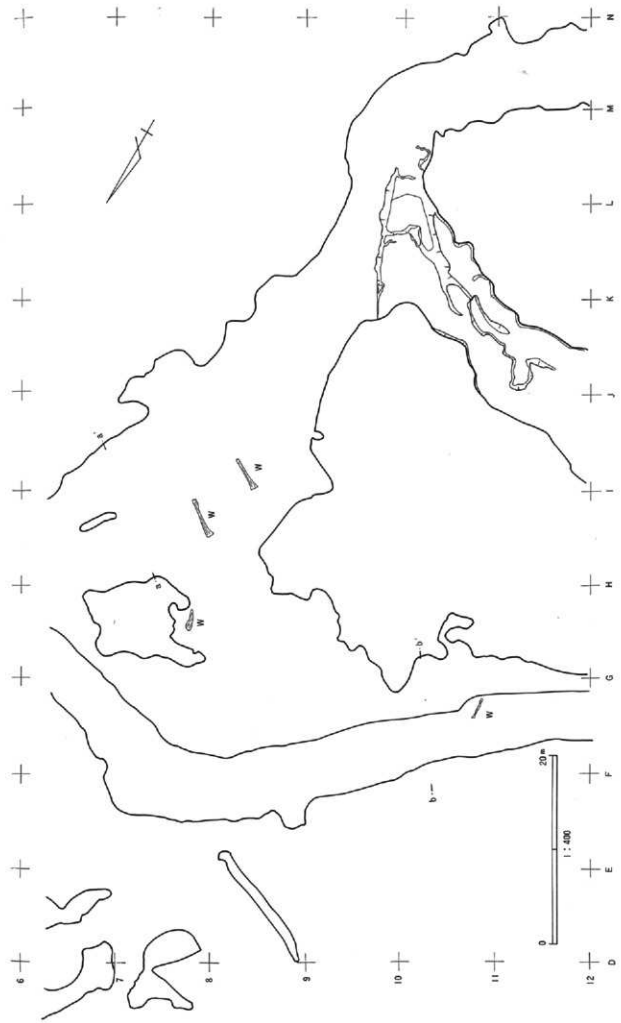
7. 河川跡

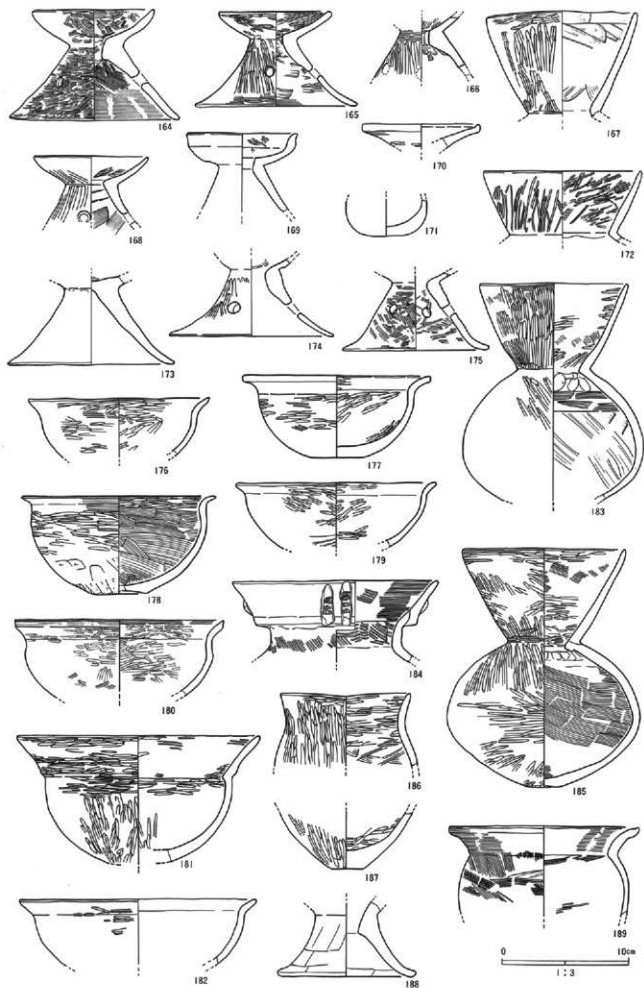
位置 D～N-6～12に位置し、A区のほぼ北西半分を占める。千安川と湯尻川の二河川に挟まれたこの地を川が何度も流路を変えて流れていたものと思われる。

平面形・規模 南西側は幅10～15m程で二条の川が確認され、北に行くにつれて交わり、次第に川幅が狭がる。北西岸は確認できなかった。E～H-6～12ではこの河川跡よりも新しいと考えられる小河川が南西から北西に渡って検出された。

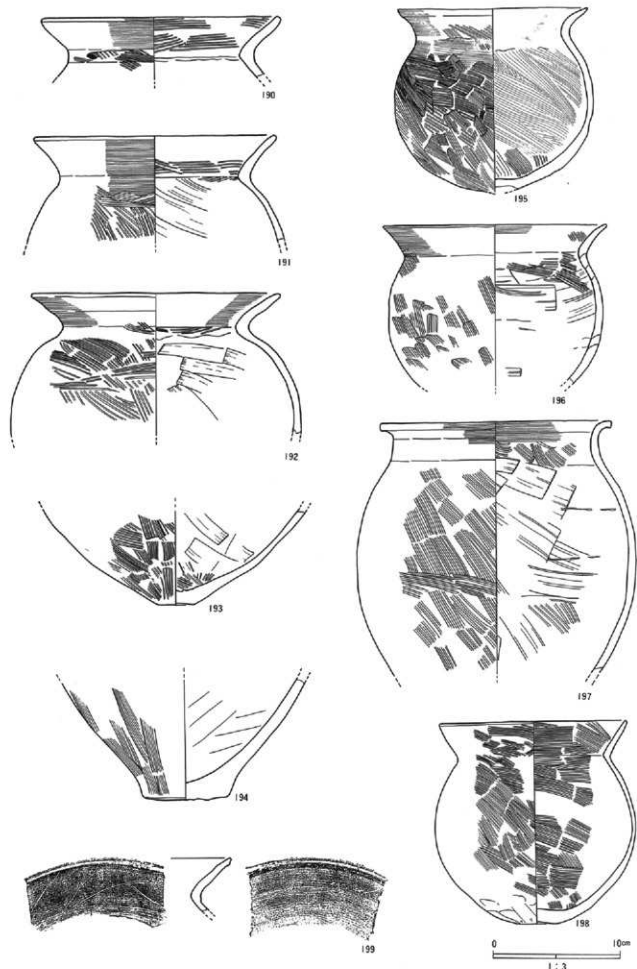
覆土・壁 長さ10mのトレンチを2基設定したが、その断面からかなり深い河川であったと推定される。覆土は、褐色～灰色を基調とした粘土と細砂の互層で、下層に行くにつれて有機物層が多くなる。西側の二条の川が交わる部分を0.7m程掘り下げると、西側の傾斜部から多数の土器片が良好な状態で出土した。

遺物 器台は主に口縁部下端に稜をもつもの(169)とそうでないものに分けられる。鉢ではいずれも口縁部は外反するが、口縁端面を面取りするもの(177・180)としないもの2大別できる。直口壺は口縁部が短いもの(172)、体部下位に最大径の位置するもの(183)、中位に位置するもの(185)の3つに分けられる。184は壺である。複合口縁で円形浮文と棒状浮文が2対ずつ認められる。壺は内外面にミガキのある186、強く屈曲し内面に鋭い稜をもつもの(190～192・198・199)、つまみ出すもの(189・195)、「コ」字形をしたもの(197)が認められる。特に199は内外面にヘラ描きがあり、全体に薄手づくりはシャープである。





第51図 SG河川跡出土遺物(1)

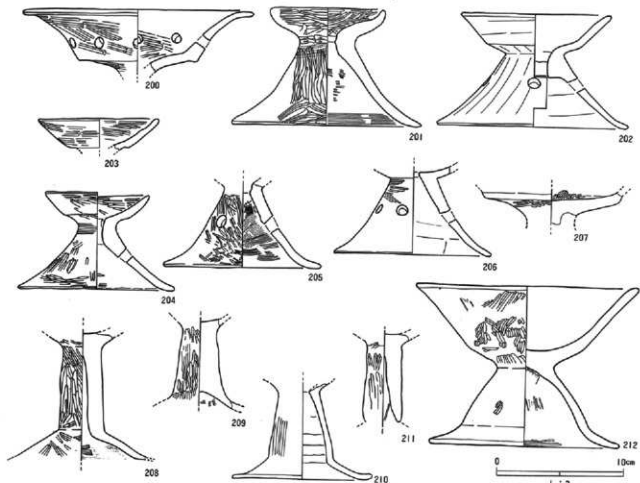


第52図 SG河川跡出土遺物(2)

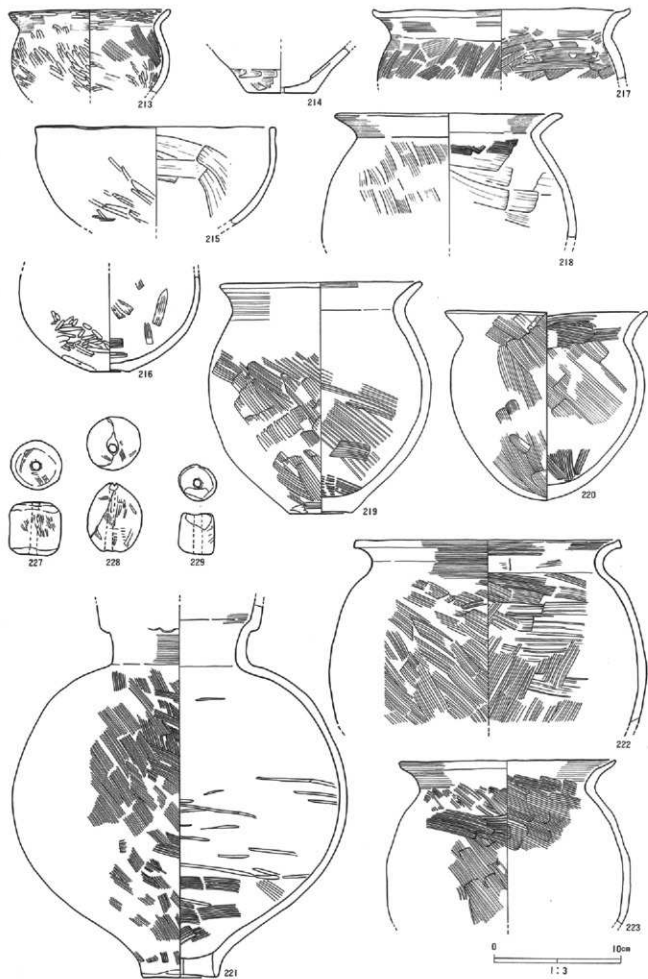
8. 鞍部・遺構外の遺物

B区は、遺構が集中する区域とほぼ整備の際に互礫が埋められた覆土部分と鞍部の3区域に分けることができる。この鞍部とは、周囲の地山より落ち込んでいる部分をさす。鞍部には、4ヶ所のトレンチを設定した結果、遺構が集中する微高部分から次第に落ち込む。覆土については、南側は黄色を基調とした細砂で炭化粒を多量に含み、北側は上層が灰色を基調とした粘質シルト、下層は灰黄褐色の砂から成り炭化粒を多量に含む。底面は砂層であるが、レベルが周囲より低いため水はけが悪くかなりの凹凸がある。居住区域には考えにくいところと思われたが、トレンチを設定したことによりST232等の遺構が確認された。また、遺物は南側・北側共に多量に出土した。

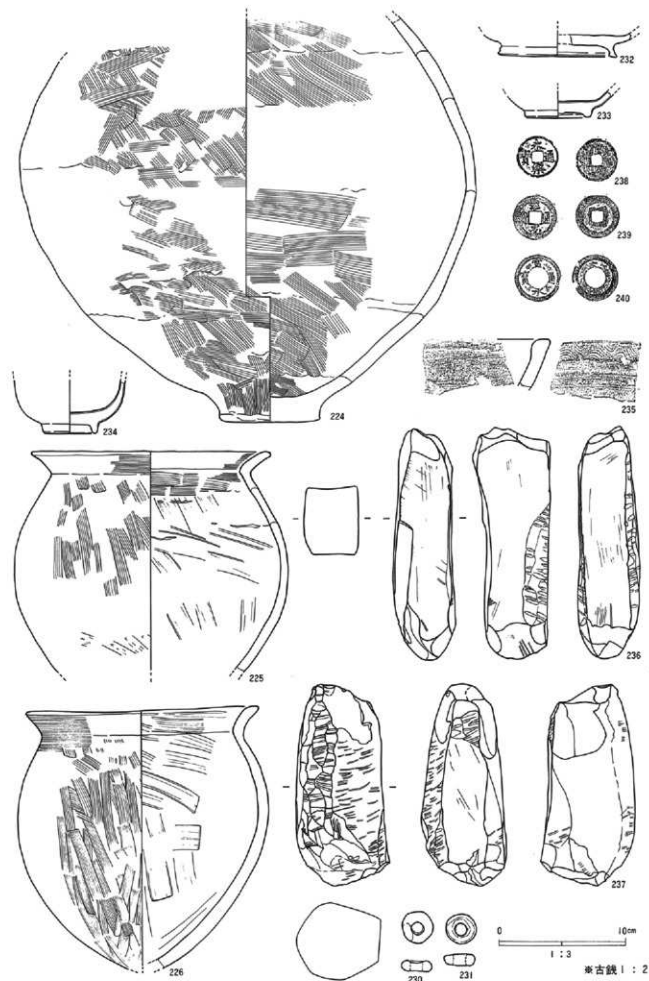
遺物 特殊器台(200)は口縁端部を外寄せ、下端に稜をもつ。器台(201~206)は厚手で口縁部をややつまみ上げるもの(201)、高坏(207~212)は中実のもの(209)、中空のもの(208・210・211)がある。212は脚部の裾が内湾気味に開くものである。有孔鉢(215)は外面にミガキが認められる。216は直口壺である。壺(213・217~223・225・226)には小型で外面にミガキがあるもの(213)、口縁部が外反して端部を丸くおさめるもの(218~220・225・226)、口縁部をつまみ上げ、面取りをしているもの(217~222)がある。平底と丸底のものが認められる。須恵器の高台付坏(232)、青磁碗(233)、近世陶磁器(234)、珠洲系陶器摺鉢(235)、土製品(227~231)は土鉢、古銭(238~240)、石製品(236・237)の砥石がある。



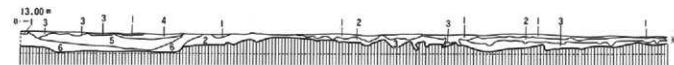
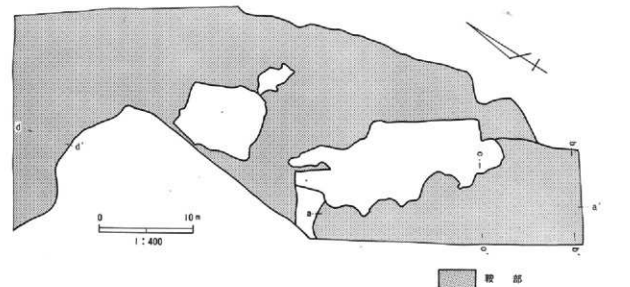
第53図 鞍部他出土遺物(1)



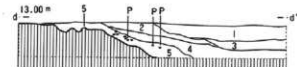
第54図 鞍部他出土遺物(2)



第55図 鞍部発出土遺物(3)



- 鞍部トレンチ a-a' b-b' c-c'
1. 10Y R 4 / 3 灰黄色粘質シルト 炭化粒少量含む。
 2. 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質シルト 炭化粒多量を含む。土層片含む。
 3. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘砂 炭化粒少量含む。
 4. 10Y R 5 / 3 に近い黄褐色粘質シルト 炭化粒若干含む。
 5. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘砂 4の土を少量含む。
 6. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘砂 4の土を少量よりやや少なめに含む。
 7. 2.5Y 5 / 1 黄灰色粘質粘砂 炭化粒多量。土層片、樹皮を含む。



- 鞍部トレンチ e-e'
1. 10Y R 4 / 3 に近い黄褐色粘質シルト
 2. 2.5Y 6 / 2 灰黄色粘質シルト
 3. 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質シルト
 4. 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質粘砂 炭化粒多量。樹皮を含む。
 5. 10Y R 4 / 3 灰黄褐色粘砂 炭化粒多量。土層片多量を含む。



第56図 B区鞍部土層断面

表-2 遺構観察表(1)

(凡例) 長さの単位はmとし、()内の数値は、他遺構もしくは壁に切られる等して正確な数値を計測できないため、残存する部分を計測した数値である。

住居跡

遺構番号	グリッド	主軸方向	平面形態	規模 (m)				深さ	押図番号
				上 端		下 端			
				長軸	短軸	長軸	短軸		
S T 103	R-8	N-30°-W	方形	5.44	5.36	5.36	5.28	0.16	第4図
S T 150	P-8	N-33°-W	隅丸方形	8.16	7.60	7.52	6.56	0.08~0.24	第10図
S T 181	K-6	N-30°-W	不整形	(5.23)	(5.00)	(5.14)	(4.95)	0.04~0.17	第20図
S T 182	J-9	N-10°-W	隅丸方形	4.74	3.83	4.56	3.46	0.19	第22図
S T 201	R-10	N-87°-W	楕円形	(7.83)	5.88	(7.65)	5.67	0.04~0.39	第14図
S T 232	X-12	N-35°-W	隅丸方形	4.92	(4.12)	4.74	(4.04)	0.24	第23~24図

溝跡

遺構番号	グリッド	規模 (m)				深さ	押図番号
		外 径	内 径	幅			
				上 端	下 端		
S D 100	R-8	(12.94~14.00)	9.4~10.00	0.88~3.04	0.41~2.44	0.16~0.32	第4~8図
S D 202	R-9	(12.21~18.20)	(10.70~13.98)	(1.10~1.60)	(0.37~1.42)	(0.10~0.40)	第14~17図
S D 249	O~P-7~9	(14.40~16.41)	(11.64~13.12)	(1.20~3.74)	(0.61~4.10)	(0.20~0.24)	第10~12図

溝跡

遺構番号	グリッド	規模 (m)				深さ	押図番号
		上 端		下 端			
		長軸	幅	長軸	幅		
S D 101	Q-9	(55.70)	(2.30~9.20)	(55.70)	(2.10~8.70)	(0.20~1.10)	第34~40図
S D 128	Q-7	(6.03)	(1.06~2.02)	(7.16)	(0.46~1.32)	(0.22)	第33図
S D 151	O-9	(10.60)	(0.30~0.70)	(6.80)	(0.16~0.22)	(0.14)	第32図
S D 152	O-9	11.20	0.26~1.38	8.20	0.13~0.93	0.14	〃
S D 153	P-9	(9.40)	(0.26~0.94)	(7.00)	(0.13~0.58)	(0.10)	〃
S D 155	P-10	(5.80)	(0.34~1.56)	(4.30)	(0.13~1.60)	(0.10)	〃
S D 157	P-10	5.00	0.32~0.70	3.54	0.42	0.12	〃
S D 158	P-10	(8.96)	(0.48~0.88)	(4.40)	(0.30)	0.14	〃
S D 183	J-9~10	7.00	0.55	5.85	0.31	0.13	第33図
S D 198	H-10	2.75	0.65	2.63	0.35	0.05	〃
S D 241	P-10~11	(8.13)	(2.33)	(8.06)	(1.80)	(0.49)	〃
S D 245	O-10	(5.70)	(0.22~0.68)	(4.14)	(3.60)	(0.14)	第32図

表-3 遺構観察表(2)

土坑

遺構番号	グリッド	平面形態	規 模 (m)				深さ	押図番号
			上 端		下 端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
S K 105	R-9	不整形円形	2.67	1.39	2.47	1.23	0.20	第26図
S K 111	P-11	不整形円形	3.72	1.85	3.39	1.44	0.25	第26図
S K 112	P-11	不整形円形	1.00	0.80	0.90	0.60	0.15	〃
S K 113	P-11	不整形	1.20	1.10	1.00	0.80	0.10	〃
S K 125	Q-6	不整形円形	2.00	(1.18)	0.95	(0.34)	(0.35)	第26図
S K 127	Q-7	円形	1.10	1.09	0.95	0.90	0.16	〃
S K 129	Q-7	長楕円形	2.68	0.84	2.49	0.67	0.18	第26図
S K 132	Q-8	楕円形	1.85	(1.62)	1.60	(1.52)	(0.20)	第26図
S K 133	O-6	楕円形	1.35	0.84	0.39	0.34	0.40	第26図
S K 140	O-7	楕円形	0.94	0.40	0.90	0.30	0.70	〃
S K 145	P-7	長楕円形	1.70	0.75	0.84	0.28	0.32	第27図
S K 161	N-6	円形	0.70	0.60	0.40	0.30	0.10	〃
S K 162	N-6	不整形円形	1.30	0.70	1.00	0.40	0.20	〃
S K 165	N-7	不整形	2.17	1.82	0.68	0.67	0.40	第27図
S K 166	O-8	不整形円形	1.20	0.40	1.00	0.30	0.05	〃
S K 167	O-8	円形	0.50	0.20	0.40	0.13	0.03	〃
S K 174	O~P-8~9	不整形円形	1.53	1.34	1.13	1.03	0.27	第27図
S K 175	Q-7	不整形円形	1.82	1.44	1.50	1.22	0.30	第27図
S K 176	K-7	不整形円形	(1.70)	1.10	(1.47)	0.74	0.17	第27図
S K 177	K-7	不整形円形	1.46	(0.68)	1.15	(0.53)	0.22	第27図
S K 178	J-6	不整形円形	2.67	1.38	2.33	1.15	0.19	第28図
S K 179	J-6	円形	1.00	0.90	0.80	0.30	0.20	〃
S K 180	J-6	不整形円形	0.60	0.40	0.50	0.20	0.14	〃
S K 184	J-10	長楕円形	2.32	1.90	2.00	0.50	0.20	〃
S K 185	J-10	不整形円形	3.02	1.89	2.21	1.55	0.17	第28図
S K 186	J-10	円形	0.80	0.60	0.50	0.10	0.10	〃
S K 191	I-8	不整形円形	0.70	0.50	0.60	0.20	0.10	〃
S K 192	I-8	楕円形	1.00	0.80	0.70	0.30	0.08	〃
S K 193	I-8	楕円形	0.90	0.60	0.70	0.20	0.07	〃
S K 200	K-6	不整形円形	1.23	0.85	0.85	0.49	0.17	第28図
S K 203	U-11	不整形	2.27	1.30	1.93	0.68	0.33	第28図
S K 206	U-11	円形	0.70	0.50	0.30	0.20	0.20	〃
S K 213	U-11	楕円形	1.20	0.40	1.00	0.40	0.21	〃
S K 215	U-11	楕円形	1.67	0.97	0.88	0.66	0.30	第28図
S K 221	R-8	不整形円形	1.20	0.90	0.70	0.50	0.20	〃
S K 233	X-11	不整形円形	1.16	1.25	0.89	0.70	0.30	第28図
S K 235	X-12	不整形円形	1.27	1.07	0.89	0.72	0.27	第28図

遺構内土坑・柱穴

遺構番号	グリッド	平面形態	規 模 (m)				深さ	押図番号
			上 端		下 端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
E K 102	R-8	円形	0.21	0.12	0.12	0.07	0.04	第4図
E K 262	X-11	楕円形	1.73	0.57	1.35	0.39	0.23	第24図
E P 230	R-7	不整形円形	0.90	0.80	0.70	0.60	0.17	第4図
E P 231	R-8	不整形円形	0.60	0.40	0.35	0.20	0.20	第4図
E P 257	R-10	楕円形	0.11	0.09	0.08	0.05	0.16	第14図
E P 258	R-10	不整形円形	0.11	0.05	0.08	0.02	0.18	第14図
E P 259	P-8	楕円形	0.70	0.66	0.42	0.38	0.17	第10図
E P 260	P-8	楕円形	0.34	0.26	0.20	0.38	0.23	第10図
E P 261	P-8	楕円形	0.40	0.36	0.14	0.04	0.18	第10図

表-4 遺構観察表(3)

遺構番号	グリッド	平面形態	規模 (m)					押戻番号
			上端		下端		深さ	
			長軸	短軸	長軸	短軸		
S P114	P-11	円形	0.50	0.40	0.30	0.20	0.10	
S P118	R-7	不整形円形	0.70	0.30	0.50	0.20	0.12	
S P119	R-7	円形	0.30	0.20	0.10	0.10	0.07	
S P120	R-7	楕円形	0.30	0.20	0.20	0.10	0.10	
S P122	S-6	円形	0.72	0.70	0.41	0.35	0.63	第30図
S P124	Q-6	円形	0.80	0.40	0.40	0.20	0.38	
S P136	O-6	不整形円形	0.97	0.64	0.27	0.25	0.26	第30図
S P139	O-7	不整形円形	1.41	0.63	0.52	0.27	0.42	第30図
S P143	O-7	不整形円形	0.93	0.70	0.39	0.24	0.28	第30図
S P163	N-6	不整形円形	1.00	0.40	0.80	0.20	0.10	
S P168	O-7	不整形円形	0.65	0.49	0.41	0.21	0.20	第30図
S P205	U-11	不整形円形	0.43	0.38	0.24	0.13	0.25	第30図
S P207	T-11	円形	0.58	0.57	0.37	0.36	0.07	
S P209	U-11	長楕円形	1.30	0.37	1.16	0.19	0.20	第31図
S P210	U-11	円形	0.40	0.30	0.30	0.20	0.10	
S P211	U-11	不整形円形	0.61	0.50	0.33	0.41	0.43	第31図
S P212	U-11	不整形円形	0.45	0.25	0.33	0.15	0.20	
S P214	U-11	円形	0.81	0.64	0.56	0.14	0.10	第31図
S P216	U-11	円形	0.40	0.40	0.30	0.20	0.16	
S P217	U-11	楕円形	0.70	0.50	0.20	0.10	0.20	
S P218	V-11	楕円形	0.30	0.20	0.20	0.10	0.06	
S P219	R-8	長楕円形	1.26	0.43	1.01	0.25	0.11	第31図
S P222	U-11	円形	0.60	0.50	0.15	0.10	0.26	
S P223	U-10	不整形円形	0.90	0.84	0.57	0.50	0.23	
S P224	V-10	不整形円形	(0.50)	0.40	(0.32)	0.30	0.13	
S P226	W-10	楕円形	0.40	0.30	0.30	0.20	0.02	
S P229	R-8	不整形円形	0.65	0.50	0.48	0.43	0.14	
S P236	W-11	円形	0.30	0.30	0.20	0.20	0.20	
S P237	W-12	不整形円形	0.40	0.20	0.20	0.20	0.20	
S P242	P-10	楕円形	0.45	0.28	0.31	0.20	0.13	
S P243	P-10	楕円形	0.58	0.43	0.39	0.22	0.10	
S P247	P-9	不整形円形	0.35	0.35	0.27	0.25	0.76	第31図
S P248	R-10	楕円形	0.32	0.17	0.25	0.11	0.16	第31図

不明遺構

遺構番号	グリッド	平面形態	規模 (m)					押戻番号
			上端		下端		深さ	
			長軸	短軸	長軸	短軸		
S X104	R-7	不整形	4.00	1.20	3.80	1.00	0.23	
S X107	S-8	不整形	1.78	1.20	1.63	0.99	0.42	第46図
S X110	R-10	不整形	2.65	2.05	(2.50)	1.78	0.09	第46図
S X126	Q-6~7	不整形	4.80	2.30	2.20	0.23	0.23	
S X130	Q-8	不整形	(1.85)	(1.56)	(1.85)	(1.45)	0.26	第47図
S X141	O-7	不整形	2.50	0.60	2.30	0.30	0.10	
S X154	P-9	不整形	(4.80)	(2.50)	(4.56)	(1.03)	0.10	
S X156	P-10	不整形	4.10	1.57	3.80	1.23	0.13	第47図
S X164	N-7	不整形	1.50	1.10	1.30	0.90	0.20	
S X172	O-8	楕円形	(0.60)	0.40	(0.50)	0.30	(0.10)	
S X196	I-9	不整形円形	2.80	1.30	2.60	1.10	0.70	
S X234	X-11	長楕円形	5.25	1.64	4.55	1.17	0.30	
S X238	Q-9	不整形	(0.80)	0.25	(0.75)	0.20	0.36	
S X244	O-10	不整形	2.85	2.28	2.75	0.78	0.01	
S X246	Q-9	不整形	(1.13)	0.33	1.11	0.27	1.05	

表-5 遺物観察表(1)

凡例

- 1 量量はmm単位で示した。口径について図上復元した推定値をも含む。
()内は遺物の残存状況を示すため、残存する最大値を示している。
残存しない部位、及び底部が丸底で計測値が出せない場合は - で表した。
- 2 胎土層の粗は粗砂混入、細は細砂混入、緻は緻密の略である。
- 3 調整は主なものを書き、調整順序の解るものについて → で示した。
- 4 備考欄にはその他の観察事項を記した。

遺物番号	RP番号	出土地点	種類	器種	法 量			胎土	調 整		備考	図版番号
					口径	底径	器高		外面	内面		
1	214	SD100	土師器	甕	91	-	(66)	粗	ミダキ	ケズリ+ミダキ	2孔一対4孔も	2
2	202	SD100	土師器	高坏	-	80	(52)	粗	ミダキ	ナデ	朱形 小型磨製土	4
3	122	SD100-R-8	土師器	甕	100	20	72	粗	ミダキ	ケズリ+ミダキ	埴	11
4	204	SD100	土師器	高坏	-	-	(54)	粗	ハケメ			8
5	215	SD100	土師器	甕	105	-	(32)	粗	ミダキ		内面調整不明	6
6	239	SD100	土師器	甕	96	-	(58)	粗	ミダキ		外内面調整不明	1
7	66	SD100	土師器	鉢	203	57	140	粗	ケズリ+ハケメ+ナデ	ナデ+ハラナデ	平底くぼみあり	20
8	206	SD100	土師器	鉢	-	70	93	粗	ミダキ	ミダキ+ナデ	平底くぼみあり	15
9	61	SD100	土師器	鉢	170	-	(72)	粗	ミダキ	ミダキ	外面朱形	14
10	122	SD100-R-8	土師器	鉢	118	-	(45)	粗	ミダキ	ハラナデ	外面朱形 内面磨製	10
11	220	SD100	土師器	鉢	112	53	61	粗	ナデ		平底くぼみあり	9
12	209	SD100	土師器	鉢	-	(35)	(63)	粗	ハケメ+ケズリ	ハケメ	底面に準孔	21-1
13	203	SD100	土師器	甕	154	-	(59)	粗	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ		17
14	190-201	SD100	土師器	甕	154	-	(32)	粗	ナデ	ナデ+ハケメ	外面磨製	73-2
15	122	SD100-R-8	土師器	甕	158	-	(47)	粗	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	外面朱形・内面も朱形 磨製土師の胎土	19
16	190	SD100	土師器	甕	179	-	(27)	粗	ナデ	ナデ		73-1
17	128	SD100	土師器	甕	186	-	(78)	粗	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ		18
18	120	SD100	土師器	甕	140	(80)	385	粗	ナデ+ハケメ+ミダキ	ナデ+ハケメ		29
19	240	SD100	土師器	甕	161	38	218	粗	ケズリ+ナデ+ハケメ	ケズリ+ナデ	磨製 ケズリ残存	22
20	201	SD100	土師器	甕	166	-	(163)	粗	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	磨製	13
21	241	SD100	土師器	鉢	-	(35)	(132)	粗	ハケメ	ハケメ	底面に準孔	16
22	359	ST150	土師器	甕	93	24	72	粗	ケズリ+ミダキ	ミダキ	母 縁状彫	12
23	224	ST150	土師器	鉢	116	45	76	緻	ハケメ+ナデ+ミダキ	ナデ+ミダキ	母 縁状彫	26
24	225	ST150	土師器	鉢	125	26	73	粗	ケズリ+ミダキ	ケズリ+ミダキ	変形	25
25		ST150	土師器	鉢カ	-	48	(32)	粗	ケズリ	ハケメ		28
26	311	ST150	土師器	鉢	-	35	(36)	粗	ミダキ	ミダキ	朱形	24
27	181	SD249	土師器	鉢	104	(100)	152	緻	ミダキ	ハケメ	台付鉢	-
28		ST150-EK3254	土師器	鉢	152	-	(57)	粗	ケズリ+ナデ	ハケメ+ナデ		73-4
29		ST150	土師器	甕	-	42	(72)	緻	ミダキ	ハケメ	直口	46
30	258	SD202	土師器	甕	-	(120)	(44)	粗	ミダキ		磨製に6孔 上下不揃	35
31	261	SD202	土師器	鉢	84	67	18	粗	ミダキ	ミダキ		36
32	258	SD202-ST201	土師器	高坏	-	190	(87)	粗	ナデ+ハケメ	ハケメ+ミダキ	磨製に3孔 上下不揃	34
33	362	ST201	土師器	甕	140	-	(63)	粗	ハケメ+ハラナデ	ハケメ+ハラナデ	埴	44
34	263	SD202	土師器	鉢	126	29	75	粗	ナデ+ハケメ+ミダキ	ハラナデ		38
35		SD202-R-9	土師器	甕	120	-	(58)	粗	ミダキ	ミダキ	埴	39
36	274	SD202	土師器	鉢	162	-	(64)	粗	ハケメ+ミダキ	ミダキ		40
37	254	SD202	土師器	鉢	120	-	73	粗	ミダキ	ミダキ	磨製ミダキ 変形	41
38	269	SD202	土師器	甕	110	25	73	粗	ハケメ+ミダキ	ミダキ	埴	43
39	271-272	SD202-ST201	土師器	鉢	208	-	91	粗	ケズリ+ハケメ+ナデ	ハケメ+ミダキ+ナデ		37
40		ST201	土師器	鉢	-	(32)	(32)	粗	ケズリ	ハケメ	底面に準孔	27

表-6 遺物観察表(2)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	高さ		調整			
									外 面	内 面		
41	400	SD202-ST201	土師器	甕	165	-	(65)	細	ハケムナナ	ハケム		48
42	262	SD602	土師器	不明	-	20	(97)	細	ハケム	ハケム	裏口	42
43	273	SD602	土師器	甕	-	-	(79)	細	ハケム	直口		47
44	259	SD202	土師器	甕	188	-	(76)	細	カズリハケム	ヘナナハケム		50
45	283	SD202	土師器	甕	260	-	(80)	細	ナナハケムミダキ	ハケムミダキ	退化した横合口蓋口	57
46	361	ST201	土師器	鉢	236	68	148	粗	ナナハケム	ハケム		49
47	281	ST201	土師器	甕	184	-	(96)	粗	ハケムナナ	ハケム		52
48	265	SD202	土師器	甕	192	-	(83)	粗	ハケムナナ	ハケムナナ		51
49	258-266	SD202	土師器	甕	190	-	(83)	粗	ハケムナナ	ハケム	内面 彫りあし込む	54
50	267	SD202	土師器	甕	194	-	(172)	粗	ハケムナナ	ハケムハケムナナ		59
51	259	SD202	土師器	甕	-	60	(30)	粗	ナナ	ヘナナ		56
52	56	SD202(上層)	土師器	壺	186	-	(228)	細	カズリハケムナナ	ハケムハケムナナ		58
53	350	ST181	土師器	甕台	-	(136)	(45)	粗	ミダキ	ヘナナミダキ	胴部に1孔確認	65
54	324	ST181	土師器	甕	142	-	(53)	粗	ハケムミダキナナ	ハケムミダキナナ		62
55	351	ST181	土師器	鉢	-	32	(74)	粗	カズリミダキ	ミダキ	胴部に乳孔	31
56		ST181	土師器	鉢	75	(42)	68	細	ハケムナナ	ヘナナ		61
57	323	ST181	土師器	甕	-	-	(145)	細	ハケム	ハケム		60
58	323	ST181	土師器	甕	76	-	(107)	細	ハケム	ハケムナナ		61
60	232	ST182	土師器	甕	164	-	(39)	細	ミダキ	ハケムミダキ		73-1
61	234	ST182	土師器	甕	166	-	(116)	粗	ハケムナナ		内面不明	66
62	353	ST232	土師器	甕台	82	(150)	60	微	ミダキ	ハケムミダキナナ		69
63	294	ST232	土師器	鉢	157	15	130	粗	ハケムナナ	ハケム	胴部に乳孔 ほぼ球形	79
64	295	ST232	土師器	甕	160	-	135	粗	ハケム	ハケムナナ	外周裏口側付着	72
65	288	ST232	土師器	甕	-	-	(185)	粗	ハケムナナ	ハケム		75
66	295	ST232	土師器	甕	-	52	(144)	粗	ハケム	ハケム		70
67	296	ST232	土師器	甕	202	(35)	(250)	粗	ハケムナナ	ハケムナナ		68
68		ST232	土師器	甕	118	-	(138)	細	ハケムヨコナナ	ハケムヨコナナ		70
69	293	ST232	土師器	甕	-	(50)	(105)	粗	ハケム	ハケム	乳鉢と同一個体か	64
70	191	ST232	土師器	甕	174	23	237	細	カズリハケムナナ	ハケムナナ		82
71	194	SK111	土師器	甕	210	35	183	粗	ハケムナナ	ヘナナナナ		89
72	81	SK203	土師器	甕	178	-	272	粗	ハケムナナ	ヘナナナハケム		88
73	329	SK176	土師器	甕	185	-	(148)	粗	ハケムナナ	ハケム	外周裏側張り付付痕	77
74	196	SK111	土師器	甕台	-	134	(62)	粗	ミダキ	胴内面ナナ・4孔		68
75		SK128	土師器	高坏	158	-	(51)	粗	ハケムミダキナナ	ハケム		75
76	193	SK111	土師器	鉢	171	38	82	細	カズリミダキ	ミダキ	底面 カズリ	86
77		SK229	土師器	鉢	122	-	(49)	粗	ハケムナナ	ヘナナ	口縁部に指環痕	63
78	198	SK111	土師器	鉢	-	34	(66)	粗	カズリミダキ	ヘナナナミダキ	底面 カズリ	67
79	332	SK156	土師器	鉢	-	57	(59)	粗	ミダキ	ヘナナ		86
80	199	SK111	土師器	甕	198	-	(81)	粗	ハケムナナ	ハケムヘナナ		87
81		SK200	土師器	鉢	-	57	(31)	粗	ハケム	ハケム	底面 ハケム	-
82	193	SK111	土師器	甕	196	-	(74)	粗	ハケム	ハケムナナナナミダキ	外面 不明	74
83	191	SK111	土師器	甕	183	25	228	粗	カズリハケムナナ	ヘナナナナ	ほぼ完整	90
84	194	SK111	土師器	甕	216	32	278	粗	ハケムナナ	ハケム		87
85	194	SK111	土師器	甕	186	32	215	細	ハケムナナ	ヘナナナハケム		83
86	126	SD101	土師器	甕台	-	(140)	(102)	粗	ミダキ	ミダキ	胴部(乳)溝受部20単位	95
87	174	SD101-P-10	土師器	甕台	-	-	(20)	細	ナナ	溝受部10単位		98
88	24	SD101-Q-8	土師器	甕台	226	-	(37)	粗	ナナ	胴部(乳)2孔確認		106
89		SD101-Q-9	土師器	甕台	-	-	(38)	粗	ミダキ	ミダキ		96
90	150	SD101	土師器	甕台	-	(130)	(75)	粗	ミダキ	ミダキヘナナ	胴部に乳3単位	93

表-7 遺物観察表(3)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	高さ		調整			
									外 面	内 面		
91	79	SD101	土師器	甕台	90	112	140	粗	ハケムミダキ	ハケムミダキナナ		102
92		SD101-Q-9	土師器	甕台	100	(140)	(82)	粗	カズリミダキ	ミダキハケムナナ		103
93	170-221	SD101	土師器	甕台	-	-	(44)	粗	ミダキ	ナナ	外面 朱彩	3
94	150	SD101	土師器	甕台	-	128	(74)	粗	ミダキ	ミダキハケム	外面 朱彩	94
95	118	SD101-Q-9	土師器	甕台	-	(128)	(61)	微	ハケムミダキ	ヘナナハケム	胴部に乳4単位	91
96		SD101-Q-9	土師器	甕台	-	158	(90)	粗	ミダキ	ハケムナナ	胴部に乳4単位	97
97	149	SD101-Q-9	土師器	高坏	141	93	94	微	カズリミダキ	ミダキ	朱彩	122
98	137	SD101	土師器	高坏	-	(108)	(175)	粗	ハケム	ハケム		-
99	301	SD101	土師器	高坏	-	(98)	(35)	粗	ミダキ	ミダキナナ	外面 朱彩	104
100	58	SD101	土師器	高坏	196	-	(56)	粗	ハケムミダキ	ハケムミダキ		101
101		SD101-P-8	土師器	高坏	-	(219)	(35)	粗	ナナ	ハケムナナ	外面 朱彩	-
102	125	SD101	土師器	鉢	130	35	76	細	カズリミダキナナ	ミダキ	完整	108
103	309	SD249	土師器	鉢	150	-	70	粗	ミダキ	ミダキ	内外面に煤付着	210
104		SD101-Q-9	土師器	鉢	148	-	70	微	ミダキ	ミダキ		114
105	117	SD101-Q-9	土師器	甕	91	42	57	細	カズリミダキ	ミダキ	埴 完整	107
106	147	SD101	土師器	甕	120	20	54	粗	ハケムミダキ	ハケムミダキ	外面	109
107		SD101-Q-9	土師器	鉢	158	-	(75)	粗	ミダキ	ミダキ	埴面に煤付着	-
108	71	SD101-Q-9	土師器	鉢	138	-	(52)	粗	カズリミダキ	ミダキ		113
109	299	SD101	土師器	鉢	102	34	49	粗	ハケムナナ	ハケムナナ	完整	110
110	178	SD101-Q-10	土師器	甕	-	33	(60)	粗	カズリミダキ	ミダキ	埴	119
111	54	SD101	土師器	甕	90	-	(90)	粗	ミダキ	ミダキ	直口	116
112	147	SD101	土師器	甕	-	-	(125)	粗	ミダキ	ハケムミダキ		129
113	115	SD101-Q-9	土師器	甕	152	-	(57)	粗	ハケムミダキナナ	ハケム		-
114	142	SD101-Q-9	土師器	甕	314	-	(73)	粗	カズリミダキナナ	ハケムナナ		128
115	308	SD101	土師器	甕	275	-	(99)	粗	ミダキ	ハケムナナ		126
116	116	SD101-Q-9	土師器	甕	198	-	(57)	粗	ナナ	ナナ		-
117	160	SD101-Q-9	土師器	甕	218	-	(53)	粗	ナナ	ハケムナナ		130
118	186	SD249	土師器	甕	150	-	(215)	粗	ハケムミダキ	ハケムミダキ	直口 外面に煤付着	115
119		SD101-Q-9	土師器	甕	134	40	-	粗	ミダキ	ハケム	直口 外面に煤付着	105
120	164	SD101	土師器	甕	-	-	(52)	粗	ナナ	埴口直口露出		112
121	157	SD101-Q-9	土師器	甕	-	108	(62)	粗	ハケム	ハケム	台付甕	155
122	144	SD101-Q-9	土師器	甕	155	79	465	細	ハケムミダキナナ	ハケムナナ	ほぼ完整	140
123	93	SD101	土師器	甕	170	-	(42)	粗	ナナハケム	ナナハケム		-
124	146	SD249	土師器	甕	165	-	(44)	粗	ナナハケム	ヘナナナナ		144
125		SD101-Q-9	土師器	甕	168	-	(65)	粗	ナナハケム	ヘナナナナ	胎土良好程度砂少	145
126	51	SD101-Q-10	土師器	甕	182	-	(88)	粗	ナナハケム	ヘナナナナ	内面調整不明 朱彩	152
127		SD244	土師器	甕	173	-	(147)	粗	ナナハケム	ナナハケム		156
128	158	SD101-Q-9	土師器	甕	149	-	(149)	粗	ハケムナナ	ハケムミダキナナ		160
129	174	SD101	土師器	甕	-	70	(104)	粗	ハケム	ハケムナナ		136
130	163	SD101-Q-9	土師器	甕	-	74	(84)	粗	ハケムナナ	ハケム	胴部ハケム 外周煤付着	133
131	62	SD101	土師器	甕	-	70	(89)	粗	ハケム	ハケム		127
132		SD101-R-11	土師器	甕	142	-	(101)	粗	ハケムナナ	ハケムナナ	口縁部内面に土つぶ 断面高	60-1
133	169	SD101-Q-8	土師器	甕	190	-	(167)	粗	ハケムナナ	ハケムナナ		124
134		SD101-Q-9	土師器	甕	-	64	(38)	粗	ハケム	ハケム		139-2
135		SD101-Q-9	土師器	甕	-	31	(34)	粗	ハケム	ハケム		158-2
136		SD101-Q-9	土師器	甕	-	74	(55)	粗	ヘナナナハケム	ハケム		139-1
137		SD101-Q-9	土師器	甕	-	36	(40)	粗	ハケム	ハケム		158-1
138	124	SD101	土師器	甕	256	-	(104)	粗	ハケムナナ	ハケムナナ	胎土良好	142
139	155	SD101-Q-9	土師器	甕	202	-	(142)	粗	ナナハケム	ヘナナナハケム		153
140	142	SD101-Q-9	土師器	甕	254	-	(162)	粗	ナナハケム	ナナハケム		159

表-8 遺物観察表(4)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			出土	調 査		備 考	図版番号
					口徑	底徑	器高		内 面			
									外 面	内 面		
141	36	SD101-J-10	土師器	甕	176	44	250	粗	ナデハケメ	ナデハケメ		232
142	54	SD101	土師器	甕	160	36	216	粗	ハケメ	ハケメ	外周 専好に備付管	151
143	165	SD101	土師器	甕	-	-	(232)	細	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ		148
144	173	SD101	土師器	甕	184	-	(215)	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ		125
145	142	SD101-Q-9	土師器	甕	334	-	(67)	粗	ハケメ+ナデ	ナデ		143
146	156	SD101	土師器	甕	216	-	(110)	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ		141
147	90-194	SD101-Q-10	土師器	甕	120	-	(72)	粗	ナズリ+ナデ	ナズリ+ナデ		137
148	176	SD101-Q-10	土師器	甕	234	-	(45)	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ		146
149	142	SD101	土師器	甕	188	-	(74)	粗	ナデハケメ	ハケメ		138
150	167	SD101	土師器	甕	114	-	(107)	細	ミダキ	ナデ		147
151		SD241	土師器	甕	-	(40)	(80)	粗	ナズリハケメ	ハケメ		154
152	148	Q-9	土師器	甕	186	28	130	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ		131
153		SD101-P-8	土師器	甕	180	-	(90)	粗	ハケメ	ハケメ	口縁部に有線注裏	30
154	140	SD101	土師器	鉢	-	15	(48)	粗	ナズリ+ミダキ	ナズリ+ナデ	底部に準孔	111
155	183	SD249	土師器	甕	-	23	(54)	粗	ナズリ	ハケメ		111
156	303	SD101	土師器	甕	-	38	(56)	粗	ナズリ+ハケメ	ハケメ	底部 ナズリ+ハケメ	-
157	29	SD101	土師器	甕	-	26	(114)	粗	ナズリ+ハケメ	ハケメ	底部 ナズリ+ハケメ	134
158		SD101-Q-9	土師器	鉢	-	36	(21)	粗	ナズリ	ミダキ	底部に準孔	-
159		SD101-Q-9	土師器	鉢	-	64	(25)	粗	ナデ	ハケメ	底部に準孔	-
160		SD101-Q-9	土師器	鉢	-	-	(28)	粗	ハケメ	ハケメ	底部に準孔	-
161		SD244	土師器	鉢	-	32	(27)	細	ナズリ	ナデ	底部に準孔	-
162		Q-9	須恵器	壺	-	-	-	鉄	タタキ	タタキ+ナデ	右式須恵器	-
164	314	SG	土師器	甕台	96	133	87	鉄	ミダキ	ハケメ+コナデ	底部に準孔3単位	180
165	317	SG	土師器	甕台	90	128	75	鉄	ミダキ	ナズリ+ミダキ	底部に準孔4単位	165
166		SG L-10	土師器	甕台	-	-	(40)	細	ミダキ	ミダキ+ナデ		172
167		K-6	土師器	甕	118	-	(81)	細	ミダキ	ナデ	直口	213
168	30	I-10	土師器	甕台	91	-	(53)	粗	ナズリ+ミダキ	ミダキ+ハケメ	胴部に輪状痕・3孔	165
169	34	I-10	土師器	甕台	86	-	(60)	粗	ナデ	胴部・胴部不明		200
170		SG I-9	土師器	甕台	94	-	(18)	粗	ナデ+ミダキ	ミダキ	外 外面彩色痕	176
171		SG L-10	土師器	甕	-	22	(27)	粗	ミダキ	ミダキ		175
172		SG L-10	土師器	甕	124	-	(53)	粗	ミダキ	ハケメ+ミダキ		177
173		SG L-7	土師器	甕	-	(132)	(70)	粗	ミダキ	ミダキ	内黒	199
174		SG L-10	土師器	甕台	-	(130)	(60)	粗	ミダキ	ミダキ+ハケメ	胴部に3孔	166
175		鞍部 I-10	土師器	甕台	-	(104)	(58)	粗	ハケメ+ミダキ	ハケメ+ミダキ	胴部に4孔	171
176		SG L-10	土師器	鉢	144	-	(44)	粗	ハケメ+ミダキ	ミダキ		198
177	322	SG	土師器	鉢	110	35	55	粗	ハケメ+ミダキ	ミダキ		170
178		SG L-10	土師器	鉢	152	43	77	鉄	ナズリ+ナデ+ミダキ	ナズリ+ナデ+ミダキ		160
179		SG L-10	土師器	鉢	160	-	(90)	粗	ナズリ+ミダキ	ハケメ+ミダキ	外面備付管 二次焼成	203
180		鞍部 I-10	土師器	鉢	164	-	(56)	粗	ハケメ+ミダキ	ココナデ+ミダキ		179
181	317-320	SG	土師器	鉢	196	-	(100)	鉄	ナズリ+ミダキ	ハケメ+ミダキ		181
182		I-10	土師器	鉢	186	-	(51)	粗	ミダキ	ミダキ	内面黄変不明	208
183		SG L-10	土師器	甕	150	-	(76)	粗	ハケメ+ミダキ	ナズリ+ミダキ	直口	183
184		SG M-10	土師器	甕	164	-	(64)	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	口縁部縁状痕・内面彩色痕 二次焼成	168
185	316	SG	土師器	甕	130	23	188	鉄	ハケメ+ミダキ	ハケメ+ミダキ	直口 底部に準孔	182
186	322	SG L-10	土師器	甕	102	-	(55)	粗	ミダキ	ナズリ+ミダキ	Na.17と同一傾斜角	190
187		SG L-10	土師器	甕	-	25	(44)	粗	ミダキ	ミダキ		191
188		K-8	土師器	甕台	-	110	(53)	粗	ナデ	ナデ		223
189	313	SG	土師器	甕	155	-	(65)	粗	ナズリ+ハケメ	ナズリ+ハケメ		188
190		SG L-10	土師器	甕	184	-	(45)	粗	ナデ+ハケメ	ハケメ		189

表-9 遺物観察表(5)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			出土	調 査		備 考	図版番号
					口徑	底徑	器高		内 面			
									外 面	内 面		
191		SG L-10	土師器	甕	192	-	(81)	粗	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ		186
192	317	SG	土師器	甕	194	-	(109)	粗	ナデ+ハケメ	ナズリ+ハケメ	黄変単純口縁線	184
193	320	SG L-10	土師器	甕	-	(28)	(72)	粗	ハケメ	ナズリ+ハケメ	底部 若干くぼむ	187
194		K-8	土師器	甕	-	68	(92)	粗	ハケメ	ナズリ		211
195	322	SG	土師器	甕	150	-	(143)	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ	付付平底	192
196		SG L-10	土師器	甕	178	-	(125)	粗	ナデ+ハケメ	ナズリ+ハケメ		193
197		H-8	土師器	甕	184	-	(195)	粗	ナズリ+ハケメ	ハケメ+ナズリ		227
198	320	SG	土師器	甕	148	26	158	粗	ナズリ+ハケメ	ハケメ		178
199		L-11	土師器	甕	-	-	(39)	粗	ナデ	ナデ		174
200		R-8	土師器	甕台	182	-	(49)	粗	ミダキ	ミダキ	外・内面ヘラ割き 粘土質	174
201	83	鞍部	土師器	甕台	91	150	92	粗	ナズリ+ミダキ+ナデ	ミダキ+ハケメ+ナデ		206
202		O-7	土師器	甕台	120	(150)	90	粗	ナズリ+ミダキ+ナデ	ナデ	胴部4孔	194
203		SD101-ST201	土師器	高坏	96	-	(25)	鉄	ミダキ	ミダキ	外・内面 朱彩	99
204	138	SD101-G-9	土師器	甕台	84	(122)	78	粗	ハケメ+ミダキ+ナデ	ミダキ		196
205		鞍部 U-10	土師器	甕台	-	104	(68)	粗	ハケメ+ミダキ	ハケメ+ミダキ	2孔 1対で4孔	197
206		Q-8	土師器	甕台	-	(125)	(71)	粗	ミダキ	ミダキ+ナデ	胴部4孔	-
207	39	Q-10	土師器	高坏	-	-	(25)	鉄	ミダキ	ミダキ	外面に備付管	100
208		鞍部 A1-レンチ	土師器	高坏	-	-	(100)	鉄	ミダキ	ハケメ	胴部中空	204
209		U-11	土師器	高坏	-	-	(68)	鉄	ミダキ	ナズリ	胴部中央	202
210	9	D-7	土師器	高坏	-	110	(76)	粗	ミダキ	ナデ	輪状痕残	203
211	22	SD101	土師器	高坏	-	-	(70)	鉄	ミダキ	ミダキ	胴部中空・タタキ 突に底部に輪状痕	201
212		S-7	土師器	高坏	175	(150)	126	粗	ハケメ+ミダキ	ハケメ+ミダキ		205
213	67	R-7	土師器	甕	128	-	(66)	粗	ナズリ+ミダキ	ハケメ+ミダキ		221
214		R-9	土師器	不明	-	(52)	(35)	鉄	ナデ	ナデ		214
215		鞍部 Y-11	土師器	鉢	185	-	(56)	粗	ミダキ	ナデ	有孔縁	207
216		鞍部 U-10	土師器	甕	-	28	(76)	粗	ナズリ+ミダキ	ハケメ+ナズリ	直口	-
217		SG K-11	土師器	甕	204	-	(54)	粗	ナデ+ハケメ	ハケメ		217
218	57	R-9	土師器	甕	172	-	(96)	粗	ナズリ+ハケメ	ナズリ+ハケメ	備付管	150
219	42	E-7	土師器	甕	160	50	182	粗	ナズリ+ハケメ	ナズリ+ハケメ	外面 備付管	225
220	41	E-8	土師器	甕	158	-	148	粗	ハケメ	ハケメ		225
221		E-7	土師器	甕	-	(60)	(291)	粗	ナズリ+ハケメ	ハケメ+ミダキ+ナデ		224
222		鞍部 C1-レンチ	土師器	甕	208	-	(142)	粗	ナズリ+ハケメ	ナズリ+ハケメ		220
223	320	SG O-10	土師器	甕	174	-	(158)	粗	ナズリ+ハケメ	ナズリ+ハケメ	外面 備付管	217
224		鞍部 U-10	土師器	甕	-	80	(320)	粗	ナズリ+ハケメ	ハケメ		216
225	63	SD202	土師器	甕	190	-	(172)	粗	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ		226
226	44	ST181	土師器	甕	185	-	(203)	粗	ハケメ+ナデ	ナズリ		241
232		K-6	須恵器	高坏	-	(92)	(18)	細	コナデ	コナデ	底部 ヘラ切	231
233		Q-6-7	組器	甕	-	(52)	(16)	鉄			黄変5~14C 器付口縁部黄変不顕著	229
234		Q-8	組器	甕	-	40	(40)	鉄			肥培赤 11C~ 黄入あり	228
235		K-6	中世陶器	摺鉢	-	-	(34)	粗			珠粒赤 縁部に黄変	230

凡例

- 1 法量の単位はmmである。
土製品はいずれも円柱状または環状を呈するため、最も遺存状態のよい部分を正面として最大径と最大幅を計測した。
厚は幅と直交する位置での値である。
石製品では主に使用したと見られる面を正面とした。
- 2 古銭の法量は、摩滅している点を考慮して、外郭内径と内郭外径の値を採用した。
重量の単位はgである。
- 3 残存しない部位は「-」で表した。
- 4 備考欄にはその他の観察事項を記した。

報告番号	遺物番号	出土地点	種別	種類	法量			備考	図版番号
					長	幅	厚		
59	ST182-J-9	土製品	不明	12.8	15.0	15.8	土師器の一部	73-5	
163	RQ33 SG-I-10	石製品	砥石	162.0	54.0	57.0		235	
227	トロンチ	土製品	土甕	41.2	41.8	41.2	ミガキ調整あり	236-1	
228	U-11	土製品	土甕	53.6	43.6	42.2	ハケメ・ミガキ調整あり	236-2	
229	P-8	土製品	土甕	32.1	29.5	29.2		236-3	
230	X-11	土製品	円環状土製品	2.4	2.4	0.9		236-5	
231	R-7	土製品	円環状土製品	2.3	2.3	0.9		236-4	
236	RQ53 Q-11	石製品	砥石	180.0	43.0	52.0	二面使用 整形痕あり	164	
237	RQ20 Q-5	石製品	砥石	157.0	70.0	60.0	一面使用 整形痕著しい 機帯用カ	162	

報告番号	遺物番号	出土地点	種別	種類	法量			備考	図版番号
					外郭内径	内郭外径	厚		
238	K-6	金属製品	古銭	19.5	6.2	0.9	1.20	永楽通寶 初鑄年 1587	237-1
239	M-9	金属製品	古銭	17.2	7.5	0.9	2.30	平安通寶 初鑄年 1580	237-2
240	N-10	金属製品	古銭	20.4	-	1.2	2.38	寛永通寶 初鑄年 1668 二次使用している	237-3

表-10 出土遺物(III層)分布表

遺	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	
6								9	49	4		1	4	89	1	3								
7	4	15			1	2	4	2	4		1	11	25	40	14	5	1							
8	2		9	1	7		3					6	61	202	17	31								
9			7		31						1	11	11	82	44	3								
10			2	3	23						6	12	4		9		2	2	3					
11						13		27		10		6	20	176						5	60	24		

遺	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	
6								4	2	1			3		2	2	1							
7		3					2	1				6	5	28	5	1								
8			1		3						1	25	6	11	9	1								
9			5	11								2	4	30	1	1								
10			2	4							5	4	1	1	1		1		3					
11					1	11		3		2	8	3					3	1	15					

銭	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	
6		1			1				6	3			3		3									
7	1	7				1	1						3	6	9	5								
8			1		1								16	14	5	11								
9				3	2								5	7	6	4	3							
10			2	1					2	8	1		1		1									
11					5	2	2			2	10								1	4				

*この表は遺構内出土の遺物数は含まない。接合したものや完形品は一点と数えた。

表-11 遺構内出土遺物点数表

遺物番号	環	皿	鉢	小瓶/丸形	有孔鉢	甕	高杯	その他	小計
ST105	25	6	3						33
ST156	67	20	28	6		2	2	2	127
ST181	14	7	9		1				33
ST182	12	10	5	1				1	29
ST201	66	30	17		1		1	1	117
ST228	17	1	1						21
ST232	56	2	1	2	1	1			63
ST285	1								1
ST288	1								1
小計	259	76	62	9	3	9	3	4	425
S D100	444	128	108	13	1	26	8	41	769
S D101	1284	276	240	18		47	43	21	2413
S D128	7								13
S D151	5								5
S D152	8	1	4						13
S D153	2								4
S D156	3		9						12
S D157	5	1	3				1		10
S D158	12	3	4						20
S D183	3								3
S D202	106	49	30	2			5	2	185
S D220	81	13	13	2					109
S D241	4	1	1						7
S D244	83	17	7			1		1	109
S D245	14	4	3						21
S D270	7	4	2						13
小計	2568	400	428	27	2	79	55	50	3714
S K106	6	2	1						10
S K106	3	1							4
S K110	14	3	2						19
S K111	23	6	4			2			36
S K125	3	1	2						6
S K126	9	2							11
S K127	1								1
S K129	4	1							5
S K132	15	9	3						27
S K133	4	1							5
S K143	1								1
S K160	1	1	2						4
S K165	4								4
S K166	1	2	2						5
S K172	3	2	2						7
S K174	4	2							6
S K176	5	3							8
S K178	5	2							7
S K179	2	1							3
S K185	15	3	3						21
S K191		1							1
S K194	1	2	2						5
S K196	1	2							3
S K198	2								2
S K199	3	1						1	5
S K200	4	2	2						8
S K203	17	2	4						23
S K214	1								1
S K215	5	1							6
S K229	5	4	3						12
S K233	5	3	1						9
S K234	3								3
小計	170	33	36	0	0	2	0	3	284
S P109	1								1
S P114	2								2
S P122	1		1						2
S P123	1								1
S P167	2								2
S P230	1								1
S P242	3	1							4
S P243	1								1
S P256	7								7
S P259	1								1
S P257	1								1
S P259	1	2	1						4
小計	19	6	2	0	0	0	0	0	27
S X107	8	1	1						10
S X130	4	1	1						6
S X131	1								1
S X154	10	5							15
S X156	28	10	4					1	47
S X228	17	1						2	20
S X246	8								8
小計	60	14	11	0	0	0	2	1	87
S G	687	184	69	1		19	4	3	947
総計	182	70	32			8	3	17	312

* 接合したものや完形品は一点と数えた。

9. まとめ

本遺跡では周溝をもつ住居3軒、堅穴住居3軒、土坑37基、溝跡15条（畝状溝を含む）、柱穴33基、河川跡がA区東南の自然堤防上を中心に検出された。ここでは周溝をもつ住居他の検出状況等について若干補足説明と疑問点を提示した。

周溝をもつ住居は平地式の形態をとり、高地には見られず、低湿地に見られるものと言われ⁽²⁹⁾、水位の高い当遺跡においても堅穴ではなく、平地式であった可能性がある。住居跡の内部は凹凸が激しく当初は掘り方と認識していたが、平地式住居とすれば疑問が残る。またS T150・201には各々S D249・202という住居を囲む溝跡が伴うと考えられるが、前節でも触れたとおり、当初は住居のプランと考えていた壁際の鞍部は独立した溝と考えても不自然ではない。S D249・202は明らかに住居を囲む溝ではある。これらの遺構を検出した当時、どちらも現S T150・201に切られる形で検出される遺構らしきものが存在した。これらの覆土は炭化粒を含み、0.03mも掘り下げるとすぐに消滅してしまい、遺構とは認識しなかった。即ちS D249・202が囲む住居は別にあり、それらは精査中に消滅してしまった可能性も考えられる。

堅穴住居としたS T181・182・232についてはIII層上面から掘り込まれていたとしても、その深さは0.3mにも満たないものであり、堅穴住居とするには疑問が残る。またIII層上面には伊跡と考えられる円形の焼土面が3基ほど確認されている。この伊跡に伴う住居は検出できなかったが、重複関係も含めて3軒以上存在した可能性もある。

N-Q-6~7付近は柱穴群が密に分布する。深く掘り込まれているものも見受けられた。しかし建物を構成するには至っていない。この地区の遺構の覆土は上層のものは地山と顕著な違いは見られず、下層には土色の変化や混入物が認められた。おそらく未検出のものも相当数存在したものと予想され、掘立柱建物の存在が考えられる。

水田跡の生産遺跡も検出できなかった。ただし助作遺跡で検出されたような畝状の溝跡は存在するもの、これが生産遺構であるかどうかは検討を要する。

今回の調査で一括性の高い遺物群は住居跡ではS T182・232、土坑ではS K111、実測図は掲載されていないがS D185内出土遺物である。遺構と同時性の高いものはS T181・182・232、S K111・176である。S T182で復元できた実測図は3点程しか掲載されていない。その他やや不安は残るがS D100・202も遺構の時期をある程度反映した資料と言えるかもしれない。S D101や河川跡の遺物は今回の調査で最も大量の遺物が出土しているが例えは河川跡の場合の出土状況は底面からの出土はなく、立ち上がり部分である。S D101では時期差が認められる遺物が混入している状況である。

なお鉄石英はS D100・S T232・S K111・河川跡等で破片や石核の形で出土しているが、玉類や石器の完成品はない。碧玉製品も検出できなかった。土師器では蓋も出土していない。

第V章 中野遺跡

1 遺跡の概要

調査区の概要

畑田遺跡から北西に約100m程隔てた所に位置し、中野集落の南側にあたる。この辺りの標高は南へ北へ低くなっているが、中野も例外ではなく畑田よりわずかに低い。調査面積は、トレンチ・拡張部分合わせて3,544平方mである。調査区を拡張する前に7本のトレンチを設定し、遺構・遺物の確認を行ったがその結果は以下のとおりである。尚、グリッドY軸に沿って設定したため、トレンチ番号は、そのグリッド番号とした。

- (7) 南から50mの範囲まで、攪乱されており、遺構は認められない。
- (8) 遺構は認められない。
- (9) 南から30mの範囲まで溝跡・土坑等が確認された。
- (10) 南から30mの範囲まで溝跡・土坑等が確認され、また土器片も出土した。
- (11) 南から40mの範囲まで溝跡・土坑等が確認され、100~130mの範囲に新しい溝が切り合って確認された。
- (12) 南から70mの範囲に遺構・攪乱が交錯するように多数確認された。
- (13) 南端に2条の溝跡が確認された。

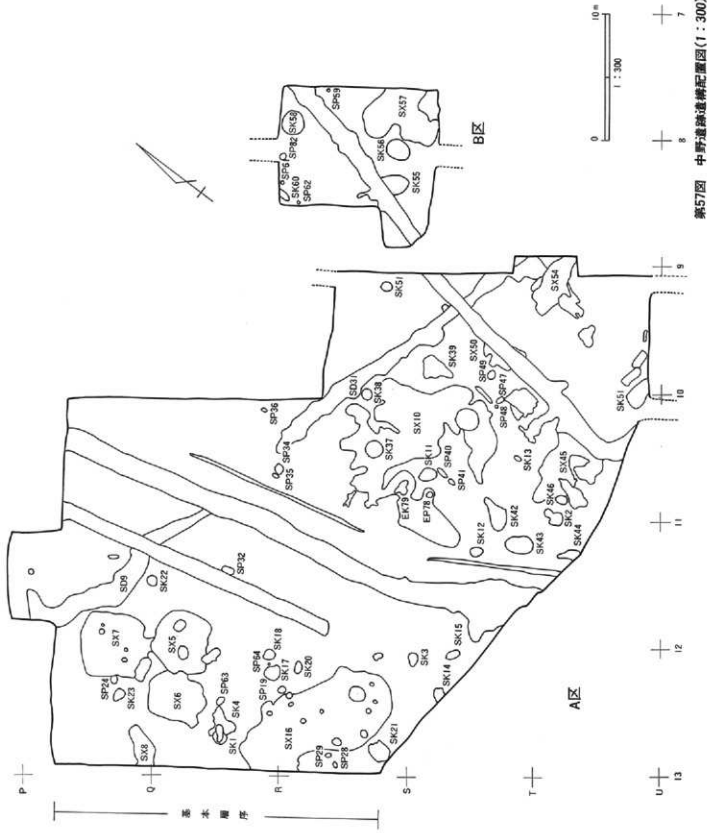
上記のとおり、遺構は殆ど南側から確認され、また断面より南から北へ次第に地山が低くなっていくことが確認された。これらの結果を元に工事範囲の南側を調査区として南側のA区、北側のB区合わせて1,500平方mを拡張することとした。

基本層序

層序は6層から成る。I~III層の上層を除けば、比較的安定しており、黄色~褐色を主体とした数砂~シルトで形成される。V層の包含層は、上下層に比較して炭化粒をかなり多量に含んでおり他層との区別が明確である。B区においては、土坑から須恵器が出土したが、B区の層序から明確な平安時代の包含層と思われる層は確認することができず、地山についてはA区とほぼ同様の土色・土質であった。表土から地山までは約50cmあり、標高は約12.5mを測る。

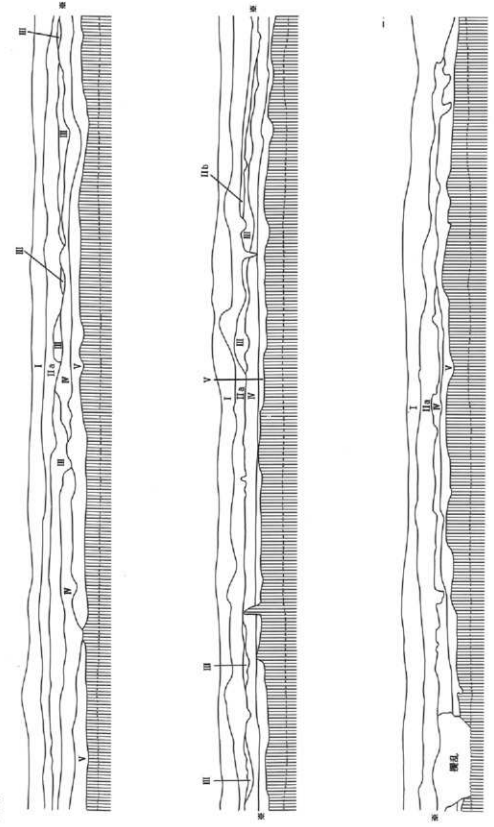
遺構と遺物の分布

この辺りには、水田として整備される以前は集落があったと言われ、今回の調査において遺構は多数確認されたが、それにかかわる遺構は認められなかった。遺構は、溝跡2条、土坑26基、柱穴25基、不明遺構9基、遺構内土坑・柱穴17基の合計79基検出された。A区は、広い面積を有するS Xが大部分を占め、その周囲にS K・S Pが分布する。調査区の南北対角線上に走る2条の溝は、その堆積土からごく最近のものと思われる。その溝付近にはS X10が認められるが、攪乱を受けている。また、東側に検出された溝は多数の遺構を切っている。遺物は、5箱分出土したが、S K、S D9、S X5・6・7・10からの出土がその殆どを占める。



第57図 中野遺跡遺構配置図(1:300)

1:50 =



- 中野遺跡基本層序
- I 第V層/3号東側遺構の埋没層 (出土)
 - IIa 2.5V/1号東側遺構の埋没層 (耕作土)
 - IIb 2.5V/2号東側遺構の埋没層 (耕作土)
 - III 第IV層/1号北側遺構の埋没層 (埋没土)
 - IV 2.5V/3号東側遺構の埋没層 (耕作土)
 - V 2.5V/4号東側遺構の埋没層 (耕作土)
 - VI 2.5V/5号東側遺構の埋没層 (埋没土)

1:40

第58図 中野遺跡基本層序

2. 遺構と遺物

土坑

SK1・4 Q-12内、SX6の南西隅に接して位置し、SX同様攪乱に切られている。長軸1.23m程の楕円形を呈するSK1が長軸2.75m程の不整形形を呈するSK4と重なって検出された。断面よりSK1と4の重複部分に長軸1.4mの長楕円形の遺構が確認され、そこから遺物がまとも出土した。深さは、東側が浅く、中央部分は0.21mと深い。また、底面はほぼ水平で、堆積土は暗灰黄色を基調とした砂である。

SK39 S-9内、SX10の東側に位置する。長軸2.02mの不整形楕円形を呈する。深さは周囲が0.05mと浅く、長軸1.20mの円形を呈する中心部分が0.37mと深く掘り込まれている。堆積土は灰色を基調としたシルトで4層下部には土器片が散点認められた。

SK56 B区の南側、R-8に位置する。長軸1.83mの楕円形を呈し、深さは0.36mで底面中心より緩やかに立ち上がる。堆積土は褐色を基調としたシルト～砂で炭化粒を含む。底からは、須恵器の坏が底部を上にして2点良好な状態で出土した。

その他のS 長軸0.53～2.81mの楕円形・不整形形を呈し、深さは0.07～0.38mである。堆積土は、黄色を帯びた灰色～褐色で、やや砂質・粘質のシルトがその殆どを占める。土器のまとも出土は認められず、その用途は判断しない。

柱穴

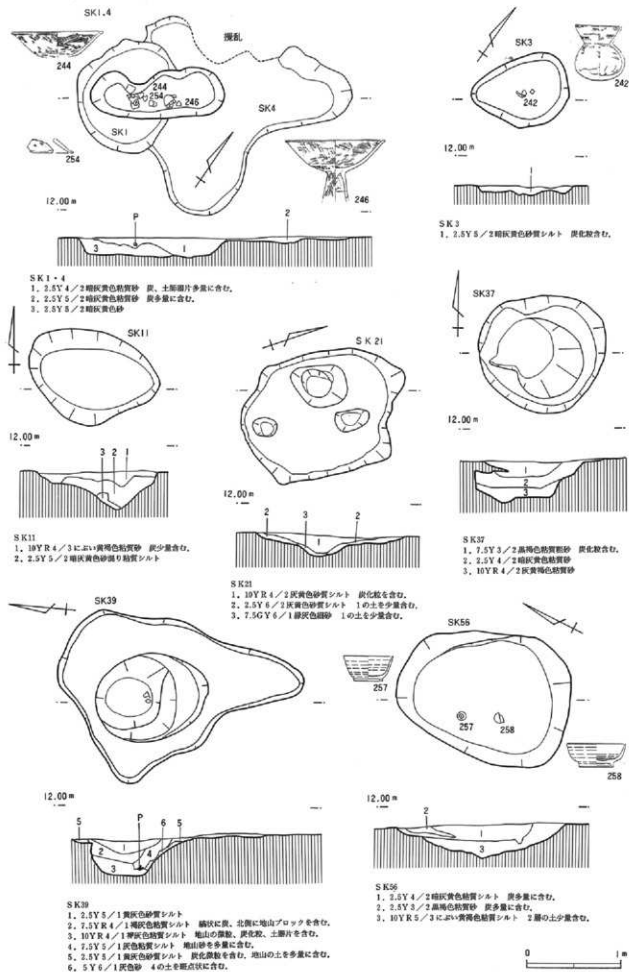
柱穴は、調査区全域に認められるが、長軸0.22～1.78m、深さ0.04～0.21mの楕円形・不整形形を呈する。これらの柱穴から、建物跡の確認することはできなかった。遺物の出土も殆ど認められない。

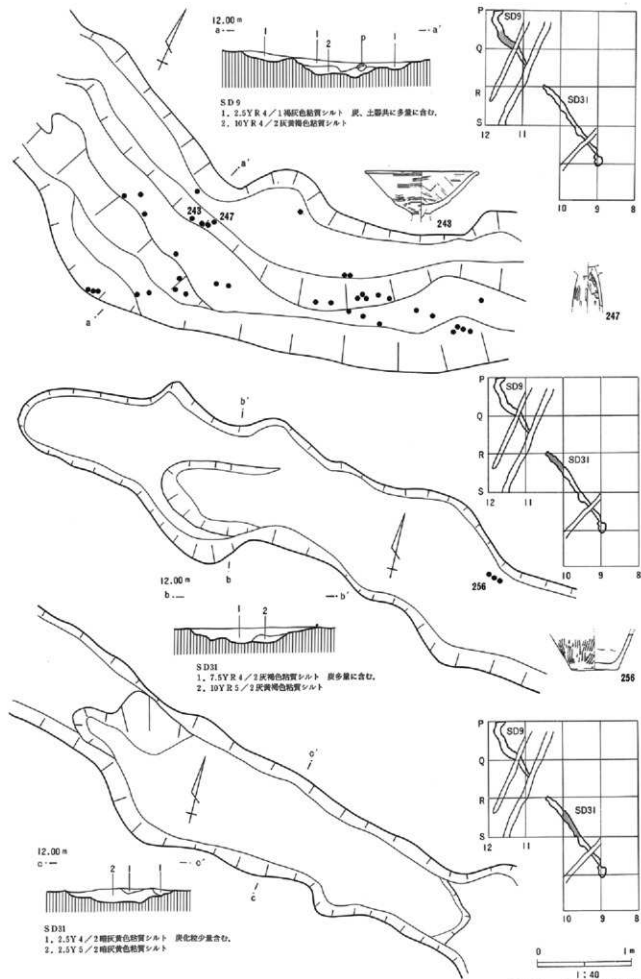
溝跡

溝跡は、調査区を南北に走る新しい溝3条に直交するように東西に走る2条の溝が検出された。SD9と31は、その方向から同一の溝であったと推定される。また、SD9は、やや蛇行し北西端は調査区外に続くものと考えられるが、SD31は、ほぼ真直に流れ南東端は攪乱されている。幅は0.32～1.65mで、深さは0.15～0.17mと比較的浅い。堆積土は、2層から成り、黄色・褐色を帯びた灰色を基調として、自然に形成された溝と考えられる。遺物は、SD9の北西部分から土器片が多数出土した。

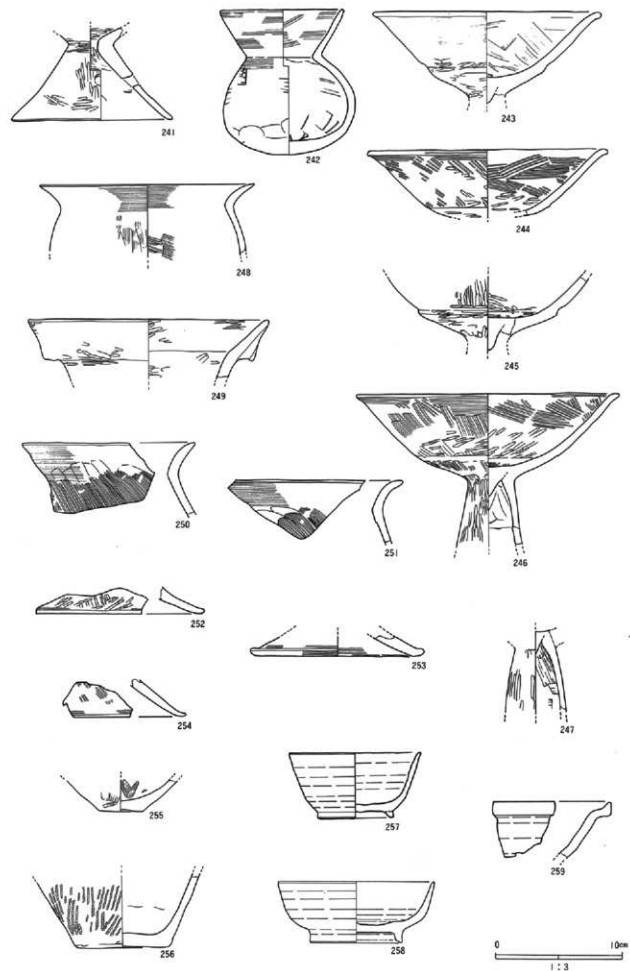
遺

物 器台241は脚部端部の屈曲がないものである。高坏は243～247・252～254である。口縁下端に屈曲して段をなすもの(243・245)、無段のもの(244・246)の二つに分けられる。252～254は脚部端部である。242は直口壺である。全体に扁平なプローションをもつ。249は複合口縁壺である。壺はいずれも丸い口縁端部をもつが、単純口縁のもの(250)と端部で屈曲し外反するもの(251)とがある。256は摺承文をもつ深鉢である。須恵器は二つとも直立気味の口縁をもつ高台付坏である。





第60図 SD9-SD31溝跡



第61図 遺構内出土遺物

SX5～7・16不明遺構・遺構外遺物

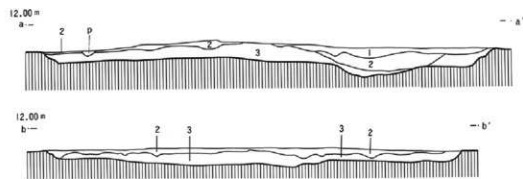
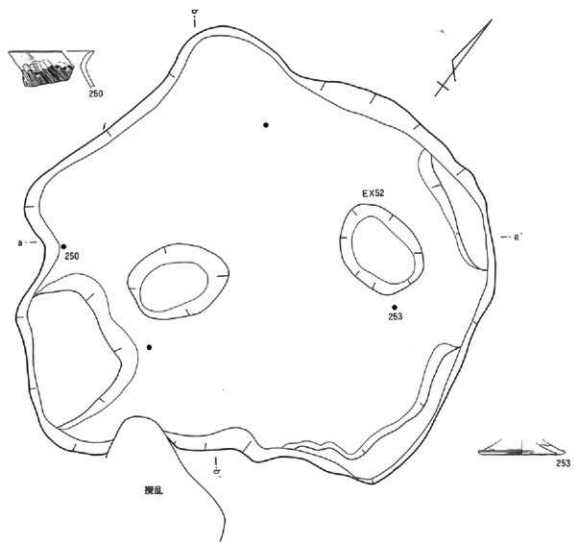
SX5 Q～R-12～11内、SX6・7に囲まれて位置する。南側が攪乱に切られているが、不整形と推測される。長軸4.76m、短軸4.39m、深さは0.08～0.2mを測る。検出時には、中心部分に炭の拡がり認められ、堆積土は、黄～褐色を基調とした粘質シルトの3層から成り、壁は緩やかに立ち上がる。遺構中程には、土坑状の掘り込みが2基認められたが、特にEK52は炭化粒を多量に含みしっかりと掘り込みが認められた。また、南東壁際には0.1m程の段差が認められた。遺物は、全てが検出面より出土したもので底面からの出土は認められない。これらの規模・形・遺物の出土状況等により住居跡の掘り方部分の可能性が考えられるが検討を要する。

SX6 Q-12内、SX5の西側に位置する。SX5同様、南側が攪乱に切られているが、不整形と推測される。長軸4.53m、短軸3.4m、深さは0.02～0.04mを測り、西辺のわずかな落ち込みを除けば底面はほぼ一定している。堆積土は、1層において、SX5・7と異なり、腐植した木片も含んでいることから、自然木の下層部分の可能性も考えられ、検討を要する。壁の立ち上がり、遺物の出土状況は、SX5と同様である。

SX7 P-12～13内、SX5の北側に位置する。SX5・6と同様南隅が攪乱に切られるが、不整形と推測される。長軸5.33m、短軸4.88m、深さは0.05～0.14mを測り、一定して掘り込まれている。堆積土は2層から成り黄色を基調としたシルトで、壁の傾斜はSX5・6に比べかなり緩い。また、底面の凹凸は見られずほぼ水平で、南北対角線上に4基の径0.2～0.4m程の落ち込みが認められたが、いずれも掘り込みが浅く、柱穴として機能していたものかは定かではない。遺物は、検出面において多数の土器が出土し、西壁中程には細片であるが集中して認められた。これらの状況から、SX5同様住居跡の可能性も考えられるが検討を要する。

SX16 Q～S-12の調査区西側に位置し、西側は壁に切られている。長軸11.55m、短軸5.67m、深さは0.1mを測り、不整形円形を呈する。検出時には、西側と南側に炭の拡がり認められたが、堆積土は黄色～灰色を基調とした砂～シルトで壁は緩やかに立ち上がる。底面は、凹凸がなくほぼ水平であるが、径0.25～0.7mを測る10基の柱穴と、径1.3mを測る1基の土坑、高さ0.1mを測る壁際の段差が認められる。柱穴の存在から、住居跡の可能性も考えられるがプランは判断としない。また遺物の出土は認められない。

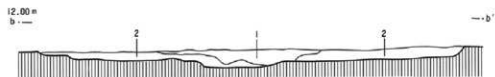
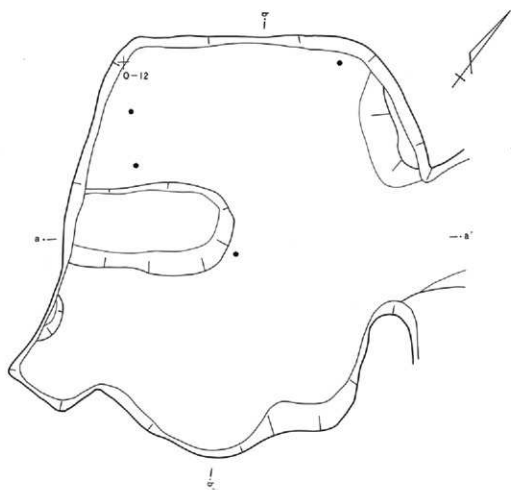
遺物 260・261は高坏の脚部である。内面に輪積みの痕跡を残す。下位になるに従い膨らむ。252は高坏の口縁部である。263～245は高坏脚部である。270は蓋の底部である。蓋は比較の厚手で口縁端部を横方向に屈曲させるもの(266)、外弯させるもの(267)、口縁部が短く内弯して立ち上がるもの(268)がある。269・271は底部である。須恵器は高台付坏(272)、坏(273)がある。



SX5
1. SY3/1オリーブ褐色粘質シルト 炭、炭化粒共に多量に含む。
2. SY5/2灰褐色粘質シルト 炭粒を含む。
3. SY5/3細粒灰色粘質シルト 炭、炭化粒を含む。SGY5/1オリーブ灰色粘質シルト30%含む。



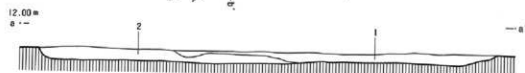
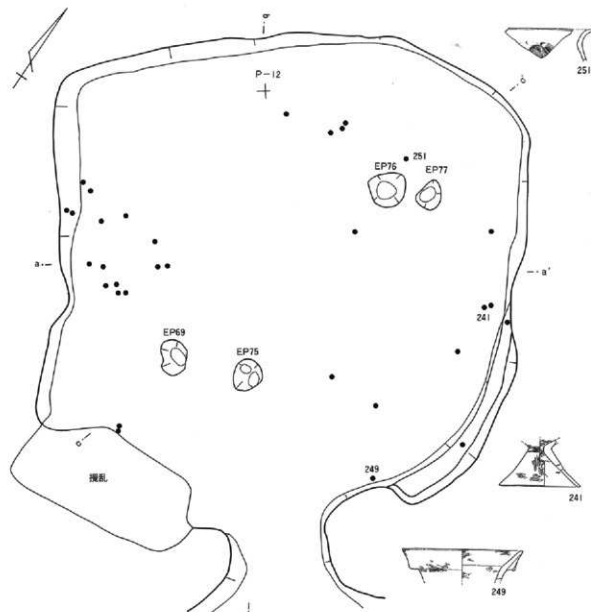
第62図 SX5不明遺構



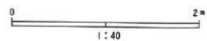
- SX6
 1. 10YR4/3 灰黄褐色粘質シルト 炭化粒、炭本含む。
 2. 2.5Y5/3 暗灰黄色粘質シルト 炭、炭化粒若干含む。
 5CY5/3 1モーター灰色粘質シルト30%割合含む。
 3. 10Y5/1 灰色粘質細砂(SX5)



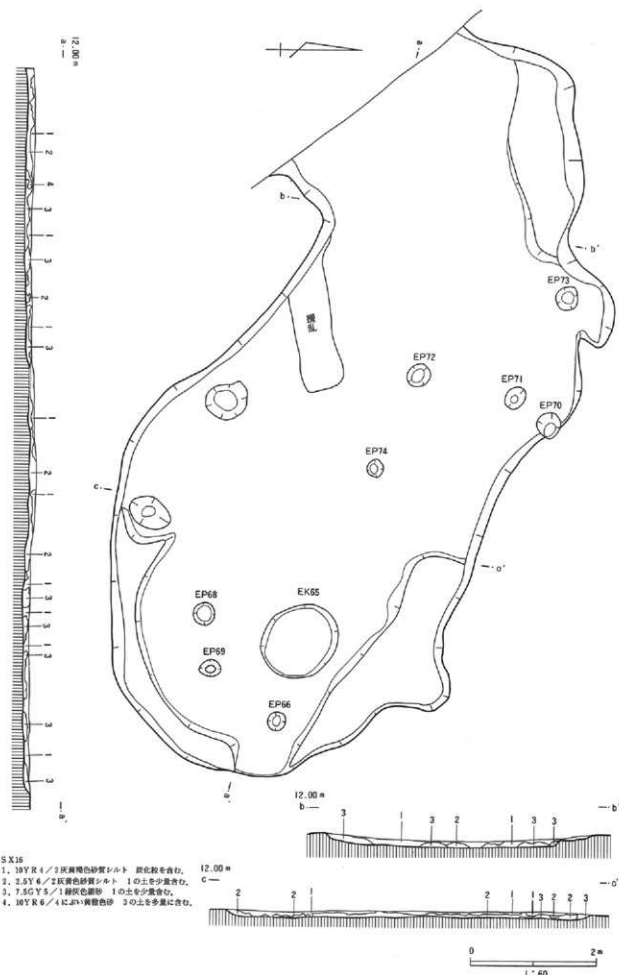
第63図 SX6不明遺構



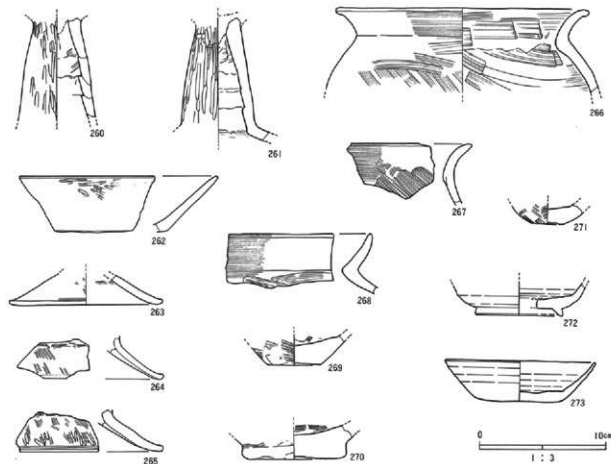
- SX7
 1. 2.5Y5/3 暗灰黄色シルト 炭化粒若干含む。
 2. 2.5Y5/3 暗褐色粘質シルト
 3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト 炭化粒若干含む。5CY5/1 1モーター灰色粘質シルト30%割合含む(SX5)



第64図 SX7不明遺構



第65図 SX16不明遺構



第66図 遺構外出土遺物

3. まとめ

拡張した調査区においては、1500m²という面積に比して溝跡・土坑・柱穴等多くの遺構が検出されたが、後世の擾乱を受けたものもかなり多く確認された。その大半の遺構の性格を明かにすることができなかったが、SX 5・6・16は住居跡の可能性が考えられる。その他のSXからも土器の出土が認められた。また、SX 5・6・7、SD 9、SK 1・4に比較的多数の土器の出土が認められることから、居住域が北西側に存在し、調査区外西側にも及ぶものと推定される。SD 31からは燃糸文のある土器が出土し、かつB区のSK 56からは須恵器が出土したため、長い時間に断続的に形成された集落であったと考えられる。

遺物量そのものは畑地よりは格段に少ないもののほぼ畑田と似通ったものが出土している。その中で高坏はやや様相が異なるようである。土坑や溝からの出土であるが、畑地よりはやや時期の下るものと考えられる。これについては漆器年で10・11群が該当するものと考えられる。SD 31から単品で出土した縄文をもつ土器(256)は原体Rの燃糸文を縦方向に転がしたものと考えられる。破片資料のため形式については検討を要する。平安時代の遺物としてSK 56より須恵器の高台付坏が出土する。比較的口径と底径の差は少なくやや古い様相をもつ。9世紀前半代と考えられる。調査区の北隣に位置する集落(現在3軒)には天正16(1588)年の十五里ヶ原の合戦の際、30数軒が焼亡したという伝承が残る。調査区内には中世村落の広がりは確認できなかった。

表-12 遺構観察表(1)

(凡例) 長さの単位はmとし、()内の数値は、他遺跡もしくは壁に切られる等して正確な数値を計測できないため、残存する部分を計測した数値である。

遺構番号	グリッド	平面形状	縦 (m)				深さ	探照番号
			北	南	東	西		
S-D3	P-Q-11	不整形	0.66	2.35	(0.62-1.15)	0.15	第59号	
S-D3	R-S-10	不整形	0.62	0.91	(0.42-1.82)	0.17	第59号	
S-K1	Q-12	不整形	0.83	(0.80)	0.85	(0.81)	0.21	第59号
S-K2	T-10-11	不整形	1.64	1.20	1.41	0.95	0.17	第59号
S-K3	S-12	掘り跡	0.90	0.74	0.83	0.60	0.10	第59号
S-K4	Q-7	不整形	(2.73)	(2.14)	(2.41)	(2.20)	(0.67)	第59号
S-X5	Q-11-12	不整形	4.76	4.39	4.33	1.10	0.88-0.20	第59号
S-X6	P-Q-12	不整形	4.33	3.49	4.34	3.15	0.65-0.94	第59号
S-X7	P-11-12	不整形	5.83	4.88	4.93	4.83	0.98-0.14	第59号
S-X8	P-12	不整形	(5.82)	1.40	(5.86)	1.27	(0.64)	第59号
S-X10	R-S-9-10	不整形	14.40	12.00	14.25	11.85	0.12	第59号
S-K11	S-10	掘り跡	1.24	1.00	1.04	0.93	0.48	第59号
S-K12	S-11	不整形	(1.20)	0.74	(0.89)	0.43	(0.25)	第59号
S-K13	S-12	掘り跡	0.53	0.27	0.77	0.15	0.20	第59号
S-K14	S-12	掘り跡	(0.87)	0.80	(0.82)	0.73	(0.67)	第59号
S-K15	S-12	不整形	1.18	0.66	0.87	0.37	0.10	第59号
S-K16	Q-12	不整形	(11.52)	5.67	(11.50)	5.55	(0.10)	第59号
S-K17	Q-12	不整形	0.83	1.19	1.08	0.75	0.09	第59号
S-K18	Q-12	掘り跡	0.95	0.83	0.43	0.27	0.08	第59号
S-K19	Q-8	不整形	0.67	0.51	0.74	0.22	0.13	第59号
S-K20	S-12	不整形	0.97	0.56	0.77	0.39	0.10	第59号
S-K21	R-12	不整形	1.32	1.33	1.31	1.19	0.22	第59号
S-K22	Q-11	不整形	0.93	0.83	0.90	0.44	0.07	第59号
S-K23	Q-12	掘り跡	1.70	0.70	0.73	0.39	0.04	第59号
S-P24	Q-12	掘り跡	0.64	0.53	0.50	0.33	0.18	第59号
S-P25	Q-12	掘り跡	0.24	0.13	0.07	0.14	0.14	第59号
S-P26	Q-12	掘り跡	0.24	0.19	0.13	0.08	0.04	第59号
S-P27	Q-12	掘り跡	0.25	0.17	0.07	0.08	0.04	第59号
S-P28	Q-12	掘り跡	0.43	0.30	0.30	0.18	0.21	第59号
S-P29	R-12	掘り跡	0.42	0.32	0.23	0.18	0.19	第59号
S-P30	Q-11	掘り跡	1.00	0.86	0.72	0.33	0.10	第59号
S-P31	Q-11	掘り跡	0.37	0.39	0.28	0.48	0.05	第59号
S-P32	Q-10	不整形	0.42	0.29	0.39	0.18	0.09	第59号
S-P33	Q-10	掘り跡	0.38	0.27	0.36	0.18	0.16	第59号
S-K37	R-10	掘り跡	1.32	1.24	1.25	1.09	0.38	第59号
S-K38	R-9-10	掘り跡	0.75	0.90	0.45	0.69	0.05	第59号
S-K39	S-9	掘り跡	2.02	1.80	1.90	1.65	0.37	第59号
S-P40	S-10	掘り跡	1.05	0.99	0.70	0.12	0.06	第59号
S-P41	S-10	掘り跡	0.52	0.30	0.45	0.15	0.08	第59号
S-K42	S-10-11	掘り跡	2.81	1.37	2.58	1.19	0.10	第59号
S-K43	S-11	掘り跡	(2.12)	(1.16)	(2.82)	(0.87)	(0.17)	第59号
S-K44	T-11	不整形	(1.86)	(0.70)	(1.92)	(0.89)	(0.13)	第59号
S-K45	T-10	掘り跡	1.56	1.19	1.37	0.81	0.07	第59号
S-K46	T-10	掘り跡	0.85	0.61	0.60	0.45	0.07	第59号
S-P47	S-10	掘り跡	0.88	0.36	0.28	0.27	0.13	第59号
S-P48	S-10	掘り跡	0.29	0.28	0.19	0.20	0.09	第59号
S-P49	S-9	掘り跡	0.70	0.58	0.41	0.35	0.12	第59号
S-K50	R-9	掘り跡	0.85	0.75	0.54	0.73	0.06	第59号
S-K51	Q-11	掘り跡	1.00	0.84	0.87	0.49	0.26	第59号
S-P53	T-9	不整形	0.84	0.20	0.80	0.13	0.05	第59号
S-P54	R-9	掘り跡	(5.84)	2.37	(5.80)	2.15	(0.67)	第59号
S-K55	R-8	掘り跡	(1.25)	(1.17)	(0.79)	(0.78)	(0.52)	第59号
S-K56	R-8	掘り跡	1.83	1.37	1.47	1.15	0.38	第59号
S-P57	R-7	掘り跡	(6.20)	(2.80)	(6.40)	(3.11)	(0.11)	第59号
S-K58	R-7	掘り跡	1.84	1.84	1.32	0.17	0.18	第59号
S-P59	R-7	掘り跡	0.32	0.24	0.14	0.10	0.12	第59号
S-P60	Q-8	不整形	(0.26)	(0.24)	(0.23)	(0.14)	(0.14)	第59号
S-P61	Q-8	掘り跡	0.20	0.22	0.10	0.08	0.07	第59号
S-P62	Q-8	掘り跡	(0.24)	(0.24)	(0.14)	(0.10)	(0.10)	第59号
S-P63	Q-12	不整形	0.83	0.40	0.25	0.22	0.12	第59号
S-P64	Q-12	不整形	0.22	0.20	0.11	0.09	0.05	第59号
S-K65	R-12	掘り跡	1.76	1.15	1.13	0.85	0.09	第59号
S-P66	R-12	掘り跡	0.36	0.33	0.25	0.20	0.13	第59号
S-P67	R-12	掘り跡	0.35	0.27	0.12	0.13	0.06	第59号
S-P68	R-12	掘り跡	0.36	0.33	0.25	0.20	0.13	第59号
S-P69	R-12	掘り跡	0.33	0.31	0.19	0.12	0.07	第59号
S-P70	R-12	掘り跡	0.40	0.36	0.25	0.15	0.05	第59号
S-P71	R-12	掘り跡	0.37	0.33	0.12	0.12	0.05	第59号
S-P72	R-12	掘り跡	0.37	0.35	0.23	0.17	0.07	第59号
S-P73	Q-12	掘り跡	0.40	0.36	0.20	0.19	0.08	第59号
S-P74	Q-12	掘り跡	0.35	0.25	0.14	0.10	0.08	第59号
S-P75	P-12	掘り跡	0.33	0.30	0.14	0.10	0.11	第59号
S-P76	P-11	掘り跡	0.40	0.30	0.21	0.17	0.12	第59号
S-P77	P-11	掘り跡	0.31	0.25	0.15	0.13	0.03	第59号
S-P78	S-10	掘り跡	0.53	0.47	0.27	0.25	0.09	第59号
S-P79	S-10	掘り跡	1.33	0.79	0.84	0.37	0.20	第59号
S-P80	S-9	掘り跡	0.87	0.82	0.37	0.30	0.19	第59号
S-P81	S-9	掘り跡	1.77	0.92	1.43	0.69	0.10	第59号
S-P82	Q-8	掘り跡	0.48	0.47	0.35	0.32	0.06	第59号

表-13 遺物観察表

凡例

- 1 法量はmm単位で示した。口径については図上復元した推定値も含む。()内は遺物の残存状況を示すため、残存する最大値を示している。残存しない部位、及び底部が丸底で計測値が出せない場合は - で表した。
- 2 胎土層の粗は粗砂混入、細は細砂混入、織は緻密の織である。
- 3 調整は主なものに記し、調整順序の解るものについて → で示した。
- 4 備考欄にはその他の観察事項を記した。

遺物番号	RP番号	出土地点	種類	器種	法	量	胎土	調整		備考	図録番号
								外面	内面		
241	1056	SX7	土師器	甕台	口径	底径	高				
					(127)	(73)	粗	ミダキ	ミダキナデ	外周彩 磨部 穿孔	242
242	1002	SK3	土師器	甕	98	-	115	細	ケズリナデハクメ	ハクメナデ	直口
243	1015	SD9	土師器	高坏	180	-	(72)	粗	ミダキ・ヨコナデ	ヘナナデ	244
244	1032	SK1	土師器	高坏	190	-	(52)	粗	ミダキナデハクメ	ハクメ・ミダキ	246
245	1004	SX45	土師器	高坏	-	-	(55)	粗	ミダキ	ハクメ・ミダキ	243
246	1032	SK1	土師器	高坏	208	-	(118)	細	ミダキナデハクメ	ミダキハクメナデ	251
247	1016	SD9	土師器	高坏	-	-	(62)	粗	ミダキ	ヘナナデ	260-3
248	1007	SX10	土師器	甕	170	-	(52)	粗	ナデハクメ	ナデハクメ	252
249	1051	SX7	Q-11	土師器	甕	190	-	(43)	粗	ミダキ	255
250	1039	SX5	土師器	甕	-	-	(55)	粗	ハクメナデ	ハクメ	外周磨付帯 破片資料
251	1045	SX7	土師器	甕	-	-	(47)	粗	ハクメナデ	ハクメナデ	同上 No250と同一体
252	1004	SX45	土師器	高坏	-	-	(20)	粗	ナデ・ミダキ	ハクメナデ	破片資料
253	1039	SX5	土師器	高坏	-	-	(138)	細	ナデハクメ	ナデ	248-8
254	1032	SK1	土師器	高坏	-	-	(27)	細	ナデハクメ	ハクメ	破片資料
255	1007	SX10	土師器	甕	-	-	35	(24)	粗	ハクメ	ハクメ
256	1066	SD21	陶生土	鉢	-	-	75	(55)	細	黒文	253
257	1028	SK56	須恵器	高坏	104	60	52	粗	ロクロ	ロクロ	底部ヘラ切
258	1027	SK56	須恵器	高坏	124	(74)	(48)	粗	ロクロ	ロクロ	底部ヘラ切
259		SK56	赤漆土	塊	-	-	(43)	粗	ロクロ	ロクロ	破片資料
260		Q-11	土師器	高坏	-	-	(78)	細	ミダキ	ヘナナデ	朱彩
261	1003	R-12	土師器	高坏	-	-	(95)	粗	ミダキ	ヘナナデハクメ	247
262		6トレンチ	土師器	高坏	-	-	(44)	細	ナデ・ミダキ	ミダキ	破片資料
263		S-11	土師器	高坏	-	-	(122)	(23)	細	ハクメナデ	ハクメ
264		SK1	土師器	高坏	-	-	(32)	細	ハクメ・ミダキ	ハクメ	破片資料
265		R-12	土師器	高坏	-	-	(33)	細	ハクメ・ミダキ	ヘナナデ	破片資料
266		Q-11	土師器	甕	200	-	(56)	細	ハクメナデ	ヘナナデ	254
267		P-11	土師器	甕	-	-	(45)	細	ハクメナデ	ハクメナデ	破片資料
268		S-10	土師器	甕	-	-	(47)	粗	ナデハクメ	ナデハクメ	破片資料
269		P-11	土師器	甕	-	-	40	(23)	粗	ケズリハクメ	ハクメ
270		新溝	土師器	甕	-	-	82	(26)	粗	ナデ	ハクメ
271		P-12	土師器	甕	-	-	21	(15)	粗	ハクメ	ナデ
272		2トレンチ	須恵器	高坏	-	-	70	(23)	粗	ロクロ	ロクロ
273	1000	Q-7	須恵器	坏	120	(64)	32	粗	ロクロ	ロクロ	底部ヘラ切

第VI章 畑田遺跡・中野遺跡まとめ

1 畑田遺跡検出の周溝をもつ住居について

ここでは各地で急速に注目されている「周溝をもつ住居」について簡単に整理してまとめたい。北陸では「周溝をもつ建物」と呼称されている。近年急速に検出例を増やしており、現在では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居の一般的な形態の一つとして認識されている^(28,32,239)。構造は溝のない土坑状遺構を環状あるいは台形に配置し、中心には柱穴や貯蔵穴と考えられる土坑が存在する。性格は周溝基とする理解⁽¹⁷⁾、玉作り工房との関連と理解する説⁽¹⁸⁾があるが、周溝を掘り上げた土を周堤とする平地式住居の可能性が高い⁽¹⁸⁾。底湿地帯に多く分布する。また堅穴住居と併存する例は現在のところ確認されておらず、堅穴住居に先行、あるいは併存しない建物形式であるらしい⁽²⁰⁰⁾。本遺跡で検出された住居の屋内施設には切り合い関係の可能性も含めて不明な点が多い。周溝は排水の機能をもつ⁽¹⁶⁾と考えたいが、S D100・249・202のいずれとも接続するS D101大溝はQ-9付近が最も深く、南北端は浅いことから流れていたとは考えにくいのでやや疑問が残る。唯一開口部を検出できたS D249についてもその方向は北に向いており従来の説とは符合しない。今後さらなる検討を要する。

2 畑田遺跡・中野遺跡出土の土師器について

不十分ではあるが分類・集成を行った。その基準は次のとおりである。器台にはI類とII類がある。I類は装飾器台である。aとbに細分した。b類は受部の下端に稜をもつタイプで、c類は受部中位に稜をもち、円窓の数は不明である。II類はバリエーションが豊富で、口縁部の形態を基準として4大別した。aは上方につきまみ上げるものである。2種に細分できる。bは口縁部の下端ないし中位に稜をもつタイプである。cは口縁端部が丸いものである。dは脚部中位が内湾する。

高杯はI~X類まで分類した。I類は中実、II類は中空である。III類は下端に稜をもつ。IV類は中位でくびれ、端部で短く外反する。下端が狭小である。V類は端部が若干外反する。下端は広い。VI~X類は個性的なものである。VI類は脚部が内湾し裾部が大きく開いて外反する。VII類は口縁端部がやや直立する。脚部は扁平で小さくなる。X類は円窓が6孔認められる。II類は大体型のもの。円窓は3孔である。

鉢はI~VII類まで分類される。I~IV類は小型のもので、I・II類は口径が体部径より小さい。どちらも口縁部は直立するが、平底と丸底に区別される。III類は碗型に近いタイプである。II類のみミガキが見られるが他はハケム調整である。V類は基本的に口縁部は外反し、底部が丸底のものである。VI類は平底ないし窪み底のものである。VII類は台付きである。ミガキ調整が確認できる。有孔鉢には全体が明確なのはI類のみである。II類は浅いタイプで外面にミガキ調整が確認できる。III類は平底状の底部をもつ。

甗には2類ある。I類はいびつなもので、口縁部が短くあまり開かない。II類は口縁部が開き、長いものである。

直口甗はI~III類である。I類は口縁部が直立するもの。II類は口縁部が短く外反するもの。III類は口縁部が大きく外反するものである。

甗は複合口縁のものをI類、口縁中位に稜をもつものをII類、口縁端部をつまみ出し、面取りをしているものをIII類、口縁部が外反し体部の下位に最大径が位置するものをIV類とした。I類には棒状浮文と円形浮文がセットになるもの等バリエーションが認められる。

甗は大別してI~IV類に分類できる。I類は単純口縁で端部を丸くおさめるものである。I類は更にa~1に細分できる。aは口縁部が短く小型で外面と内面の口縁部にミガキを施す。gは口縁部の屈曲が弱い。底部はやや窪み、調整は内外面ともミガキのもの(g-1)、ハケム調整のもの(g-2)が見られる。hは口縁部が長く外傾する。iは口縁端部が内面に肥厚する。頸部はしまる。胎土も緻密で極めて丁寧なつくりである。布留系の甗と考えられる。jはやや肩の張るプロポーションである。この類にヘラ描きの土器も含まれる。II類は口縁部がやや外傾しつつ外面中位に弱い稜をもつタイプで、体部は膨らむ。量は極めて少ない。III類は口縁部が外傾し端部で短く屈曲する。尖り底である。IV類は過半以上を占める割合で出土している。このタイプは口縁端部を面取りし底部は極めて狭い平底ないし窪み底をもつ。ほとんど安定性がない。細別してa~cの3種が認められるが、個体差の要因もかなり含まれているものと考えられる。

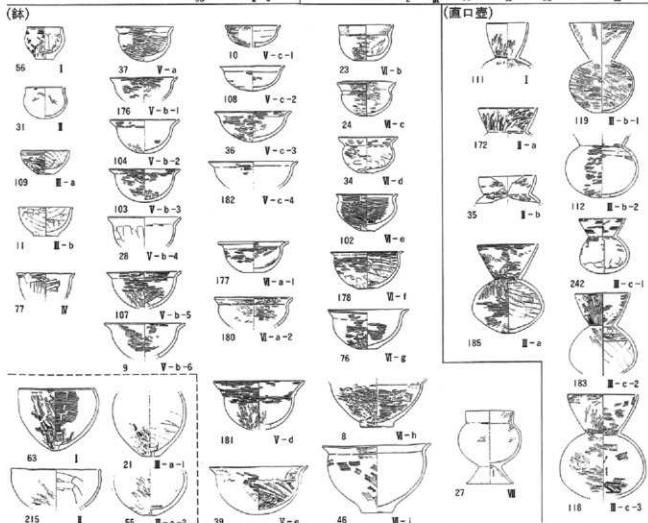
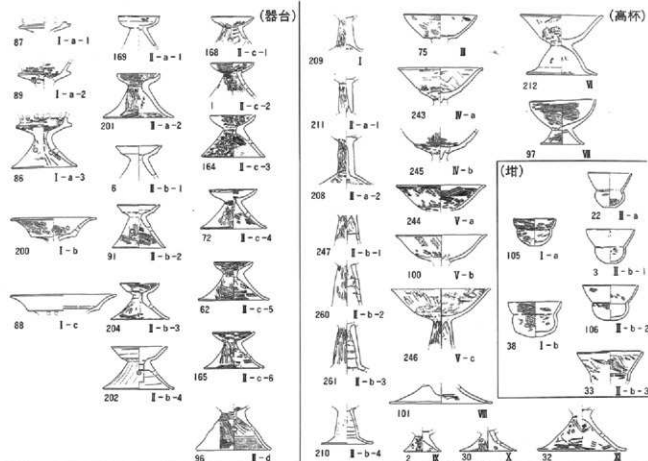
最後に不十分ではあるがこれらの遺物群の時間的な検討を行いたい。遺物群自体はほぼ北陸北東部域の土器群と大きな差ない状況である。坂井・川村編年ではII-2期からIV期、新近シボジウム編年では6期から9期に該当するものと思われる⁽²⁰⁾。なお一括性の高いS T232内出土遺物はほぼ胎土・調整工具等が同一のものと思われ、6~7期の様相をもつものと考えられる。S K111は甗の体部の最大径が中位以下にみられるものも存在するが口縁端部の処理に注目すれば6~8期に該当すると考えられる。

なお辻秀人氏、石川県埋蔵文化財センターの皆様をはじめとする方々には貴重なご指導・ご鞭撻を賜りながら、力不足で報告書に反映できなかった点をなお詫言申し上げます。

(参考文献)

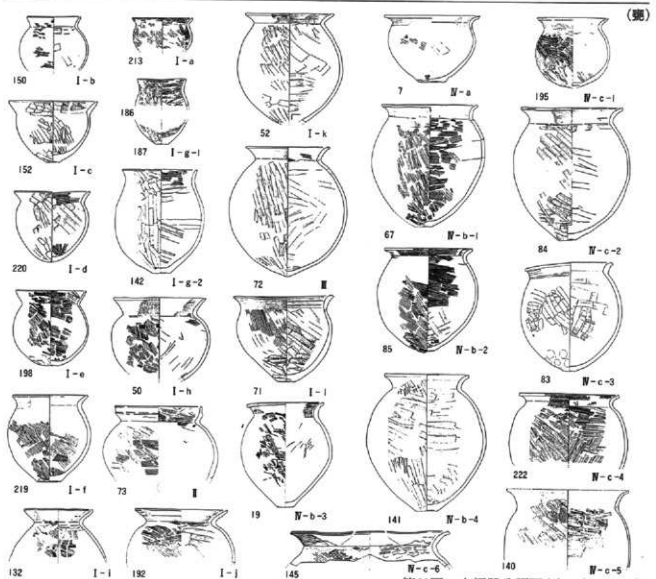
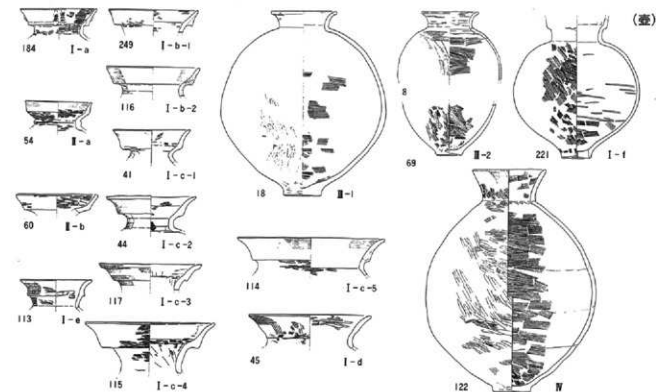
- (1) 阿部正己 1921 「古墳時代に於ける庄内の文化」(『考古雑誌』第11巻5号)
- (2) 川崎利夫 1972 「庄内平野の土師式土器」(『庄内考古学』第11号 庄内考古学研究会)
- (3) 米地文夫 1978 「地形分類」(『土地分類基本調査 機関』)
- (4) 川崎利夫 1980 「古墳時代の庄内地方」(『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会)
- (5) 佐藤正一 1983 「関B遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 山形県教育委員会
- (6) 阿部明彦 1985 「穴籠A遺跡・穴籠B遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第127集 山形県教育委員会
- (7) 西井英一 1986 「東田川野原島三和出土の古土器」(『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会)
- (8) 安部 実 1987 「生石2遺跡発掘調査報告書(3)」山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 山形県教育委員会
- (9) 阿部明彦 1989 「助作遺跡-山田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第143集 山形県教育委員会
- (10) 阿部明彦 1990 「畑田遺跡」(『分布調査報告書』)山形県埋蔵文化財調査報告書第148集 山形県教育委員会
- (11) 黒坂英人 1990 「助作遺跡第1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第162集 山形県教育委員会
- (12) 佐々木洋治1991 「(4)畑田遺跡」(『分布調査報告書』)山形県埋蔵文化財調査報告書第163集 山形県教育委員会
- (13) 阿部明彦 1992 「庄内地方の古墳時代」(『加藤俊徳記念論文集』)
- (14) 佐藤正一 1994 「五石河遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 山形県埋蔵文化財センター

- 05 阿子島功 1994 「山形県沿岸平野と内陸盆地の遺跡分布と微地形—250m格子データベースから」(『日本地理学会学術集』No.45 日本地理学会)
- 06 佐野浩士 1979 「北陸自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡」新潟県教育委員会
- 07 櫻田 誠 1987 「第一小学校々地内埋蔵文化財発掘調査報告書」石川県小松市教育委員会
- 08 橋 政隆 1989 「金沢市西北・南新保遺跡Ⅱ」金沢市教育委員会
- 09 森田克行 1990 「住まいと生産活動」(『季刊考古学』第32号)
- 10 田嶋明人 1991 「北陸の孤立柱建物」(『弥生時代の孤立柱建物』埋蔵文化財研究会)
- 11 南 久和 1991 「金沢市新保本町東遺跡」金沢市教育委員会
- 12 久田正弘 1991 「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」(『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報3』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会)
- 13 浜崎悟司 1993 「加賀の東部構造の推移」(『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会)
- 14 坂井秀弥 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相」(『越後地方における古墳文化形成過程の研究』日本考古学協会新潟大会実行委員会)
- 15 川村浩司 1993 「I北陸北東部の古墳出現前後の様相」(『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会)
- 16 辻 秀人 1993 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その1 会津盆地—」(『東北大学大学院論叢』歴史学・地理学第36号)



※各遺物実測図下の番号は左が遺物番号、右が分類番号である。

第67図 土器分類図(Ⅰ) (S=1:8)



第68図 土師器分類図(2) (S=1:8)

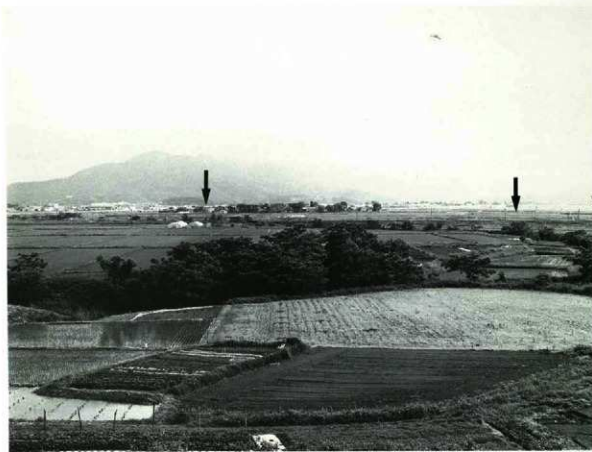
報告書抄録

ふりがな	はたけだいせき・なかのいせきはくつちょうさほうこくしょ				
書名	畑田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書				
副書名					
巻次					
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書				
シリーズ番号	第22集				
編著者名	眞壁 建 丸山晶子 黒坂広美				
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター				
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301				
発行月日	西暦 1995年3月31日				

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畑田	山形県鶴岡市 大字大淀川 畑田	06203	昭和63 年度登録	38度 44分 14秒	139度 47分 35秒	19930512~ 19931119	11,060	東北横断自動車道(朝日~酒田間)建設工事
中野	山形県鶴岡市 大字大淀川 中野	06203	昭和63 年度登録	38度 44分 25秒	139度 47分 25秒	19930517~ 19930922	3,544	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑田	集落跡	古墳前期	周溝を伴う住居 3軒 竪穴住居 3軒 土坑 37基 柱穴 33基 溝 15条 性格不明遺構 15基 河川跡	土師器 甕、壺、埴、鉢 器台、高坏 須恵器 甕 土製品 土罐 石器 凹石 石製品 砥石	周溝を伴う住居を中心に大溝や河川跡から北陸系の土師器が出土する。
中野	集落跡	古墳前期~中期	土坑 26基 柱穴 25基 溝跡 2条 性格不明遺構 8基	土師器 甕、壺、器台 高坏 弥生土器 深鉢	
		平安	土坑 1基	須恵器 高台付坏、坏 赤焼土器 土塼	

版 函



遺跡遠景（北から） 左：須田遺跡 右：中野遺跡



中野遺跡発掘前状況（南から）



重機稼働状況 (西から)



搬入れ式風景 (南から)



表土除去風景 (北から)



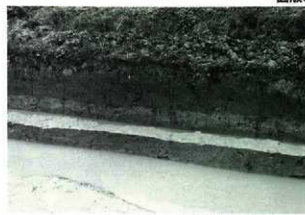
作業風景 (東から)



現地説明会風景 (南から)



調査区南側北壁基本層序 (北から)



基本層序d (東から)



調査区北西側検出状況 (南から)



調査区北西側検出状況 (西から)



ST102付近検出状況 (南から)



調査区北東側検出状況 (南から)



軌状遺構検出状況 (西から)



SD202検出状況 (南から)

図版4



SD202検出状況 (東から)



河川跡検出状況 (東から)



SD100検出状況 (西から)



ST103検出状況 (東から)



調査区南側検出状況 (北から)



ST150検出状況 (西から)



ST181検出状況 (南から)



SD101検出状況 (東から)

図版5



ST103検出状況 (東から)



SD100西側土層断面 (東から)



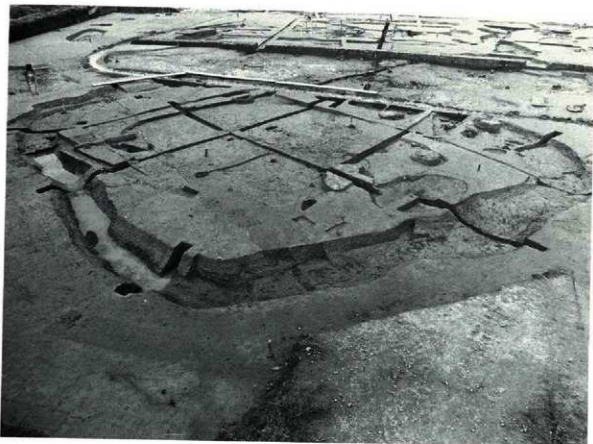
EK102土層断面 (南から)



RP120出土状況 (南から)



SD100土器出土状況 (西から)



ST201、SD202発掘状況（東から）



ST201発掘状況（東から）



東西ベルト土層断面（東から）



SD202ベルト土層断面（東から）



RP259出土状況（南から）



ST150発掘状況（南から）



ST150南北土層断面（西から）



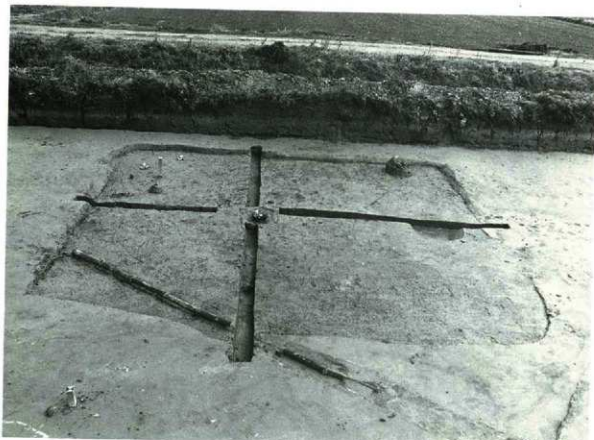
ST150東側土層断面（北から）



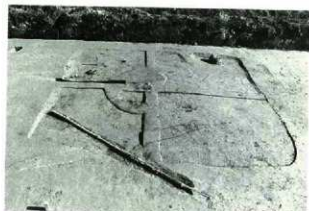
RP161出土状況（南から）



RP224・225出土状況（南から）



ST181完掘状況 (西から)



ST181検出状況 (西から)



ST181東側土層断面 (北から)



RP324出土状況 (東から)



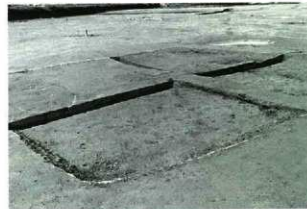
ST181北側土層断面 (東から)



ST182土器出土状況 (南から)



ST182完掘状況 (北から)



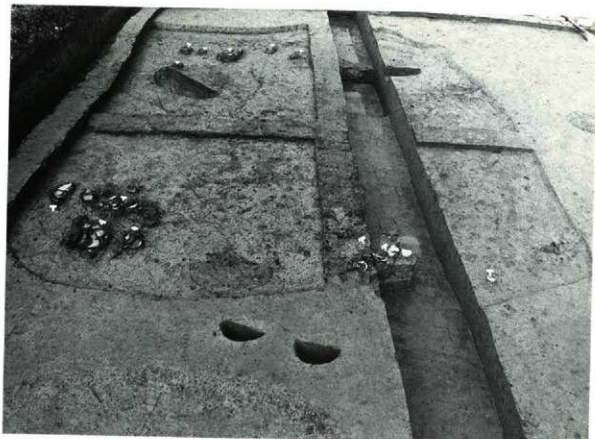
ST182北側土層断面 (東から)



RP226出土状況 (南から)



ST182精査状況 (東から)



ST232検出状況 (南から)



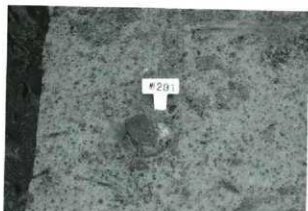
ST232土層断面 (東から)



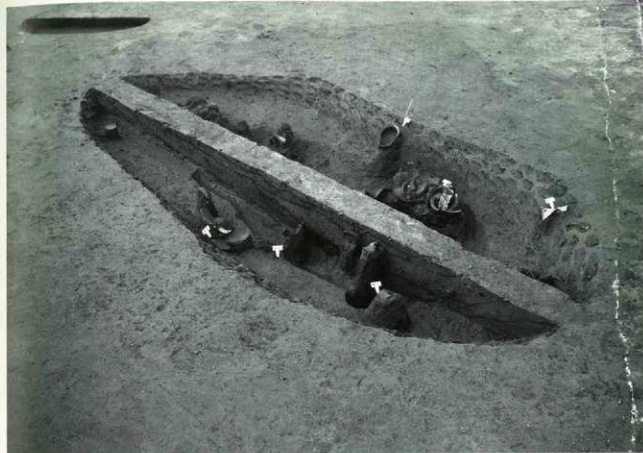
EK263土層断面 (南から)



ST232土器出土状況 (南から)



RQ281出土状況 (南から)



SK111検出状況 (南から)



SK111完掘状況 (北から)



RP192出土状況 (東から)



RP193出土状況 (西から)



RP194出土状況 (西から)

図版12



SK125土層断面 (南から)



SK132土層断面 (西から)



SK133土層断面 (南から)



SK145土層断面 (南から)



SK165土層断面 (北から)



SK175土層断面 (南から)



SK178土層断面 (南から)



SK200土層断面 (南から)

図版13



SK129土層断面 (西から)



SK129完掘状況 (西から)



SK174土層断面 (南から)



SK174完掘状況 (南から)



SK176土層断面 (東から)



SK176完掘状況 (南から)



SK203完掘状況 (西から)

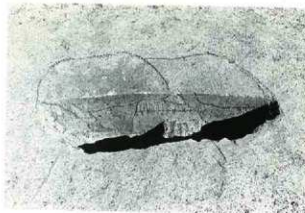


SK233完掘状況 (西から)

図版14



SP122土層断面 (西から)



SP139土層断面 (西から)



SP143土層断面 (西から)



SP168土層断面 (南から)



SP209土層断面 (西から)



SP207完掘状況 (西から)



SP247土層断面 (東から)



SP247完掘状況 (東から)

図版15



SD101、Q-9土器出土状況 (南から)



SD101、Q-9東側土器出土状況 (南から)



SD101、Q-9下層土器出土状況 (南から)



SD101、Q-10~11土器出土状況 (南から)



SD101、Q-10土器出土状況 (南から)

図版16



RP126出土状況 (南から)



RP117出土状況 (南から)



RP125、119出土状況 (南から)



RP118出土状況 (南から)



RP142出土状況 (南から)



RP156出土状況 (南から)



RP178、173出土状況 (南から)



RQ305出土状況 (南から)

図版17



畝状遺構完掘状況 (西から)



SD152-153完掘状況 (東から)



SD157-158完掘状況 (東から)



SD128完掘状況 (西から)



SD183完掘状況 (南から)



SX156土層断面 (南から)



EP242土層断面 (東から)



SX107完掘状況 (西から)



SX130-131完掘状況 (西から)



SX156完掘状況 (南から)



EP243土層断面 (南から)



SX110土層断面 (北から)



SX234土層断面 (西から)



河川跡土器出土状況 (南から)



河川跡Aトレンチ土層断面 (西から)



河川跡Bトレンチ土層断面 (南から)



RP318出土状況 (南から)



RP321出土状況 (南から)



A区検出状況全景 (北から)



B区検出状況全景 (北から)



B区南東部検出状況 (南から)



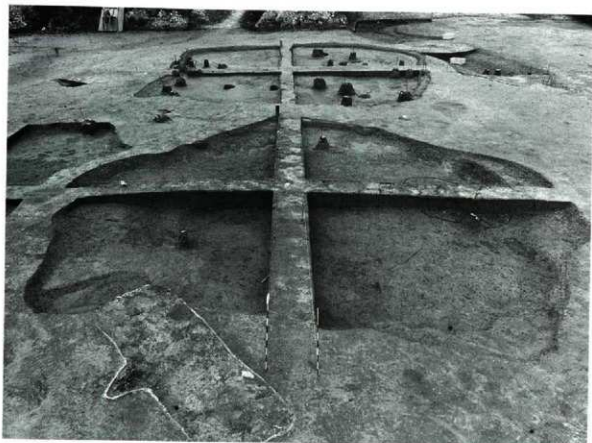
B区南西部検出状況 (南から)



B区北東部検出状況 (北から)



B区北西部検出状況 (北から)



SX5完掘状況 (南から)



SX5東側土層断面 (北から)



SX5土層断面 (南から)



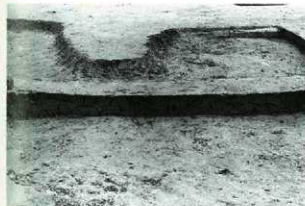
SX7土器出土状況 (南から)



SX8土層断面 (西から)



SX5+6+7完掘状況 (北から)



SX5+6土層断面 (北から)



SX5+7土層断面 (西から)



SX7土器出土状況 (南から)



SX7土器出土状況 (東から)



EK79土層断面 (東から)



SX10東側完掘状況 (北から)



SX10西側完掘状況 (北から)



SX10東側土層断面 (西から)



EK37土層断面 (西から)



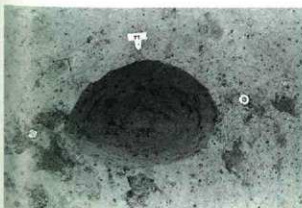
SX18完掘状況 (西から)



SX16完掘状況 (西から)



EK85完掘状況 (南から)



EP71完掘状況 (西から)



EP73完掘状況 (西から)

図版26



SK1-4土層断面 (南から)



SK1遺物出土状況 (南から)



SK39土層断面 (西から)



SK39完掘状況 (西から)



SK21完掘状況 (西から)



SK56土層断面 (東から)



RP1027出土状況 (東から)



RP1028出土状況 (東から)

図版27



SD9完掘状況 (西から)



SD31完掘状況 (西から)



SD31土層断面 (西から)

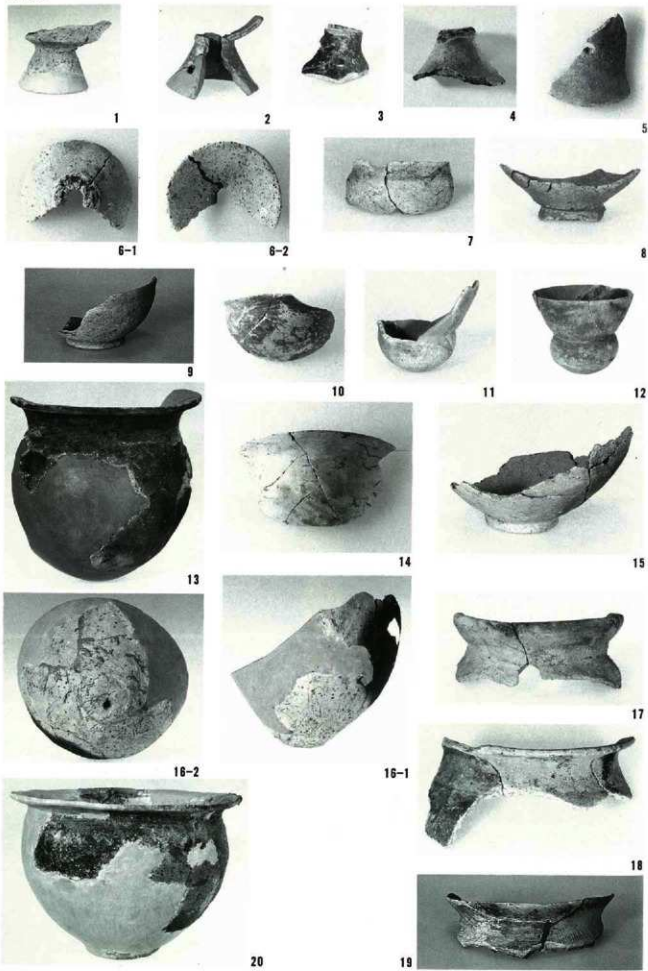


SD9土器出土状況 (西から)

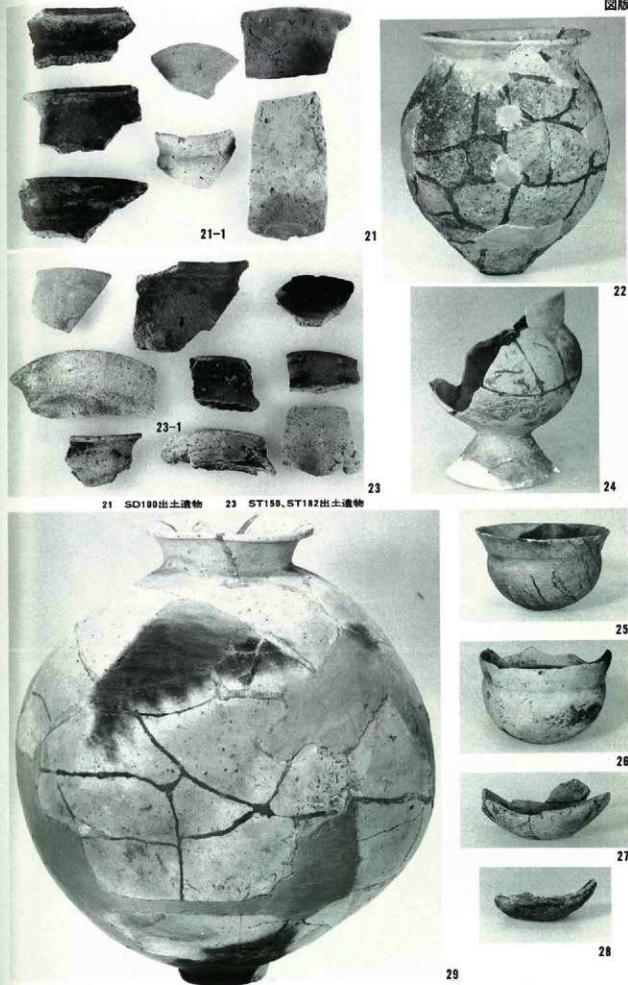


RP1066出土状況 (西から)

図版28



図版29





30-1

30-2

31



32 SD100出土鉄石英



33



34-1



34-2



35-1



35-2



36



37



38



39



40



41



42



43



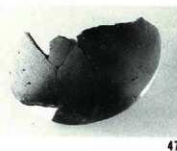
44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



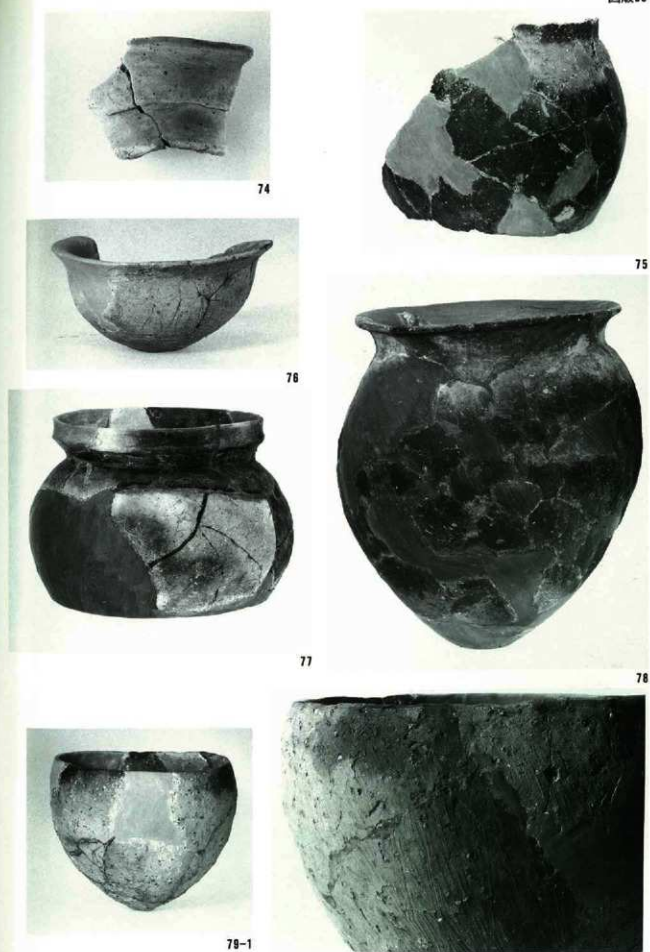
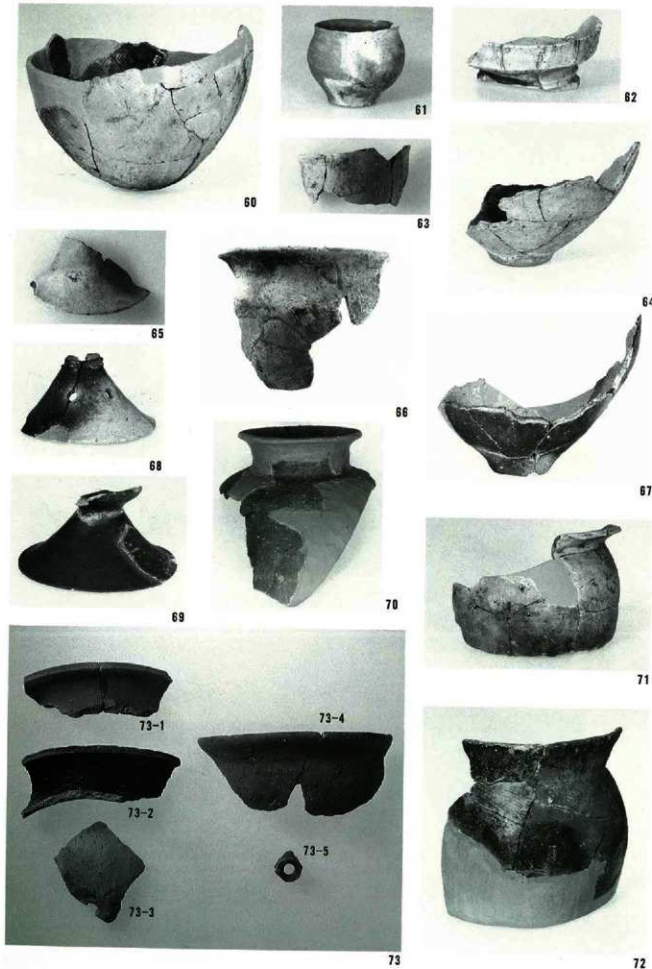
57



58



59



79-2 調整部分拡大



80



81 SK1111出土鉄石英



82



84



85



86



87-1



87-2 調整部分拡大



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97-1



97-2



98



99



102



105



108



111-1



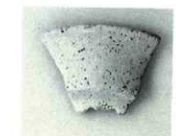
111-2



100



103



106



109



112-1



112-2



112-3



101



104



107



110



113



114-1



114-2



115



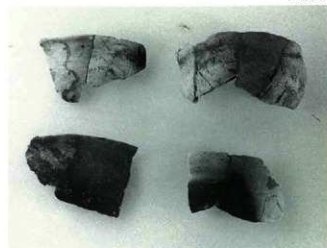
116



117



124



118 SD181土師器鉢口縁部



119



120



121



122



123



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



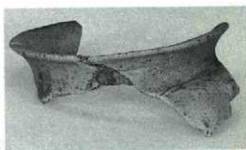
135



136



137



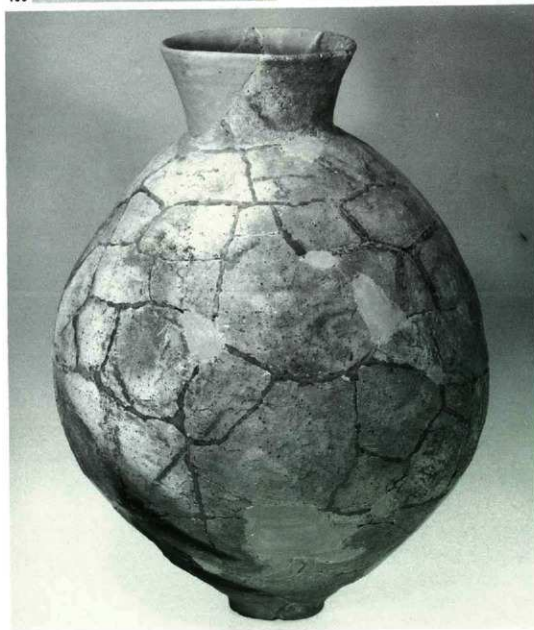
138



139-1



139-2



140

図版40



141



142



143



148



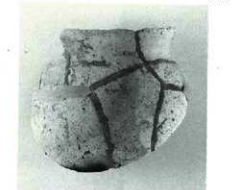
144



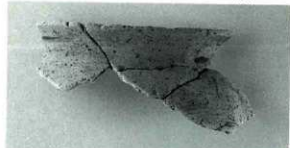
145



146



147



149



150

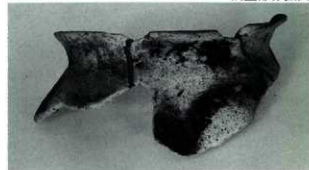
図版41



151-1



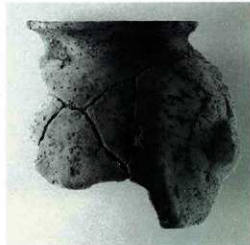
151-2
調整部分拡大



152



153



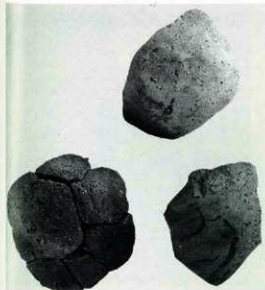
156



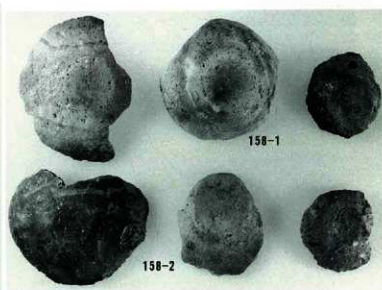
154



155



157 SD101出土壺底部



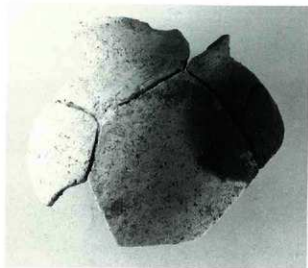
158-1

158-2

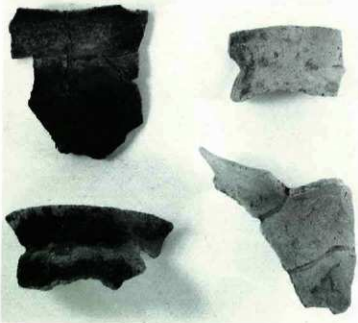
158 SD101出土壺底部



159



160



163 SD101壺口縁部



161 SD101出土鉄石英



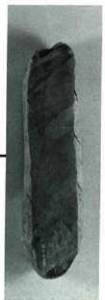
162-1



162-2



164-1



164-2



165



166



168



171



174-1



174-2



178



167 SD101出土石器



169



170



172



173



175



177



178



179 河原跡出土鉄石英



180-1



180-2 調整部分拡大



181-1



181-2 調整部分拡大



182-1



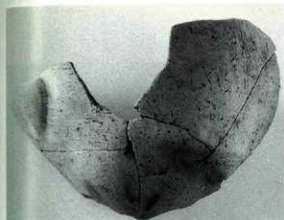
182-2 調整部分拡大



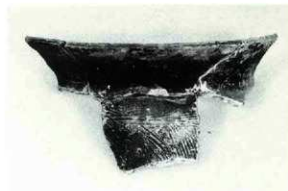
183



184



185



186



187



188



189



190



191 SG出土壺口縁部



192-1



192-2 調整部分拡大



193-1



193-2 調整部分拡大



193-3



193-4 調整部分拡大



194



195



196



197



198



199



200



201



202



203



204



206-1



206-2



調整部分拡大

206-3



206-4



207



208



209



210



211



212



213



214



215



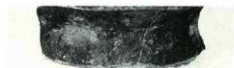
216



217



218



219



220



221



222



223



224



225



226



227



228



229



232



230-1

230 珠洲系陶器



231-1

231 須恵器



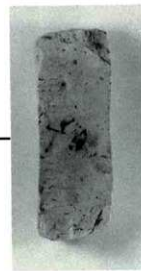
234

河川跡出土鉄石英

233 グリッド・鞍部出土鉄石英



235-1



235-2



236-1



236-2



236-3



236-4



236-5

236



237-1



237-2



237-3

237



238



239



240



241



242



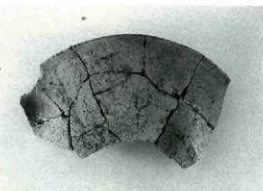
243



244



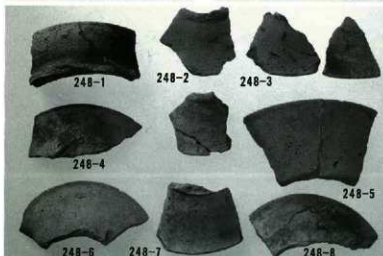
245



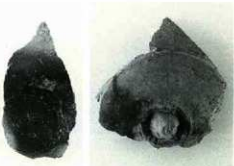
246



247



248



250



251



249



252



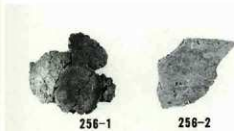
253



254



255



256-1

256-2

256



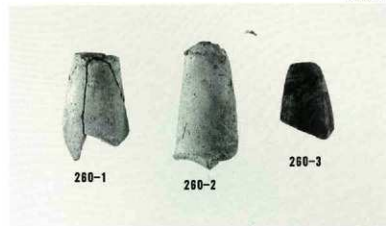
257



258



259 種子

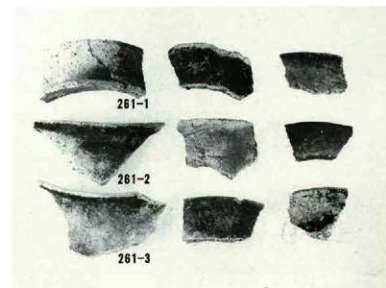


260-1

260-2

260-3

260 高坏脚部



261-1

261-2

261-3

261 中野遺跡出土土器底部



262 中野遺跡出土鉄石英

付 編

I 畑田遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社 バレオ・ラボ

山形県鶴岡市の畑田遺跡の住居跡(S T182, S T103)より出土した炭化材2点について放射性炭素年代測定が行なわれた。年代測定は学習院大学年代測定室の木越邦彦先生にお願いした。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してある。

各試料の測定結果を以下の表に示す。

なお、試料No 1, 2ともに古墳時代の遺構より出土し、古墳時代前期の年代が推定されていたが、測定結果はともに弥生時代を示す年代値が得られている。このことは、可能性の1つとして、試料中に堆積物などともなう古い時代の炭素が混入していることが考えられる。

表. 畑田遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料	GaK-Code No	年代(1950年よりの年数)
炭化材 No 1 (ST182住居跡)	GaK-17645	2,170 \pm 180 220 B.C.
炭化材 No 2 (ST103住居跡)	GaK-17646	1,930 \pm 80 A.D. 20

II 畑田・中野遺跡における堆積物について

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

畑田・中野遺跡は庄内平野の西南部、山形県鶴岡市大淀川地区に位置している。周辺には大山川、およびその支流の湯尻川、千安川が流れており、遺跡の立地する沖積平野はこれらの河川的作用によって形成された自然堤防や後背湿地からなると考えられている(角田, 1976, 山形県・山形県教育委員会, 1988など)。遺跡の調査区内にはシルト、砂を主体とする堆積物が分布しており、古墳時代の遺物包含層を覆う灰色から灰オリーブ色を呈する、シルトから粘土質の堆積物が全体に広く分布している。ここでは、この堆積物を「灰色粘土層」とよび、その特徴を明らかにするため、粒度分析を行なう。

2. 試料

畑田・中野遺跡の調査区内において、灰色粘土層の堆積物を中心に試料採取した。

(1) 畑田遺跡A区北西基本層序C地点

HD 1-1: 灰色粘土層で、層厚約25cmである。径2~3mmの管状の褐鉄鉱の団塊(高師小僧)が含まれる。下部はやや砂質である。

HD 1-2: 灰色粘土層の下位で、古墳時代遺物包含層である層厚約13cmの暗緑灰色の砂質シルトからシルト質砂である。径5~10mmの炭化物が点在する。比較試料として分析する。

HD 1-3: HD 1-2の下位の砂質シルトからシルト質砂である。表面は暗緑灰色であるが、内部の新鮮な部分は青灰色を呈する。地山層である。比較試料として分析する。

(2) 畑田遺跡A区南東

HD 2: 灰色粘土層で、SD 101の溝の部分に分布するため、層厚約35cmと最も厚い。径約2mmの高師小僧が少量みられる。径約4mmの黒褐色斑点状の植物根跡が点在する。

HD 3: 灰色粘土層である。ST 150住居跡内に凹地にたまるように堆積している。やや紫灰色がかり、層中に植物遺体が層状に堆積しており、砂質の部分がブロックからパッチ状にみられる。

HD 4: 遺構覆土に含まれる明灰白色を呈する粘土であり、灰色粘土層とは異なり自然堆積したものではない。高師小僧が含まれる。比較試料として分析する。

(3) 中野遺跡A区基本層序地点

NN 1: 灰色粘土層に相当する層である。高師小僧が少量みられる。A区南西部の壁面より採取した。

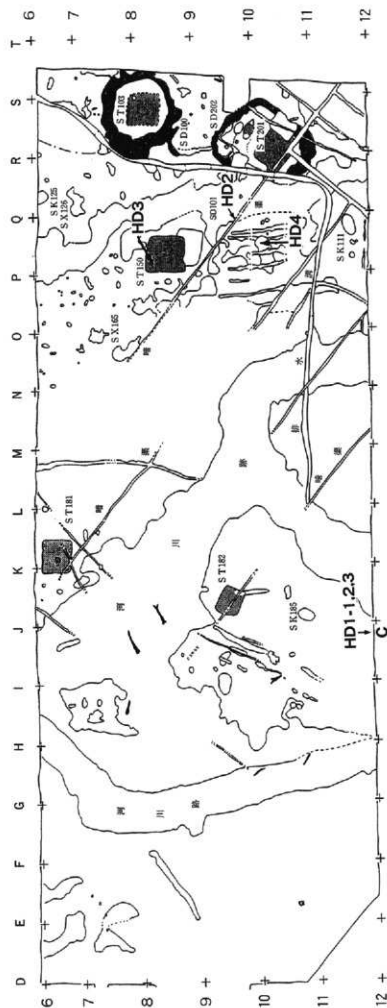


図1 畑田遺跡における試料採取地点

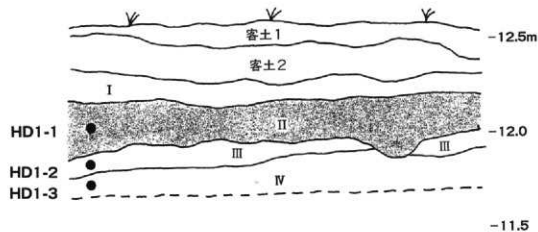


図2 畑田遺跡基本層序C地点における試料採取位置
(スクリーントーンの部分はいわゆる灰色粘土層)

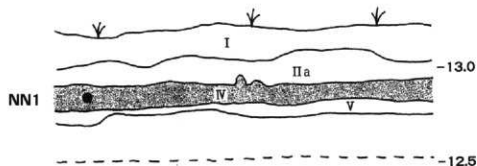


図3 中野遺跡基本層序地点における試料採取位置
(スクリーントーンの部分はいわゆる灰色粘土層)

3. 分析方法

- (1) 湿潤重量で約100gの試料を秤量後1000ccのビーカーに入れ、過酸化水素水(H₂O₂) 6%溶液を加え分散させる。分散後水を加え、4.5φ(0.044mm)の標準フルイを通して、粗粒成分と細粒成分に分離する。
- (2) 粗粒成分については恒温乾燥器で110°Cで乾燥し、標準フルイを1/2φ間隔で4.5φまで重ねて振とうしフルイ分けする。
- (3) 細粒成分については遠心沈降式粒度分布測定装置(高津SA-CP2)により光透過法による粒度分析を行なう。
- (4) 測定結果は、粒度分布をヒストグラムにして表した(図4, 5)。また、Friedman(1961, 1967)の積率法により平均粒径、淘汰度、歪度、尖度を算出した(表1)。計算式は以下の通りである。

$$\text{平均粒径} \quad x\phi = (\sum fi xi) / 100$$

$$\text{淘汰度} \quad \sigma\phi = \sqrt{(\sum fi (xi - x\phi)^2) / 100}$$

$$\text{歪度} \quad \alpha\phi = (\sum fi (xi - x\phi)^3) / 100(\sigma\phi)^3$$

$$\text{尖度} \quad \beta\phi = (\sum fi (xi - x\phi)^4) / 100(\sigma\phi)^4$$

fi: 各粒度階の重量% xi: 各粒度階の中央粒径値(ファイ尺度)

粒度分析結果はすべてφ(phi, ファイ)尺度で表示している。ファイ尺度では、粒径d mmの粒子は φ = -log₂d となり、1 mmが0 φである。これより粒径が半減することにφの値は1ずつふえ、粒径が倍になるほど1ずつ減る。すなわち、0 φを基準に正(+)の値が大きいほど細粒で、負(-)の値が大きいほど粗粒になる。また、統計的諸指標値のうち、平均粒径は粒度分布全体を代表する値である。淘汰度は粒子の大きさのそり方を表し、値が0に近いほど粒径がよくそろっていることを示す。歪度は、粒度分布のかたよりを表し、0を対称に正ほどモードが平均より粗粒の方にかたより、逆に負は細粒の方に偏っていることを示す。尖度は粒度分布曲線の山の尖り方を表し、値の大きいものは突出した曲線を、小さいものは偏平な曲線を表す。

- (5) 堆積物中の碎屑粒子の粒径区分は、-1.0φ(2 mm)~4.0φ(1/16mm: 0.0625mm)が砂、4.0φ~8.0φ(1/256: 0.0039mm)がシルト、8.0φ未満のものが粘土である。なお、分析結果では9.5φ未満の粒子は10.0φとして一括する。
- (6) HD1-1の灰色粘土層とHD4の粘土層について、30×20×5 mm程度のチップを切り出し、乾燥させ、エポキシ系樹脂で固化処理をして、岩石薄片作製と同様な方法で0.03~0.02mmの厚さの薄片を作製する。堆積物の特徴を記載するために偏光顕微鏡により観察を行なう。

4. 堆積物の特徴

(1) 粒度組成

畑田遺跡の基本層序C地点においては、灰色粘土層のHD 1-1は4.0φ以上の砂サイズの粒子はほとんど含まれない。平均粒径0.0081mmでシルトが主体となり、8.0φ未満の粘土粒子も比較的多く含まれる。HD 1-2は灰色粘土層とは明らかに異なり、砂サイズの粒子も比較的多く粗粒である。平均粒径0.0511mmで、細粒砂からシルトが主体となる。HD 1-3はHD 1-2と同様に砂サイズの粒子が含まれ、平均粒径0.0424mmで、5.0φ付近の割合が少ないが細粒砂からシルトが主体となる。HD 2は分析した灰色粘土層の中では最も細粒である。砂サイズの粒子はほとんど含まれず、平均粒径0.0065mmで、シルトが主体で粘土分も多く、9.5φ未満の細粒な粒子も多くみられる。HD 3は砂サイズの粒子はごくわずかで、平均粒径0.0105mmで、シルトが主体で粘土分も多く、9.5φ未満の細粒な粒子も多くみられる。NN 1も他の灰色粘土層と同様に砂サイズの粒子は少なく、平均粒径0.0095mmでシルトが主体で粘土分も多い。9.5φ未満の粒子も比較的多く含まれる。遺構覆土であるHD 4の粘土は平均粒径0.0129mmで、シルトから粘土がほとんどで、9.5φ未満のものも多く含まれ全体に非常に細粒であることがわかる。さらに、-0.5φ(1.41mm)~1.5φ(0.35mm)の部分に粗粒な砂が含まれるのが特徴的である。このように細粒なものと同粒なものも含まれるため、淘汰度が2.624であり、他の試料より淘汰が悪い。

表1 畑田・中野遺跡堆積物の統計的諸指標値

試料No	平均粒径 φ (mm)	淘汰度 φ	歪度 φ	尖度 φ
HD 1-1	6.950(0.0081)	1.381	0.219	3.000
HD 1-2	4.286(0.0511)	1.911	0.945	3.560
HD 1-3	4.561(0.0424)	1.916	0.705	3.000
HD 2	7.265(0.0065)	1.442	0.130	2.654
HD 3	6.586(0.0104)	1.634	-0.030	3.582
HD 4	6.282(0.0129)	2.624	-0.878	3.399
NN 1	6.717(0.0095)	1.560	0.089	3.008

φ: phi, ファイ

(2) 堆積物の薄片の観察 (図版参照)

[HD 1-1]: 灰色粘土層

シルト、粘土サイズの粒子から構成され、全体に均質で細粒である。構成粒子は石英、長石類、風化した雲母類およびその他の粘土の粒子などからなる。また、部分的に褐色を呈するパッチ状の褐鉄鉱の部分が見られ、これは高師小僧とよばれる地下水中に溶解している鉄分が堆積物中の植物体を交代して生じた水酸化鉄の沈降物である。

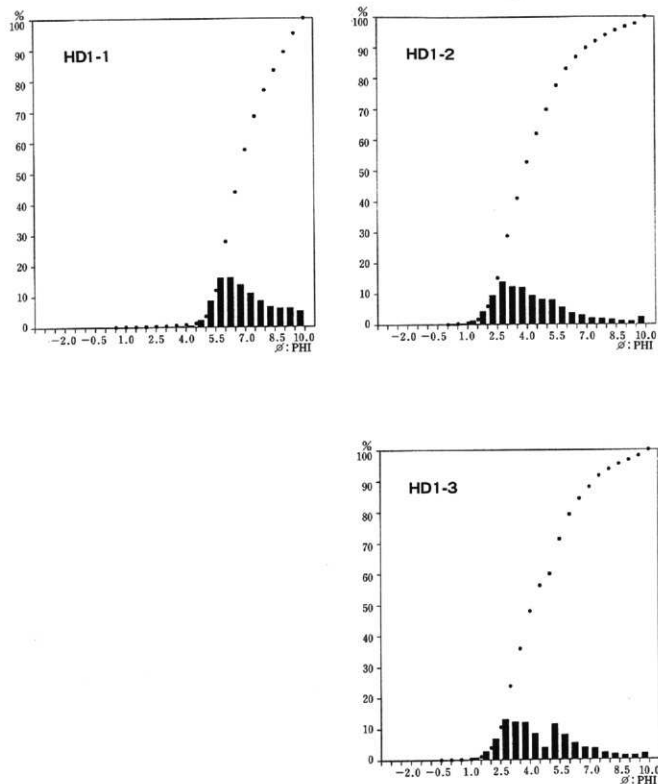


図4 畑田遺跡基本層序C地点堆積物の粒度組成(・は推算%示す)

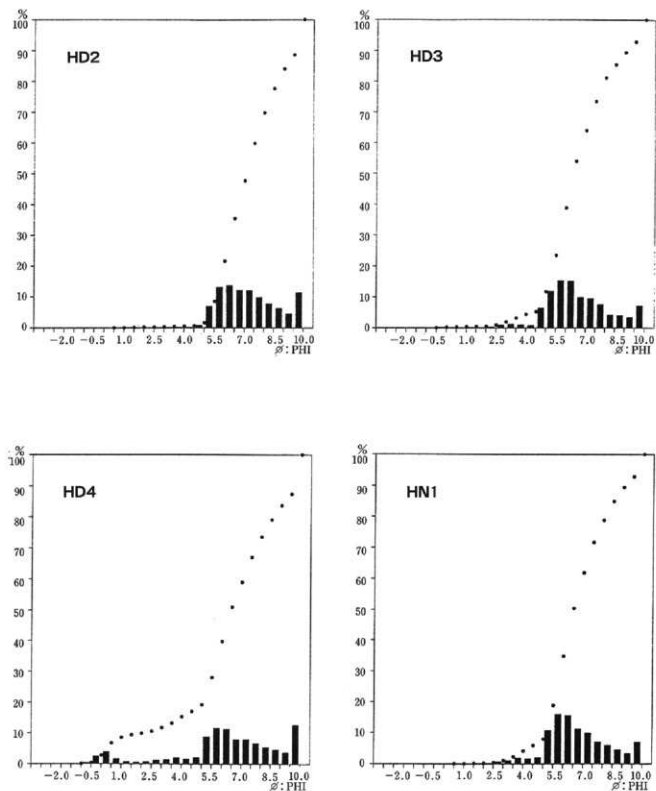


図5 畑田・中野遺跡の堆積物の粒度組成（・は積算%示す）

[HD4]：遺構覆土の粘土

基質（マトリックス）の部分は石英、長石類、風化して粘土化した雲母類をはじめとするシルト、粘土サイズの細粒な粒子からなり、均質である。これらの基質の中に量的には多くはないものの、粒径約0.5~1.0mmの粗粒な火山岩の岩片や石英、長石類、雲母類の粒子が含まれる。そのため、淘汰が悪く不均質な部分が見られる。この結果からもわかるように、この粘土は灰色粘土層とは明らかに特徴が異なり、発掘調査段階で露出した周辺に堆積層には類似したものはみられない。この粘土は出土状況から自然堆積のものではないので、なんらかの目的でどこからか持ち込まれた可能性がある。その起源については、この遺跡でさらに発掘面より深い層準の地層のものか、あるいは全く異なる外部からのものである可能性が考えられるが、現段階では産地を特定するようなデータが少ないため不明な部分が多く、今後の課題として検討したい。

(3) 灰色粘土層の堆積環境

山形県・山形県教育委員会(1988)によると空中写真により微地形分類から畑田・中野遺跡周辺地域には自然堤防状の微高地と後背湿地からなっているとしている。また、角田(1976)は庄内平野南部の大山川流域における沖積層のボーリング試料から、堆積層が砂層と泥層の互層からなることを見だし、この地域は自然堤防と後背湿地のくりかえしからなる自然堤防性平野と考えることができるとしている。畑田・中野遺跡周辺地域は大山川、湯尻川、千安川などの河川が流れており、これらの河川の増水、氾濫とともに氾濫原となり自然堤防および後背湿地が河道にそって形成され、さらに、この地域では、これらの河川の流路変遷による侵食、堆積作用により、自然堤防堆積物、後背湿地堆積物がくりかえし堆積していると推定される。このような状況は古墳時代に至っても続いていたと考えられ、遺跡内にも河川跡が埋積されているところからみられることから、増水、氾濫が起こりやすい環境であったと考えられる。

また、洪水時などに河川が増水、氾濫した場合、砂などの比較的粗粒な物質は河道近くに堆積し、自然堤防堆積物を形成するが、河道から遠ざかるにつれて流速が遅くなるので堆積物はシルト、粘土などの細粒物質となり、外側の氾濫原に広がり、一部は凹地をなし後背湿地となることが多い(大矢, 1981など)。今回の粒度分析結果から畑田・中野遺跡の調査区内に分布する灰色粘土層(HD1-1, HD2, HD3, NN1)はどれもシルトから粘土を主体とした細粒で比較的均質な堆積物であることがわかり、下位の古墳時代の包含層(HD1-2)および地山層とされる層(HD1-3)とは明らかに異なるものである。この灰色粘土層の粒度組成の特徴と、遺跡全体に広く分布することを考慮して堆積環境を考える。まず、古墳時代の遺物包含層堆積後に近くの河川で増水、氾濫が起こり、氾濫時の水中にシルト、粘土の粒子が浮遊し、懸濁した流水が河道を越えて氾濫原を広く覆う。そして、水の流れがほとんどない比較的静穏な環境で懸濁した水が氾濫原となった遺跡内に停滞し、その後減水したため、シルト、粘土の細粒が均質な粒

子が灰色粘土層として堆積したものと考えられる。

引用・参考文献

Friedman, G. H. (1961) Distinction between dune, beach and river sands from the textural characteristics. *Jour. Sed. Petrol.* 31 : 514-529.

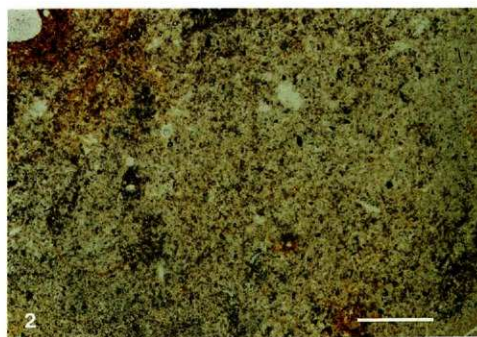
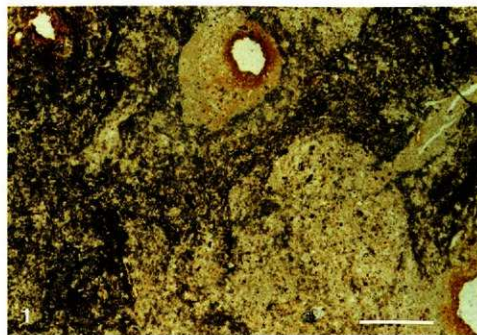
Friedman, G. H. (1967) Dynamic processes and statistical parameters compared for size frequency distribution of beach and river sands. *Jour. Sed. Petrol.* 37 : 327-354.

電瀬良明(1990) 「自然堤防の諸類型—河岸平野と水害—」, 202pp, 古今書院。

角田清美(1976) 庄内平野の地形について。庄内考古学, 13 : 1-20

大矢雅彦(1981) 自然堤防。『地形学辞典』: p.240, 二宮書店。

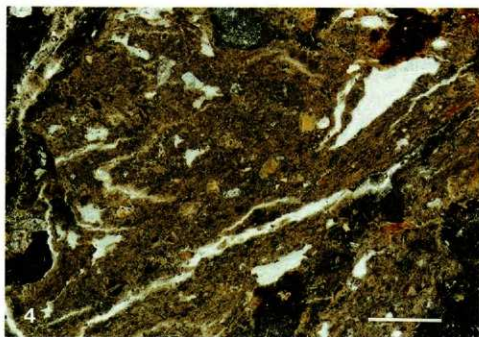
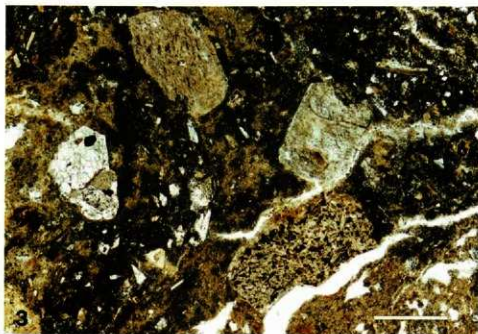
山形県・山形県教育委員会(1988) 「矢矧A遺跡・矢矧B遺跡・清水新田遺跡 発掘調査報告書」。



図版1 試料HD1-1の薄片写真(スケール:0.5mm, 偏光顕微鏡, 下方ボーラーのみ)

1: やや不均質な部分, 上部に植物根跡がみられる

2: 細粒で均質な部分



図版2 試料HD 4の薄片写真(スケール:0.5mm, 偏光顕微鏡, 下方ポーラーのみ)
 3:岩片が含まれる部分
 4:細粒で比較的均質な部分

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第22集

畑田 道 跡
 中野 道 跡
 発掘調査報告書

1995年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
 〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
 電話 0236-72-5301

印刷 株式会社 田宮印刷所

1995-763